総社村東 03 遺跡

－工場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2023

前 橋 市 教 育 委 員 会
株式会社デンソーワイパシステムズ
株 式 会 社 甲 セ オ リ ツ

総社村東 03 遺跡

－工場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

【半両銭】前漢 B.C.175 年
中国で最初の統一貨幣

2023

前 橋 市 教 育 委 員 会
株式会社デンソーワイパシステムズ
株 式 会 社 甲 セ オ リ ツ

は　じ　め　に

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる群馬県の県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、２万年前から人々が生活を始め、市内のいたる所にその息吹を感じられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。律令時代になってからは、総社・元総社地区に山王廃寺、国府、国分僧寺、国分尼寺など上野国の中枢をなす施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎬をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東七名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた前橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地となり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され、日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する総社村東０３遺跡は縄文時代以降、長きに亘り遺跡の密集する利根川右岸にあります。周辺では、古代の集落が多く確認されていますが、今回の調査では、古代の集落以外に、中世の土坑から大量の埋蔵銭が出土しました。本市ではこれまでにない量で貴重な発見となりました。

残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、開発者である株式会社デンソーワイパシステムズをはじめ、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進めることができました。また、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

令和５年９月

前橋市教育委員会

教育長　　吉　川　真由美

例　　言

1．本報告書は工場建設に伴って実施した総社村東 03 遺跡の報告書である。
2．遺跡の所在地は前橋市総社町総社大字大屋敷 2062 番地外である。
3．試掘調査は、前橋市教育委員会が令和4年 7 月 20 日に実施。
　発掘調査は、株式会社甲セオリツが実施した。
4．発掘調査並びに整理作業に係る経費は株式会社デンソーワイパシステムズ・株式会社萬栄に負担いただいた。
5．期間　発掘調査　令和4年 12 月8日～令和5年 1 月 22 日
　　整理作業　令和5年 1 月 23 日～ 9 月 30 日
　　調査面積　240㎡
6．発掘調査は大塚昌彦が担当、石井克己が補佐した。
　遺構写真、遺物写真は石井克己が行った。
　遺構測量はタナカ設計、空中写真はよろず屋神﨑が行った。
　自然科学分析は株式会社古生態研究所が行った。
7．本書の執筆はⅠ調査に至る経緯を前橋市教育委員会が、Ⅵ自然科学分析を（株）古生態研究所高橋敦が、その他は大塚が行った。

8．遺物整理は、髙橋実果、一柳由美子、髙木奈保美、湯本裕美、林田みどり、秋元智子が行った。
9．調査に関わる図面・写真・台帳・出土遺物は、前橋市教育委員会が一括保管している。
10．発掘調査から報告書作成に際し、以下の諸機関並びに諸氏により、ご教示・ご協力を賜りましたので記して感謝申し上げる。

群馬土地株式会社　株式会社古生態研究所　川端建材有限会社　タナカ設計　有限会社高澤考古学研究所
有限会社歴史考房まほら　よろず屋神﨑　大西雅広　笠原仁史　小島純一　澤田福宏　大工原豊
高橋　敦　田中隆明　外山政子　中村博樹　三浦京子　前原　豊　増田　修　山下歳信　株式会社萬栄

凡　　例

1．遺跡の略称　総社村東 03 遺跡（4A280）である。
2．挿図に国土地理院発行の2万5千分の1「前橋」を使用した。
3．本書に使用した座標はすべて世界測地系（測地成果 2011）である。
4．遺構図・遺物実測図の縮尺は各図に明示している。
5．遺構断面の水準値は海抜を示している。
6．挿図における方位（N）は座標北を示す。
7．図中で使用したトーンは以下のとおりである。

焼土：　炭化材：　粘土：　地山：
須恵器断面：　陶磁器断面：　赤彩：　自然釉：
施釉：　鉄：　磨面：　煤：　漆：

目　次

はじめに
例言
凡例
目次

Ⅰ　調査に至る経緯…… 1
Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境…… 1
Ⅲ　調査の概要…… 2
Ⅳ　基本層序…… 5
Ⅴ　検出された遺構と遺物…… 6
　1　縄文時代の遺物…… 6
　2　古墳時代の遺構外遺物（埴輪）…… 6
　3　古墳時代・奈良時代の遺構と遺物…… 8
　4　中世以降の遺構と遺物…… 28
　　埋蔵銭 …… 29
Ⅵ　自然科学分析（古生態研究所　高橋　敦）…… 43
Ⅶ　発掘調査の成果と課題…… 46
Ⅷ　埋蔵銭を考える…… 50
　引用・参考文献
　写真図版
　報告書抄録

挿図目次

第１図　遺跡位置図…… 2
第２図　周辺遺跡図…… 3
第３図　総社村東 01・02・03 遺跡調査位置図 …… 4
第４図　基本土層図…… 5
第５図　縄文時代出土遺物実測図…… 6
第６図　古墳時代出土埴輪実測図 …… 7
第７図　総社村東 03 遺跡全体図 …… 7
第８図　１号住居実測図…… 8
第９図　１号住居出土遺物実測図…… 9
第10図　２号住居実測図……10
第11図　２号住居出土遺物実測図（1）……11
第12図　２号住居出土遺物実測図（2） ……12
第13図　３号住居実測図……13
第14図　３号住居出土遺物実測図（1） ……14
第15図　３号住居出土遺物実測図（2） ……15
第16図　４号住居カマド実測図……16
第17図　焼土・炭化材分布実測図……17
第18図　22 号遺構実測図 ……18
第19図　22 号遺構出土遺物実測図 ……18
第20図　１号掘立柱建物実測図……19
第21図　２号掘立柱建物実測図 ……19
第22図　３号掘立柱建物実測図……20
第23図　土坑実測図（1） ……21
第24図　土坑実測図（2） ……22
第25図　土坑実測図（3） ……23
第26図　土坑出土遺物実測図 ……24
第27図　１号井戸実測図……26
第28図　１号井戸出土遺物実測図……26
第29図　遺構外出土遺物実測図 ……27
第30図　中世以降遺構全体図 ……28
第31図　中世出土遺物実測図……28
第32図　18 号（埋蔵銭）・19 号土坑実測図 ……30
第33図　18 号（底面１貫文圧痕・緡縦断面）
・19 号土坑実測図 ……30
第34図　18 号土坑埋蔵銭実測図（平面は１貫文圧痕）……31
第35図　埋蔵銭１面・２面・３面取り上げ番号 ……33
第36図　埋蔵銭４面・５面・６面取り上げ番号……34
第37図　埋蔵銭７面・８面・９面取り上げ番号 ……35
第38図　埋蔵銭 10 面・11 面取り上げ番号及び
底面１貫文の圧痕……36
第39図　紐類の外観と横断面顕微鏡写真 ……45
第40図　総社村東 03 遺跡の土器編年（案） ……47
第41図　半両銭拓影図……55
第42図　緡紐実測図 ……56

表目次

第１表　周辺遺跡一覧…… 3
第２表　遺構一覧…… 25・26
第３表　遺物観察表…… 37 ～ 42
第４表　分析試料と観察結果……43
第５表　銭銘一覧表…… 52・53
第６表　銭種枚数一覧表……54
第７表　一緡枚数・重量一覧表……54

Ⅰ　調査に至る経緯

令和４年４月１日、総社町総社における工場建設を目的とした埋蔵文化財の取扱いについて前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）へ照会があり、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「前橋市０１１８遺跡」内であるため、文化財保護法第 93 条第１項の届出を行う必要がある旨を回答した。

同年７月 20 日、市教委による確認調査の結果、遺構を確認したため、遺跡の現状保存に向けて協議を行ったが、計画変更は困難であることから、記録保存を目的とした発掘調査を実施することで合意に至った。

発掘調査の実施にあたっては、土地所有者である株式会社デンソーワイパシステムズ（以下「開発者」という。）が発注することとし、また、市教委直営での調査実施が困難であるため、市教委の監理・指導の下、民間調査組織による発掘調査とした。

令和４年 12 月８日付けで開発者と民間調査組織である株式会社甲セオリツの間で業務委託の契約が締結されるとともに、両者に市教委を加えた三者で協定を締結し、発掘調査に着手した。

なお、遺跡名称「総社村東０３遺跡」（遺跡コード：4A280）の「総社」は「総社町総社」の町名を採用し、「０３」は過年度に実施した調査と区別するために付したものである。　（文化財保護課）

Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境

遺跡の所在する総社町は、前橋市中心市街地から北西に４㎞に位置する。遺跡東側には利根川が北から南へ流れ、西側には八幡川がある。八幡川の左岸に位置している。

総社町は榛名山東南麓に位置し、古墳時代から近世にかけての貴重な文化財の宝庫である。

古墳時代には総社二子山古墳（前方後円墳：６Ｃ後半）、愛宕山古墳（前方後円墳：７Ｃ前半）、宝塔山古墳（方墳：７Ｃ後半）、蛇穴山古墳（方墳：７Ｃ末葉）等の総社古墳群が造られている。

また、東日本最古の寺院の一つである山王廃寺、８世紀中頃には上野国府・国分寺が造られた。10 世紀前半の平将門や 12 世紀後半の足利俊綱による戦乱でこの地域の文化も荒廃したものと見られる。遺跡の東側を流れる天狗岩用水は秋元氏によって開削された。

この周辺の歴史的環境は、本遺跡を起点として説明したい。

西 400 mに国指定「山王廃寺」が位置し、東 650 mに方墳の「蛇穴山古墳」、東 550 mに方墳の「宝塔山古墳」、北東 550 mに方墳の「愛宕山古墳」、北北東 700 mに前方後円墳の「二子山古墳」がある。

南西部においては、1.6㎞で「上野国分寺」・1.1㎞で「上野国分尼寺」があり、さらにその南には「上野国府跡推定地」が存在している。

総社村東 03 遺跡のある場所は、古墳時代から律令期にかけての中心地域といえる。

総社村東遺跡は第１次調査が本遺跡の東 230 mで古墳時代後期から平安時代まで竪穴住居を 21 軒調査しており、時代の中心は奈良時代である。また、調査区中央に確認できた東西方向の堀の断面は薬研状である。中世の地割りで幅１～ 2m、深さは 2.4m と深く、地割り区画もしっかりされている。

第２次調査は本遺跡地の東隣である。古墳時代の竪穴住居は５軒、奈良・平安時代の竪穴住居は 15 軒、他３軒を確認している。

総社村東遺跡の南に面して大屋敷遺跡が所在する。６次発掘調査を実施し 313 軒の竪穴住居が確認されているが、道部分の調査で 10 倍以上の遺構数がまだ内蔵されている。祭祀的遺物・遺構が存在し、円面硯などの出土から官衙的性格が窺え、総社古墳群中の終末期古墳や山王廃寺との大きな結びつきが考えられ、注目される遺跡群である。総社村東遺跡とも遺跡の広がりは繋がっており、広い視野にたって検討していく必要がある。

Ⅲ　調査の概要

前橋市教育委員会文化財保護課が前橋市総社町総社字大屋敷 2062 番外全面積 2059.28㎡に対して 88.00㎡の試掘調査を令和 4 年 7 月 20 日に行う。

開発予定地に対してトレンチを南北方向に 4 本設定し、重機による掘削と人手による精査を行い、埋蔵文化財の確認を行った。

調査の結果は検出した遺構は竪穴住居跡 3 軒、土坑 6 基、柱穴 20 基を検出した。出土遺物は、土師器・須恵器、灰釉陶器片が確認された。

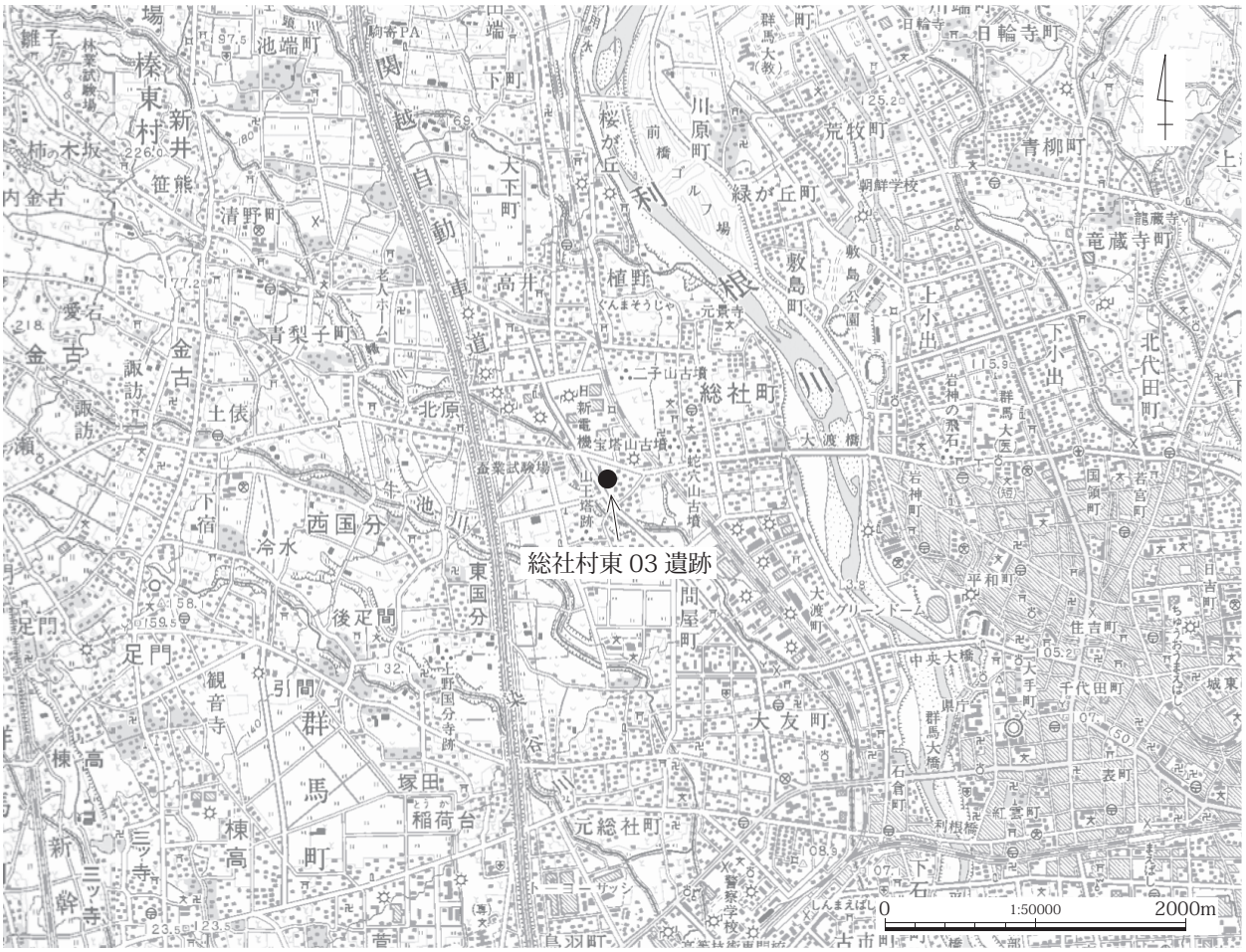
その為、発掘調査が必要となり、令和 4 年 12 月 8 日から令和 5 年 1 月 22 日まで発掘調査を実施した。

遺構の確認は、表土下約 1.0 ～ 1.2 mの総社砂層漸移層で実施した。

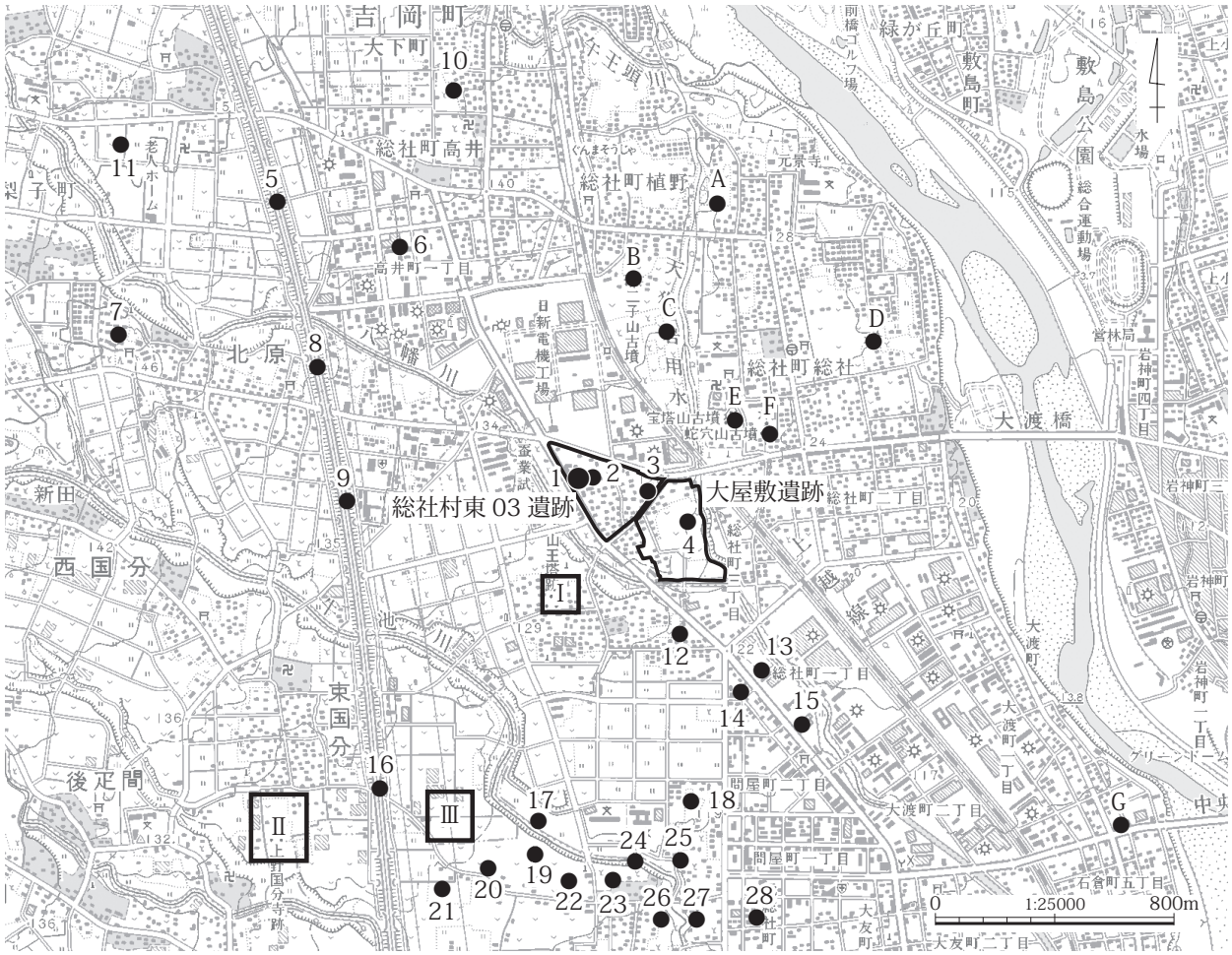
本調査の概要は、竪穴住居跡 4 軒、掘立柱建物 3 棟、土坑 49 基（埋蔵銭 1 カ所）、井戸 1 基を発見した。

竪穴住居は古墳時代後期が 1 棟、奈良時代が 2 棟、時期不明 1 棟である。掘立柱建物跡は 3 棟で奈良時代のものである。土坑は奈良時代～中世にかけて 49 基があり、その中の 1 基の土坑に北宋銭を中心とした渡来銭の埋蔵銭が収められていた。10 万枚を超える大量の古銭が緡で発見された。土坑の中にカマス袋（菰・筵）を敷いた埋蔵銭である。

出土遺物としては、土器類は土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・平瓶・小壺、灰釉陶器台付坏等、石製品は紡錘車・砥石、鉄製品は刀子、鍛冶椀型滓等がある。特殊なものとして土壁に白粘土を塗った漆喰壁がある。縄文時代の凹石・磨石、晩期土器、古墳時代の円筒埴輪・朝顔形埴輪片が遺構に伴わない形で出土している。



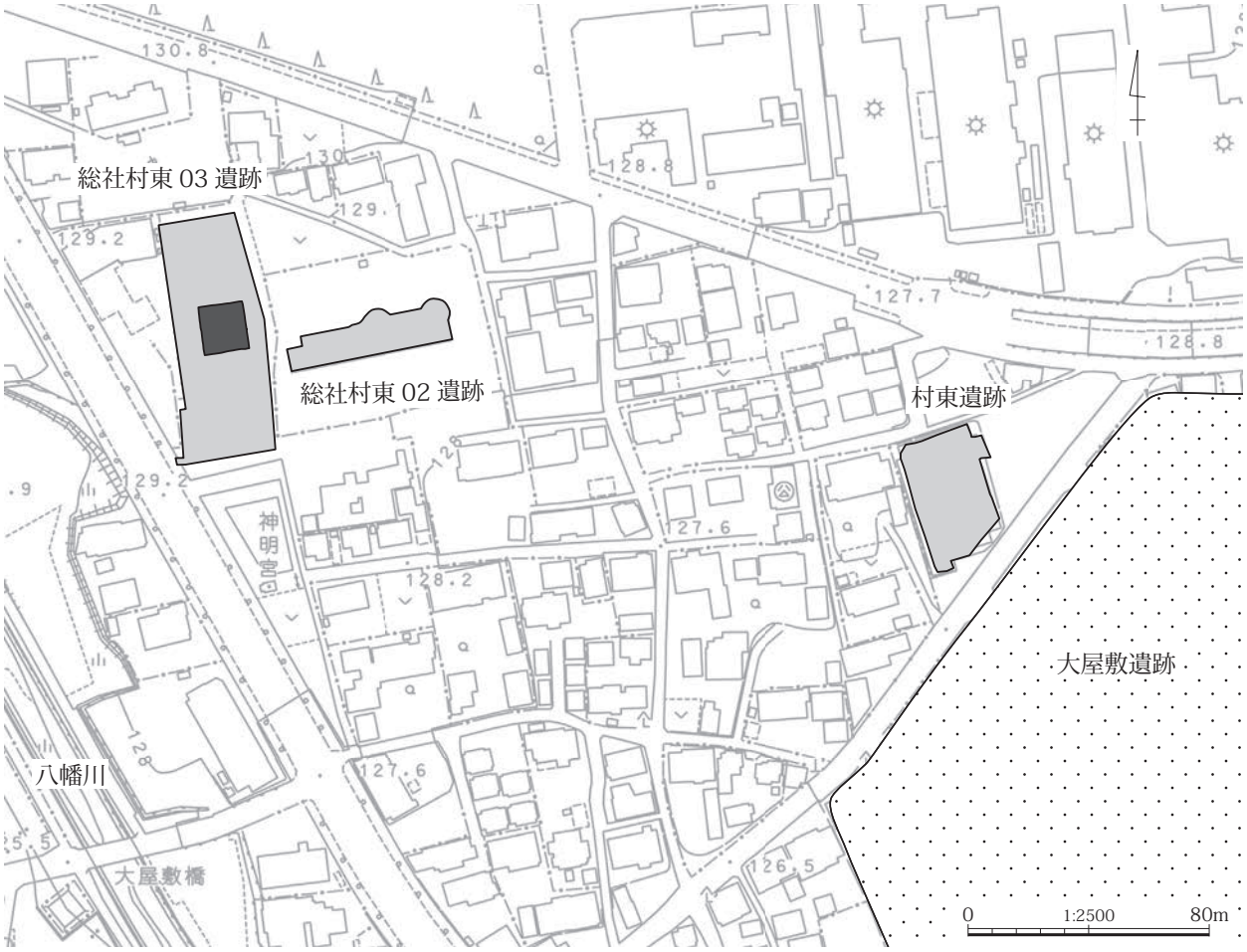
第 1 図　遺跡位置図



第２図　周辺遺跡図

第１表　周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	遺跡の概要
1	総社村東03遺跡	本遺跡
2	総社村東02遺跡	古墳・平安：住居跡
3	村東遺跡	古墳：住居跡・溝、奈良・平安：住居跡、中世：堀跡
4	大屋敷遺跡Ⅰ～Ⅵ	縄文・古墳・奈良・平安：住居跡、中世：堀跡
5	下東西遺跡	縄文：埋甕、弥生～平安：住居跡、他
6	柿木遺跡・Ⅱ遺跡	奈良・平安：住居跡・溝跡
7	熊野谷遺跡・Ⅱ・Ⅲ遺跡	縄文：住居跡、平安：住居跡・溝跡、他
8	北原遺跡	縄文：土坑・集石、古墳：水田、奈良・平安：住居跡
9	国分境遺跡・Ⅱ・Ⅲ遺跡	古墳・奈良・平安：住居跡、他
10	総社植野北開土遺跡	古墳：水田跡・溝跡、他
11	薬師前遺跡	縄文：ピット、奈良・平安：住居跡・溝跡
12	昌楽寺廻向遺跡・Ⅱ遺跡	奈良・平安：住居跡
13	産業道路東遺跡	縄文：住居跡
14	産業道路西遺跡	縄文：住居跡
15	稲荷塚道東遺跡	古墳・奈良・平安：住居跡、竈構築材採掘跡、井戸跡
16	上野国分僧寺・尼寺中間地域	縄文：住居・配石、平安：住居跡、中世：溝跡、道路跡
17	元総社北川遺跡	古墳：水田跡、平安：水田跡、他
18	総社甲稲荷塚大道西遺跡・Ⅱ遺跡	古墳・奈良・平安：住居跡・溝、中世：畠跡、近世：溝跡
19	総社甲稲荷塚大道西Ⅲ遺跡・Ⅳ遺跡 / 総社閑泉明神北Ⅲ遺跡	縄文・古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡・畠跡・溝跡
20	元総社小見内Ⅶ遺跡	縄文・奈良～平安：住居跡、中世：溝・畠・墓坑
21	元総社小見Ⅶ遺跡	縄文・古墳・奈良・平安：住居跡
22	元総社小見内Ⅲ遺跡	弥生・古墳・奈良～平安：住居跡、中世：墓坑・溝跡、他
23	元総社蒼海遺跡群(17街区)	古墳～奈良・平安：住居跡・道路跡、中世：墓坑
24	元総社小見内Ⅴ遺跡	中世：土坑
25	元総社牛池川遺跡	古墳：水田跡、他
26	総社閑泉明神北Ⅴ遺跡	古墳：水田跡、平安：住居跡
27	総社閑泉明神北遺跡	古墳：水田跡・畠跡・溝、中世：溝跡
28	閑泉樋遺跡	奈良・平安：溝跡
Ⅰ	山王廃寺跡	7世紀後半
Ⅱ	上野国分僧寺跡	奈良
Ⅲ	上野国分尼寺跡	奈良
A	稲荷山古墳	円墳（6世紀後半）
B	総社二子山古墳	前方後円墳（6世紀後半）
C	愛宕山古墳	方墳（7世紀前半）
D	遠見山古墳	前方後円墳（5世紀後半）
E	宝塔山古墳	方墳（7世紀中～後半）
F	蛇穴山古墳	方墳（7世紀末）
G	王山古墳	前方後円墳（6世紀中）



第 3 図　総社村東 01・02・03 遺跡調査位置図

調査日誌

12 月 7 日 作業員を入れて草刈り作業を行う。現場作業の資材を搬入する。

12 月 8 日 調査区の範囲を測量により測り出し、基準点測量を行う。

12 月 9 日 トイレ搬入・設置。

12 月 12 日 調査区の表土剝ぎを重機（バックホー 0.5㎥）で行う。

人力で遺構確認を一部行う。調査区の鉄杭と安全ロープで安全柵を設置する。

12 月 13 日 遺構確認により土坑 19 基、切り石を 3 カ所を確認する。

確認できた 1 号竪穴住居の土層ベルトを残し、調査を開始する。

12 月 14 日 遺構密度の高い南西部、全体に厚さ 10㎝ずつ下げて調査。サブトレンチを入れながら調査。

12 月 16 日 埋蔵銭を発見。前橋市教育委員会に報告。調査の方法を検討。

～ 30 日 埋蔵銭の取り上げは、緒（さし）毎に取り上げる方法で進める。

遺構密度の高い箇所にサブトレンチを入れながら、竪穴住居・土坑の調査を行う。

1 月 4 日～仕事始め。引き続き 18 号土坑の埋蔵銭の取り上げ作業をする。各土坑・竪穴住居の調査を行う。

1 月 9 日　埋蔵銭の取り上げ終了。10 日 筵の状況の写真撮影。18 号土坑に十字のトレンチ入れる。

確認後土坑全体を地中毎に切り取り、筵状況を保護し、取上げる。中世の小ピット、土坑調査を行う。

1 月 12 日 前橋市教育委員会文化財保護課監督員の発掘調査終了検査を受ける。

1 月 13 日～ 20 日 遺構の最終調査を行う。 1 月 17 日 トイレ汲み取り、トイレ回収。

1 月 20 日 ドローンによる写真撮影並びに遺構測量を終了。調査器材の撤収、簡易トイレ撤収で調査を完了。

1 月 22 日 重機（バックホー 0.5㎥）による埋戻し作業を完了。

Ⅳ　基本層序

敷地全体に砕石層が敷かれている。

１層　表土　暗褐色砂質土　浅間Ｂ軽石を混入している。

２層　黒褐色土　浅間Ｃ軽石を僅かに含む。小礫含む。締まりあり、粘性ややあり。

３層　黒褐色土　浅間Ｃ軽石を多く含む。締まりあり、粘性ややあり。

４層　灰黄褐色土　地山漸移層。シルト質粘土層。締まり・粘性あり。本層含む下層を「総社砂層」と呼ぶ。

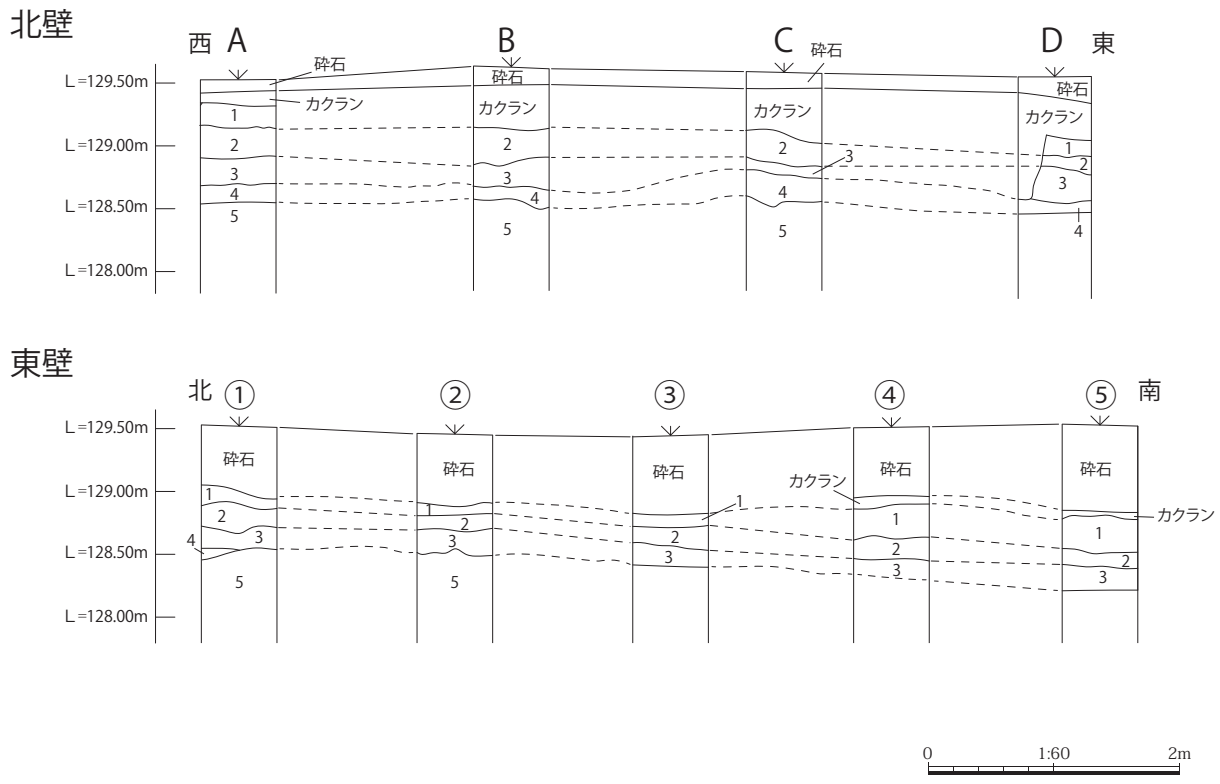
５層　黄褐色土　シルト質粘質土層。締まりあり。「総社砂層」である。

灰黄褐色の砂層は、総社・元総社付近を中心に利根川右岸一帯に広がり、本報告ではこの砂層を「総社砂層」と呼ぶ。この砂層は、As－Sj（浅間ー総社軽石：約 1.1 万年前）を含む前橋泥炭層の上にあり、総社砂層の堆積は約 1 万年前以降から始まったと考えられている。

４・５層の「総社砂層」と呼ぶ地盤は南東方向に微斜面になっている。

１・２・３層も同様に北壁では東西方向は、僅かに東側に傾斜している。東壁1・2・3層は東面の北側から南面に約2度の角度で傾斜している。東壁の南北土層では3層が約3度の角度で南側に傾斜している。全体として南東に緩傾斜してることが分かる。

遺構の集中する南西部は、北・東側には存在しない黒褐色土が総社砂層の上にのり、硬く締まり、粘性が強い地層となっている。この黒褐色土が形成されたところには古墳時代から奈良時代にかけての遺構が集中的に分布している。



第４図　基本土層図

Ⅴ　検出された遺構と遺物

1　縄文時代の遺物

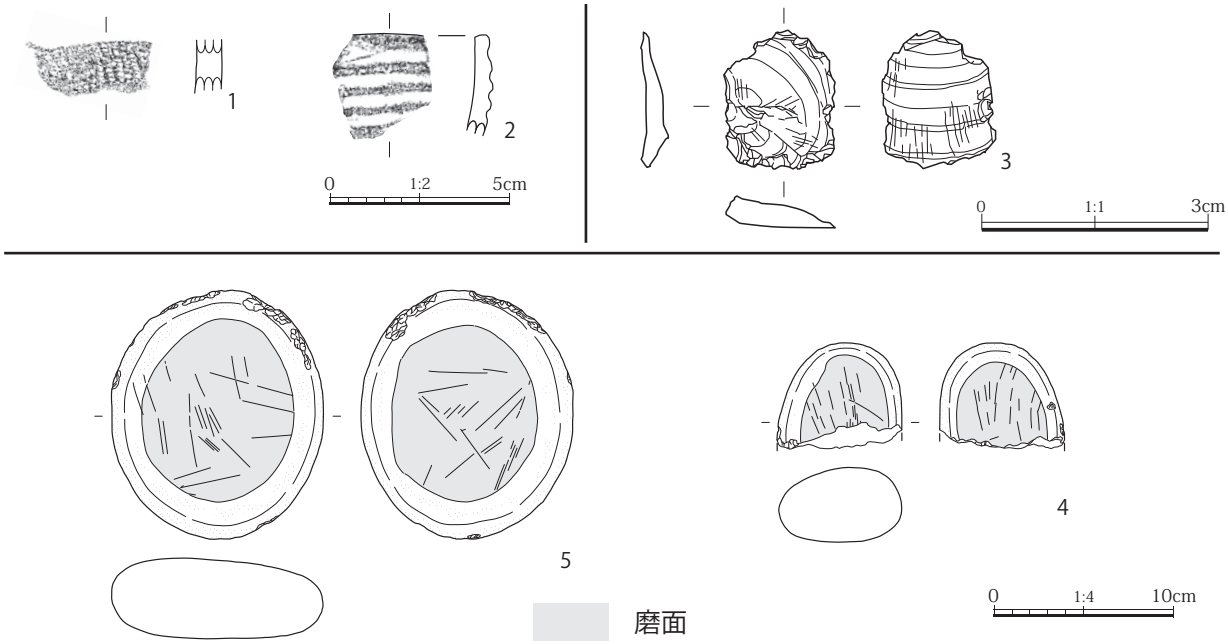
縄文時代の出土遺物は、縄文土器破片２点、黒曜石の小破片１点、礫石器である凹み石１点、敲石１点の合計５点出土があった。

１はＬＲ縄文を施文している。

２は口縁部破片で、平口縁に平行の横位沈線が口唇を含め４本施している。器厚は薄く、後晩期のものと考える。

３は黒曜石の細片である。

４・５は敲石である。４は半分欠損。どちらも表裏両面を擦っており、周縁部を敲いている。



第５図　縄文時代出土遺物実測図

2　古墳時代の遺構外遺物（埴輪）

古墳時代の出土遺物は、埴輪破片が 12 点で器種内訳は朝顔形埴輪２点、円筒埴輪 10 点である。

１～４は円筒埴輪である。

１は口縁部破片である。口唇幅は７㎜で外面斜めハケ、内面横ハケ調整を施している。

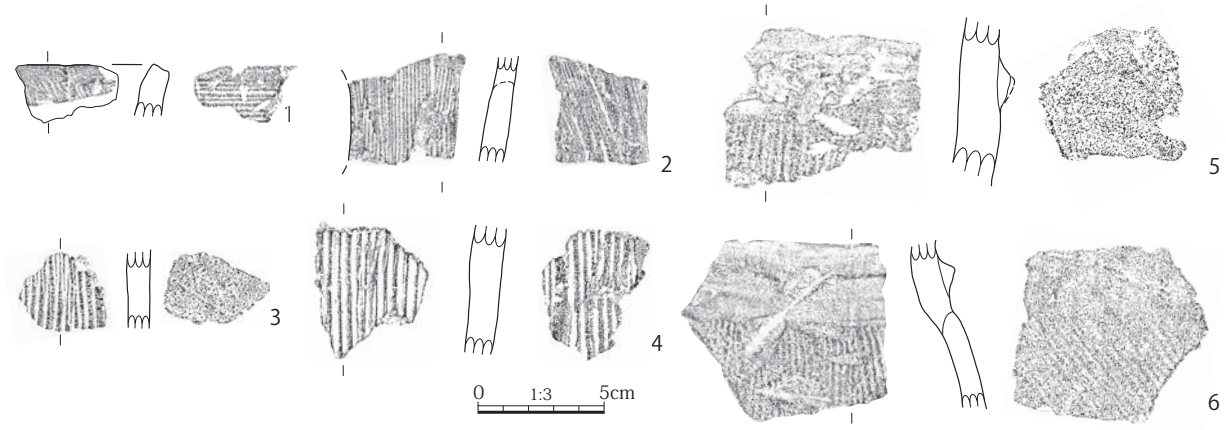
２は円孔の透かし部が一部残る。ハケの工具幅は 2㎝と細かく、外面縦ハケ、内面斜めハケ調整を施している。

３は縦ハケ調整、内面ナデ調整を施している。

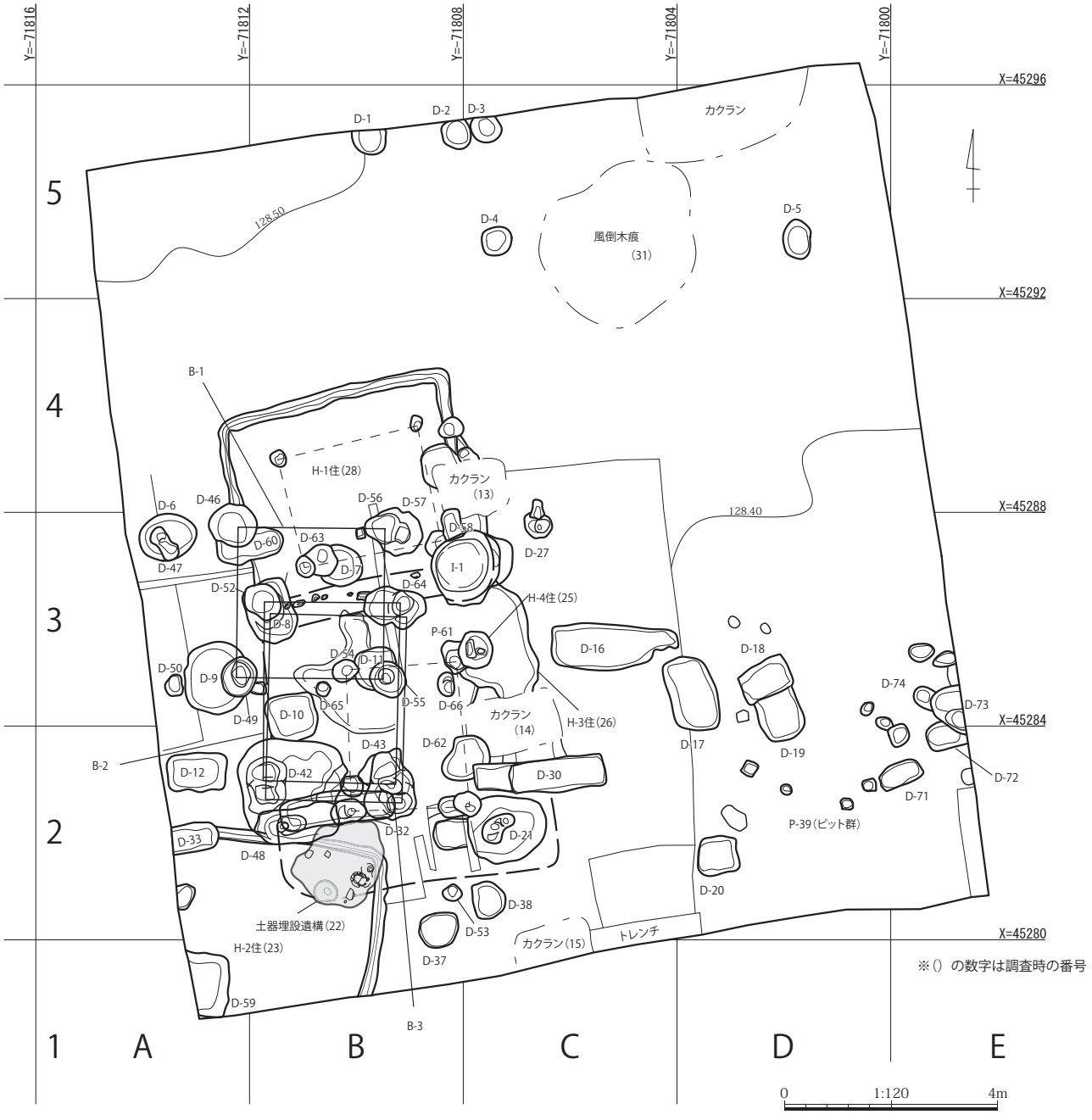
４は内外面ともに縦ハケ調整を施している。

５・６は朝顔形埴輪片である。５はタガ部がほとんど剥落しているが、タガは高さの低い台形である。

６は括れた朝顔部の断面三角のタガ部分がある



第６図　古墳時代出土埴輪実測図



第７図　総社村東 03 遺跡全体図

3　古墳時代・奈良時代の遺構と遺物

1）竪穴住居

1号住居（第8図）

1号住居はA・B・C―3・4グリットに位置し、遺構集中区の北側にある。

住居は北半分が地山の遺構確認面で良好に検出されたが、南側半分は3号住居と重複関係により3号住居に壊されており、本住居の方が古い。住居の主柱穴の位置が具体的に判明してることにより、壁から柱穴の距離を同じにして、南側を推定復元した。

平面形は、隅丸方形であり、住居規模は東西 4.40 m、南北推定 4.20 m、深さは 0.14 mである。

カマドは、一部焼土分布を確認された東壁に位置する東カマドと考えられるが、現在の建物の基礎穴により破壊され、カマドの全体像は把握されなかった。

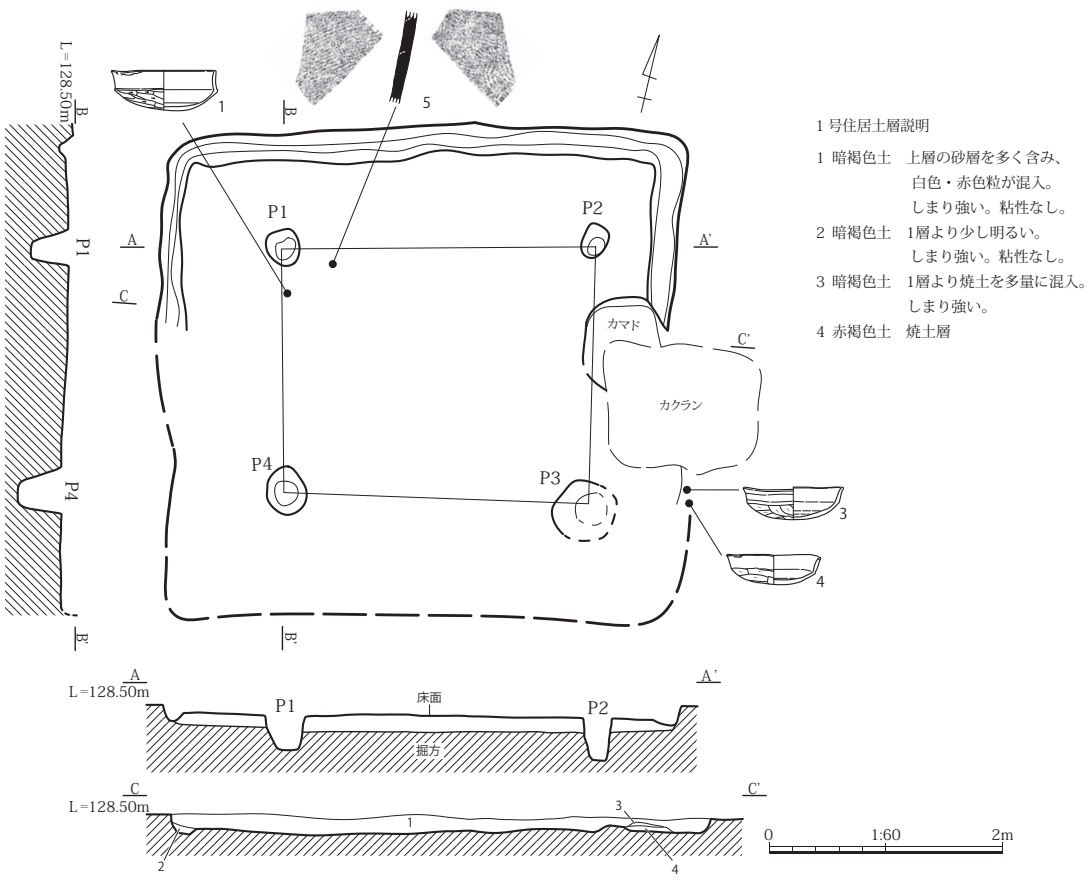
壁溝は住居北半部でほぼ壁下に確認されており、溝幅は 0.20 ～ 0.30 m、深さは 0.05 mで断面形は「U」字状である。

床は平坦であり、壁は直に立ち上がる。南半分は地山が異なっており、主柱穴は 4 本確認され、柱穴 1（P 1）は平面形が円形で直径 0.30 m、深さ 0.16 mである。

柱穴 2（P 2）は平面形が不整円形で長径 0.30 m、短径 0.20 m、深さ 0.24 mである。

柱穴 3（P 3）は平面形が円形で直径 0.48 m、深さは 0.23 mである。

柱穴 4（P 4）は平面形が楕円形で直径 0.35 ～ 0.40 m、深さ 0.37 mである。



第8図　1号住居実測図

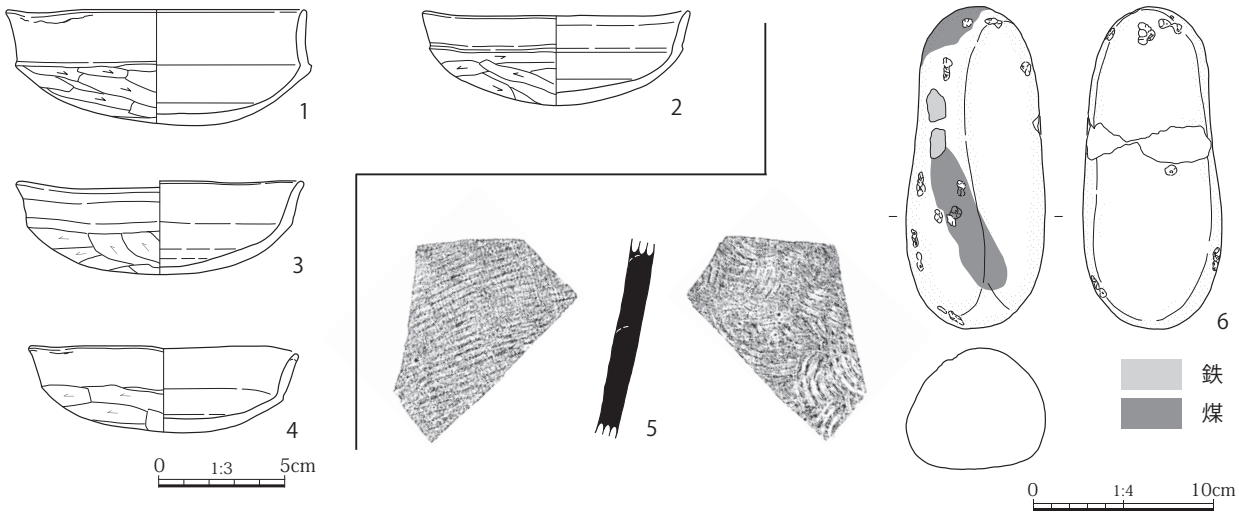
出土遺物（第９図）

出土遺物は少なく、土師器坏４点と須恵器大甕破片１点、礫１点である。他は土師器・須恵器の細片である。

礫は楕円形の川原石で長さ 17.0㎝、幅 7.4㎝、厚さ 5.5㎝である。本品は先端が黒色に焼けて火受けしている。さらに長手の１面に茶色の鉄錆がこびり付いて確認されており、小鍛冶に使用した関連遺物と考えられる。錆の範囲は縦 4.0㎝、横 2.5㎝あり、中心の２カ所に鉄錆が密着している。

また、広い面には擦痕が認められ、先端及び側片部には敲いた痕跡が認められた敲石である。

時期は古墳時代６世紀後半と比定される。



第９図　１号住居出土遺物実測図

２号住居（第 10 図）

２号住居は調査区の南西コーナー部にあたるＡ・Ｂ―１・２グリットに位置する。３号住居と重複関係で遺物の分布並びに焼土・炭化材分布が上部に存在し、２号住居の方が古いことがわかる。

２号住居は北西コーナー部の調査であり、平面形は隅丸長方形と考えられる。北壁長は約 4.0 m、東壁長は約 2.75 m、壁高は約 0.40 mである。

柱穴１（Ｐ１）は南東コーナーで、平面形が円形で、大きさは 0.44 m× 0.47 m、深さ 0.22 mである。４本柱穴として住居規模を推定すると一辺東西距離は６.0 m以上を測る。

壁溝は調査箇所では全周している。溝幅は 0.23 m前後で深さは 0.05 mである。

床は平坦であり、厚さ 0.06 ～ 0.07 mの貼床となっている。

カマドは東カマドと考えられ、東壁の南寄りに付設されているものと思われる。

出土遺物（第 11・12 図）

出土遺物は土師器坏 13 点・甕６点、須恵器蓋２点、坏２点、灰釉陶器高台付坏１点である。その他、土師器・須恵器破片がある。

４の土師器坏は内面底に「線刻」土器が認められる。線刻は「十」の変形文字である。

５の土師器坏は内面底に丸を描くいわゆる螺旋状ヘラミガキ及び体部内側に放射状斜め暗文状ヘラミガキが認められる。

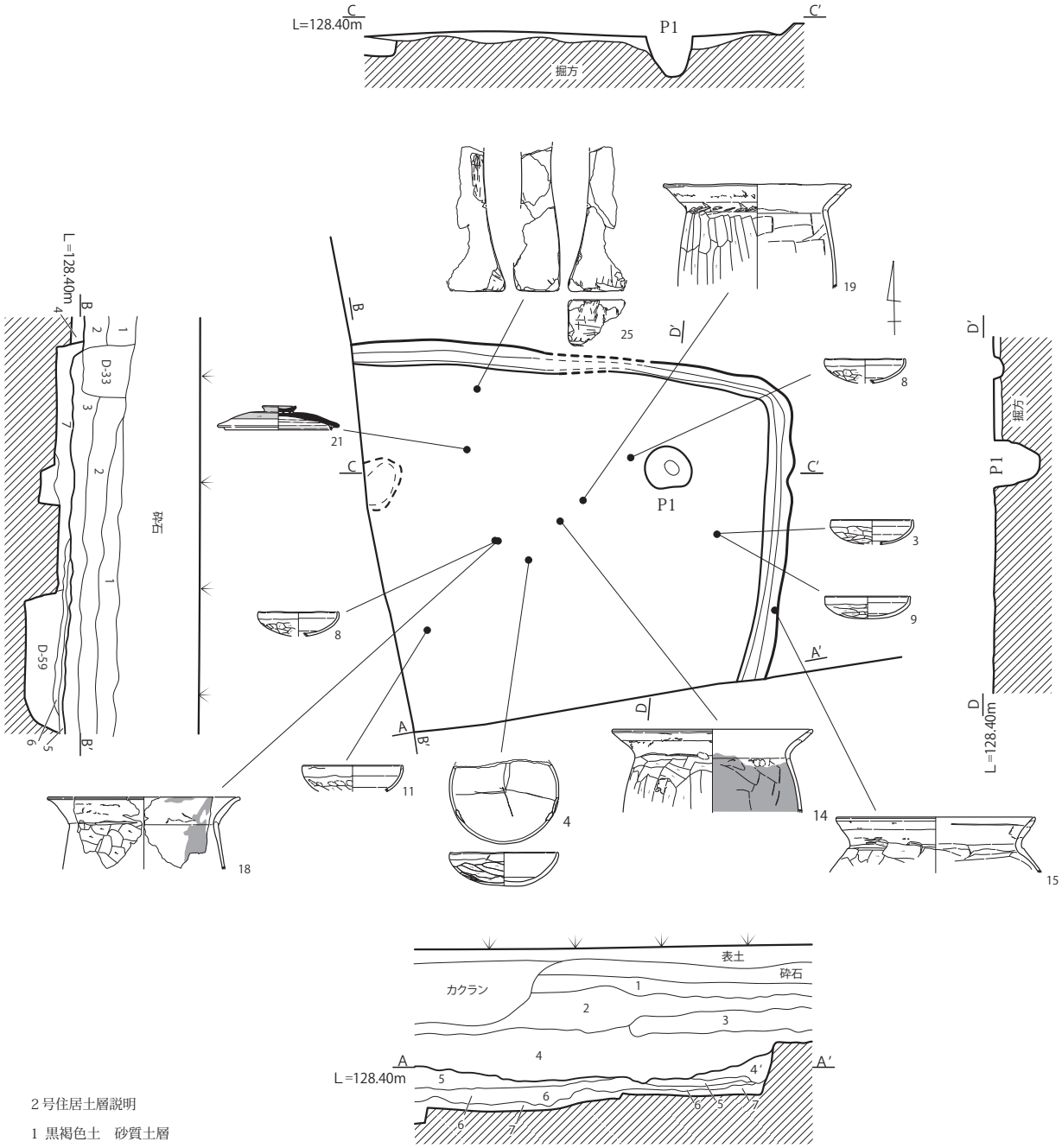
10 は土師器坏の中で唯一平底器形で、体部に指頭圧痕を連続させる製作調整である。また、13 は口縁が直線

的に立ち上がり、体部に稜を持つ模倣坏であり、この２つの遺物は別時代の遺物と考えられる。10 は後出する遺物、13 は先行する遺物と考える。

24 は須恵器高台付壺であり、外面に自然釉がかかっている。

25 は砥石である。砥石は割られる前に火熱を受け黒色化しており、その後、損壊している。

時代は、奈良時代８世紀前半に比定できる。

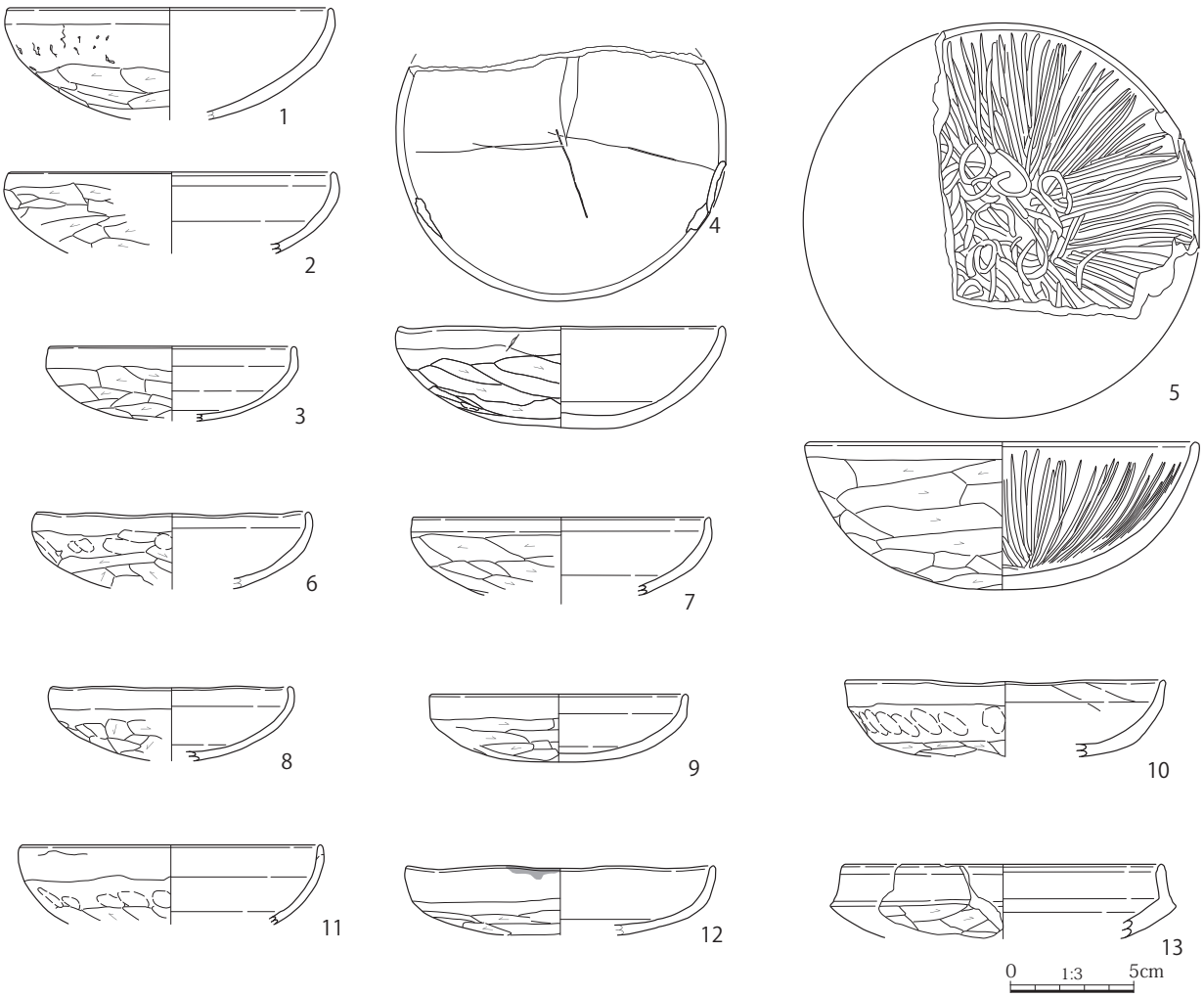


２号住居土層説明

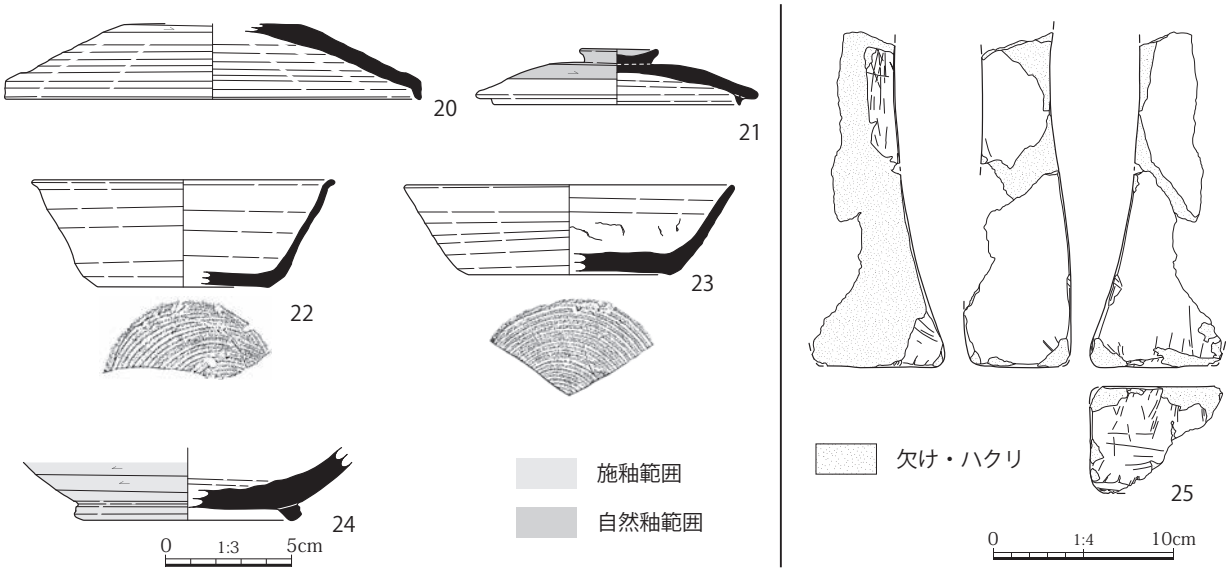
1 黒褐色土　砂質土層
2 暗褐色土　赤色粒Φ0.1～0.2㎝を混入。しまり・粘性強い。
3 暗褐色土　赤色粒Φ0.1～1.0㎝を混入。
4 黒褐色土　カーボン・赤色粒を混入。しまり・粘性強い。
4′黒褐色土　５層より明るく、しまり・粘性強い。
5 黒褐色土　カーボン・赤色粒・白色粘土を混入。しまり・粘性強い。
6 暗褐色土　白色粒・赤色粒を混入。しまり・粘性強い。
7 暗褐色土　６層より黒く、白色粒を混入。しまり・粘性強い。

0　1:60　2m

第 10 図　２号住居実測図



第 11 図　２号住居出土遺物実測図（１）



第 12 図　２号住居出土遺物実測図（２）

３号住居（第 13 図）

３号住居はＢ・Ｃ―２・３グリッドに位置する。１号住居と重複関係であるが本住居の方が新しい。

壁は東側の立ち上がりの一部が認められ、北側壁溝は工具痕と考えられる痕跡が長さ 2.60 mの間に点々と認められる。床面は貼床が土層断面で認められることにより、実際は住居の数が増えるものと考えるが平面的には検出することは出来なかった。

柱穴は４本が見つかっている。壁と主柱穴の距離を考えると約 1.50 mであり、西壁・南壁は、壁と主柱穴の距離で推定復元した。

住居の平面形は隅丸長方形を呈し、住居の規模は東西約 5.00 m、南北約 5.80 m、壁高 0.17 mである。

カマドは北壁にはなく、東壁にあると考えられるがカマド設置位置には近世の攪乱があり、破壊されているものと考えられる。

貯蔵穴は３号住居の南東コーナーに位置している 21 号土坑が相当すると考えられる。平面形は不整円形で、東西 1.48 m、南北 1.25 m、深さ 0.45 mである。砂礫凝灰岩の切石が５石設置され、その大きさは東西 1.20 m、南北 0.80 mの範囲に並んでいる。貯蔵穴としては少し大きいが、切石の内側を貯蔵穴とすることも考えられる。

柱穴は４カ所検出され、Ｐ１は平面形は楕円形で、大きさは 0.45 m× 0.38 m、深さ 0.68 mである。

Ｐ２は平面形は不整形で、大きさは 0.56 m× 0.38 m、深さ 0.64 mである。

Ｐ３は平面形は楕円形で、大きさは 0.50 m× 0.42 m、深さ 0.53 mである。

Ｐ４は平面形は楕円形で、大きさは 0.66 m× 0.55 m、深さ 0.80 mである。

東西の柱間はＰ１・Ｐ２間、Ｐ４・Ｐ３間の芯々は 2.10 m、2.20 mとほぼ同じである。

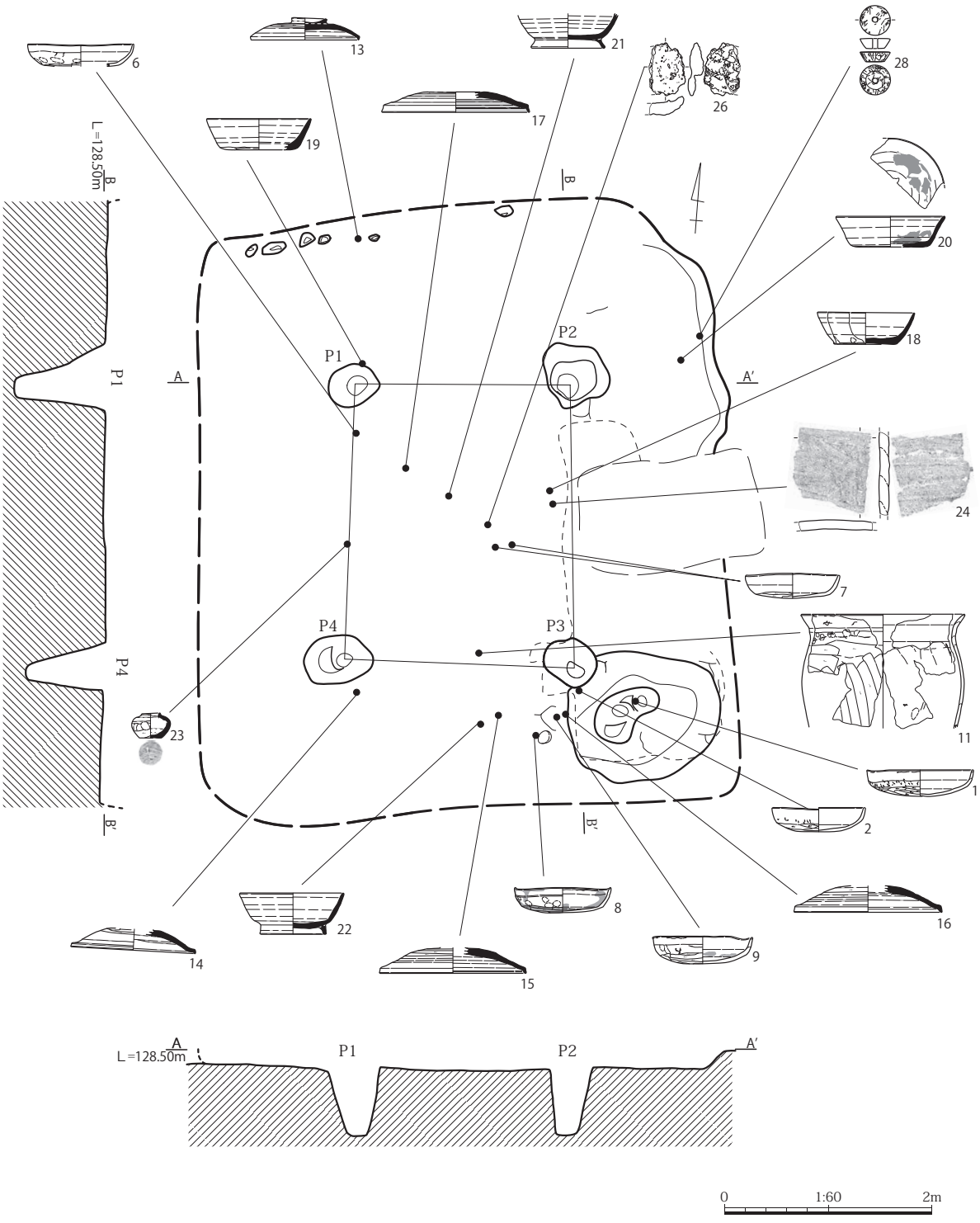
南北の柱間はＰ１・Ｐ４間、Ｐ２・Ｐ３間の芯々は 2.70 m、2.70 mとほぼ同じである。

出土遺物（第 14・15 図）

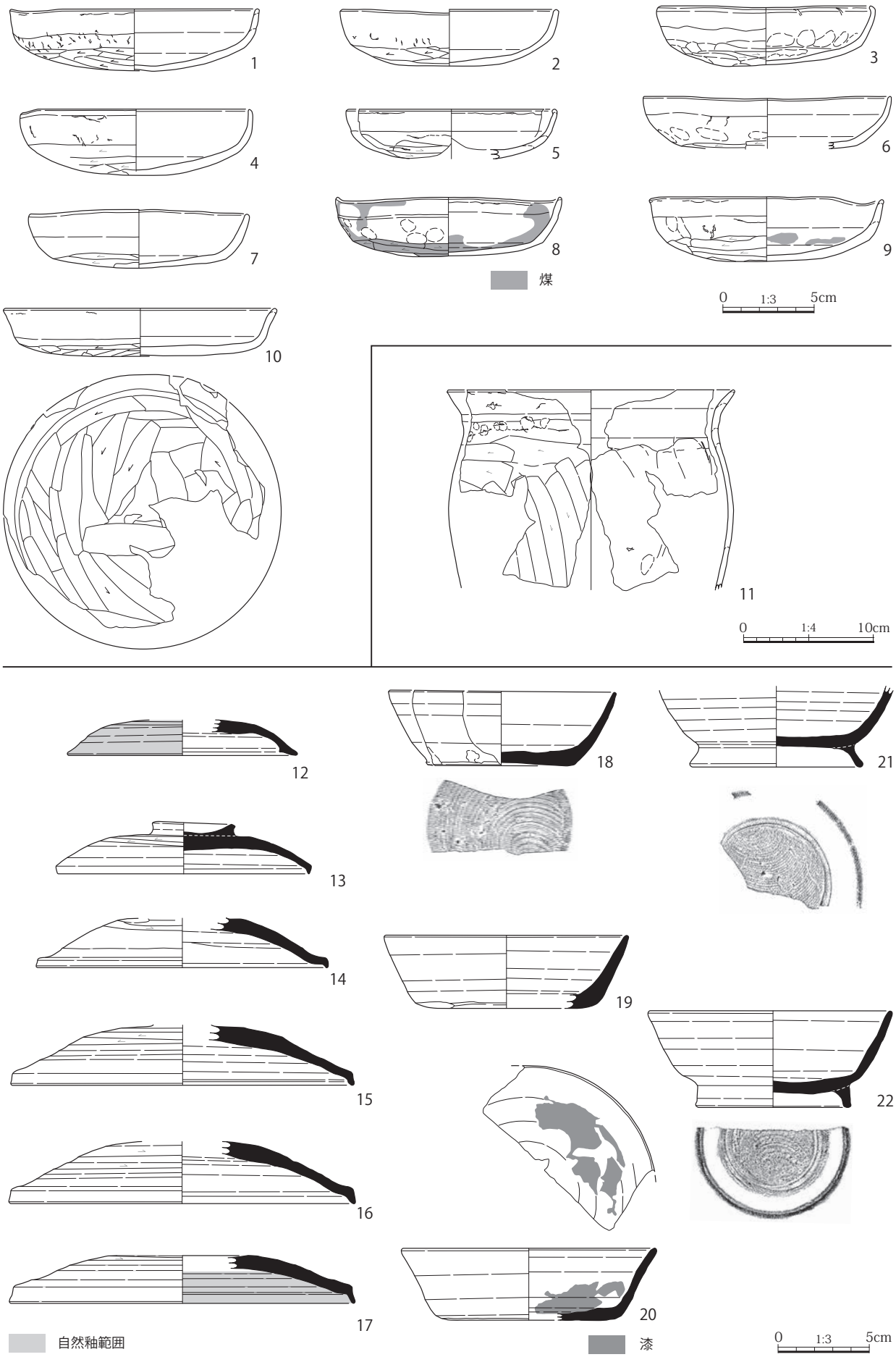
出土遺物は、土師器坏９点・皿１点・甕１点、須恵器蓋５点・坏４点・高台付坏２点・ミニチュア土器の短頸壺１点、板状土製品１点、刀子片１点、石製紡錘車１点、鍛冶椀型滓２点などの出土があった。

８・９の土師器坏は、煤が認められる。８は内外面に煤が認められるが、９は内面にのみ認められる。

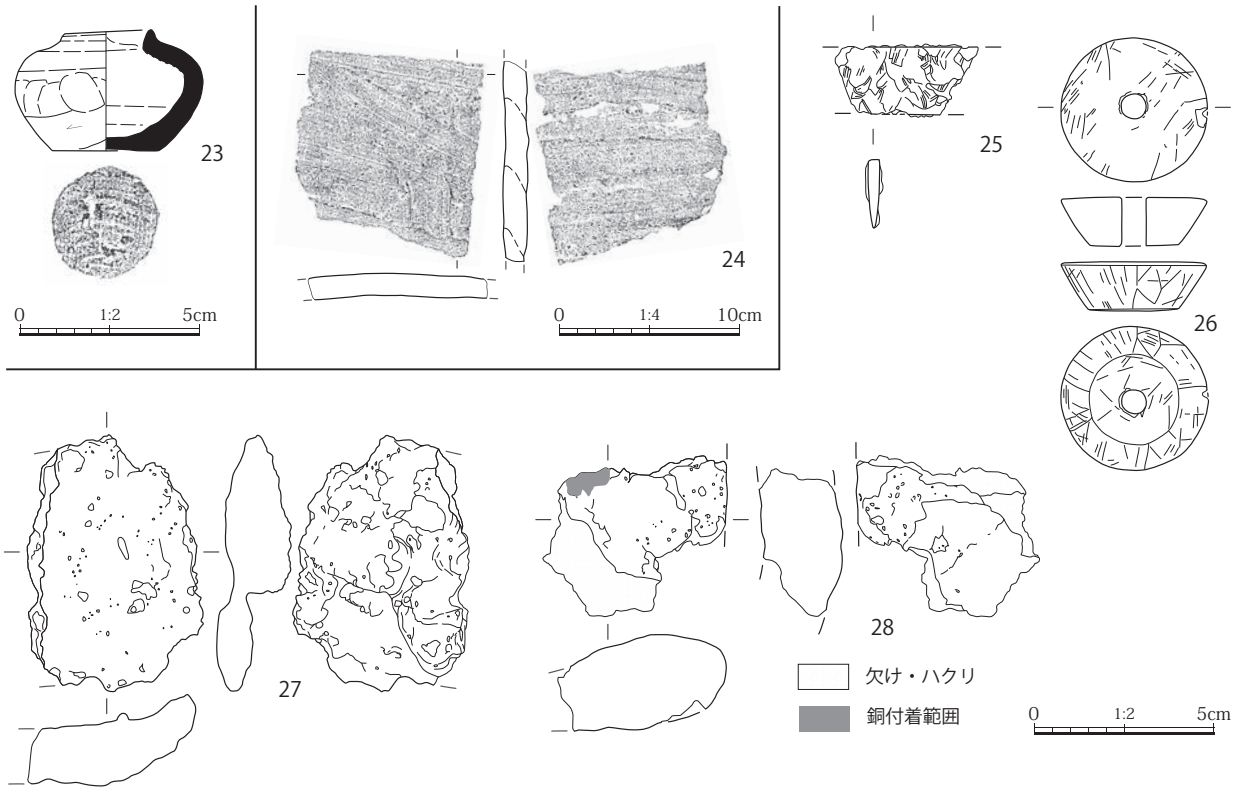
13 の須恵器蓋だけは口縁部の造りが異なっており、時期が異なっているものと思われる。また、18 の須恵器



第 13 図　3 号住居実測図



第 14 図　3 号住居出土遺物実測図（1）



第 15 図　3 号住居出土遺物実測図（2）

坏は口径・底径が他の坏に比べて小さく、時期が異なっているものと考える。

20 は須恵器坏の内底から体部中央にかけて漆の痕跡が認められる。

23 の須恵器短頸壺は完形品で墨を使う際の水滴として使われていたものである。

24 の板状土製品は、外面はハケ状工具による縦横斜めの調整が施されている。内面はヨコナデ調整で、輪積み製作の輪積み痕は顕著に残している。胎土には石英・片岩粒を多く含む。土製品とした場合、筒状となるのが通常であるが、この土製品は湾曲がほぼ見られない平らな破片である。カマドの正面に設置する門構えとして使用する土製品と考えられる（大塚 2017）が、その他、移動式置きカマドの可能性を指摘することもできる。

25 は鉄製品で刀子の刃部破片で前後を欠損している。

26 は石製紡錘車の完形品である。石材は蛇紋岩である。

27・28 の鍛冶椀型滓は 2 点出土している。椀型滓は 2 点とも破砕されている。27 は銅の錆が付いていることから銅製品も取り扱っていたかもしれないが、この場所で小鍛冶を行ったとは考えられない。

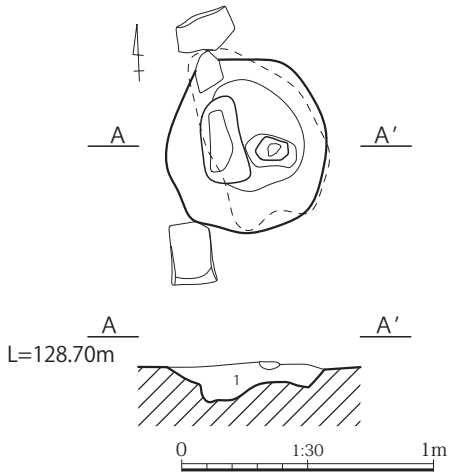
小鍛冶炉が存在していないことと、小鍛冶の際に必要な台石や台石から飛び散るスケールが存在していないこともそれを裏付けている。

時代は奈良時代、8 世紀の後半に比定する。

4号住居（第16図）

4号住居はB・C―3グリッドに位置する。カマドのみが確認され、住居の柱穴・壁溝などは確認できなかった。3号住居と4号住居は重複関係にあるが本住居の方が新しい。3号住居の内側に位置する東カマドである。カマドは楕円形で東西0.65 m、南北0.68 m、深さ0.15 m、床上面には焼土が薄く堆積していた。

カマドの右袖は砂礫を多く含む堆積岩であり、その大きさは東西0.16 m、南北0.24 m、縦0.20 mで縦は0.10 mが埋められていた。左袖は右袖と同石材の破片が存在しているだけで設置していたものではない。出土遺物はなかった。



4号住居カマド土層説明

1. 黒褐色土層　軽石粒⌀2~3mm・砂質土混入。締まり・粘性あり。

第16図　4号住居カマド実測図

焼土遺構と炭化材の分布遺構（第17図）

この遺構は、その場で焼かれた地焼き炉が複数カ所存在し、全体にカーボン層の分布や、敷物状の炭化材、黒く焼けた床面、焼土ブロックなどが入り組んだ状態で発見されている。

焼土と炭化材（カーボン層）の分布は、遺構が密集するA～C―1～3グリッドに位置し、南北7.6 m、東西8.0 mの範囲で認められる。この分布遺構は3号住居・1号・2号・3号掘立柱建物と重複しており、新旧関係は焼土遺構と炭化材の分布範囲と3号住居との重複関係や遺物出土状況から3号住居の方が新しいといえる。1～3号掘立柱建物も同じ時期に建てられている。範囲内の焼土や炭化材については幾度も作り変えられていて層序も上下しており、その場所を何度も集中して土地利用したことが把握できる。

1号・2号竪穴住居が廃絶した後に、3棟の掘立柱建物が建てられ、この性格不明な遺構が立地した。

この中でも特徴的なのは土器埋設遺構（22号遺構）である。須恵器平瓶の出土状況は特徴的であり、平瓶の底部を上にして、口縁部・把手部を下にし、底部が水平になるように埋設している。

炭化材の分布では、一面にハード面や植物繊維が面的に炭化している箇所が存在している。また、焼土の分布は小規模なものでも断面に焼土の赤色部分とその裏側断面に徐々にグラデーションする存在があり、長時間じっくり火を使ったことが判明している。このハードな貼り床面であるが、遺構確認段階で確認されており、竪穴住居に伴う床の可能性も指摘できる。

第17図で示した中には焼土の上に土や炭化材の層が認められたり、焼土がさらに上層にあるなどして同じ場所で火を使った作業や貼り床を何度も行っている。この場所が実際何をしている遺構なのかは不明である。

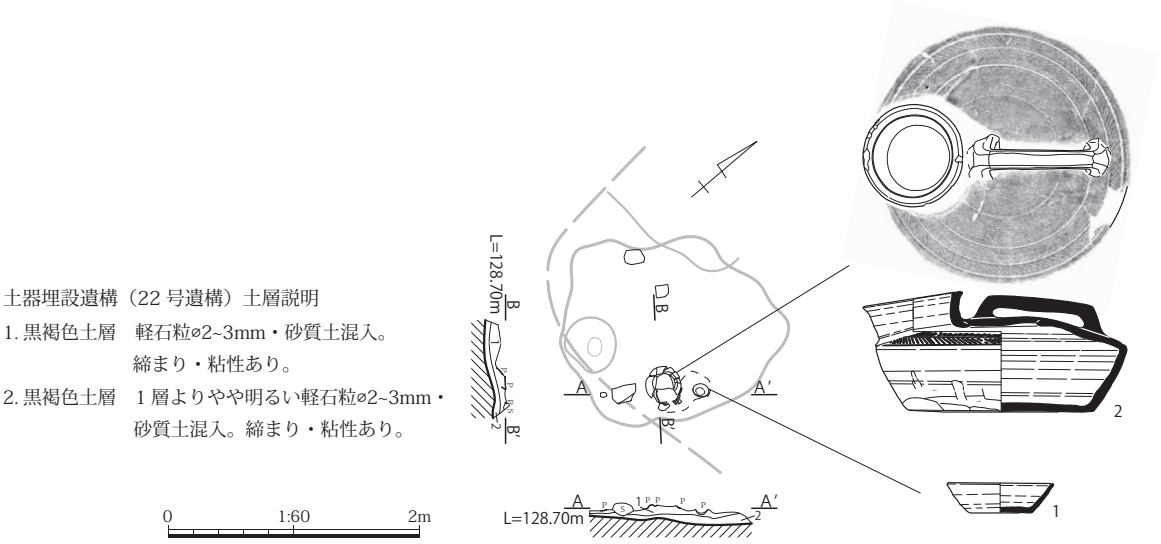
出土遺物としては、3号住居と重複しており、3号住居の遺物として第14・15図に掲載している。

また、同一時期の22号遺構については別に報告するが、出土した須恵器坏1点、平瓶1点がこの性格不明の遺構とほぼ同じ時期を表していると考える。2号住居が8世紀前半で、3号住居が8世紀後半であり、掘立柱建物3棟、性格不明な焼土・炭化材遺構は2号住居と3号住居の間に同じ場所に立地している。

また、掘立柱建物跡から土壁材の出土があり、胎土には多量のスサが混ぜられている。壁材には面を持たないものがあり、外面を持つ資料が唯一出土した。壁材の胎土は色調は赤橙色で、1面だけ面が存在した8号土坑(D-3)（第26図3）は、5㎜位の厚みに白色土を塗りつけて表面としている。この白色土は植物繊維スサを沢山入れたいわゆる漆喰壁である。

漆喰壁を持つ遺構と何らかの関連が指摘できる。

第 17 図　焼土・炭化材分布実測図



第 18 図　22 号遺構実測図

土器埋設遺構【22 号遺構】（第 18・19 図）

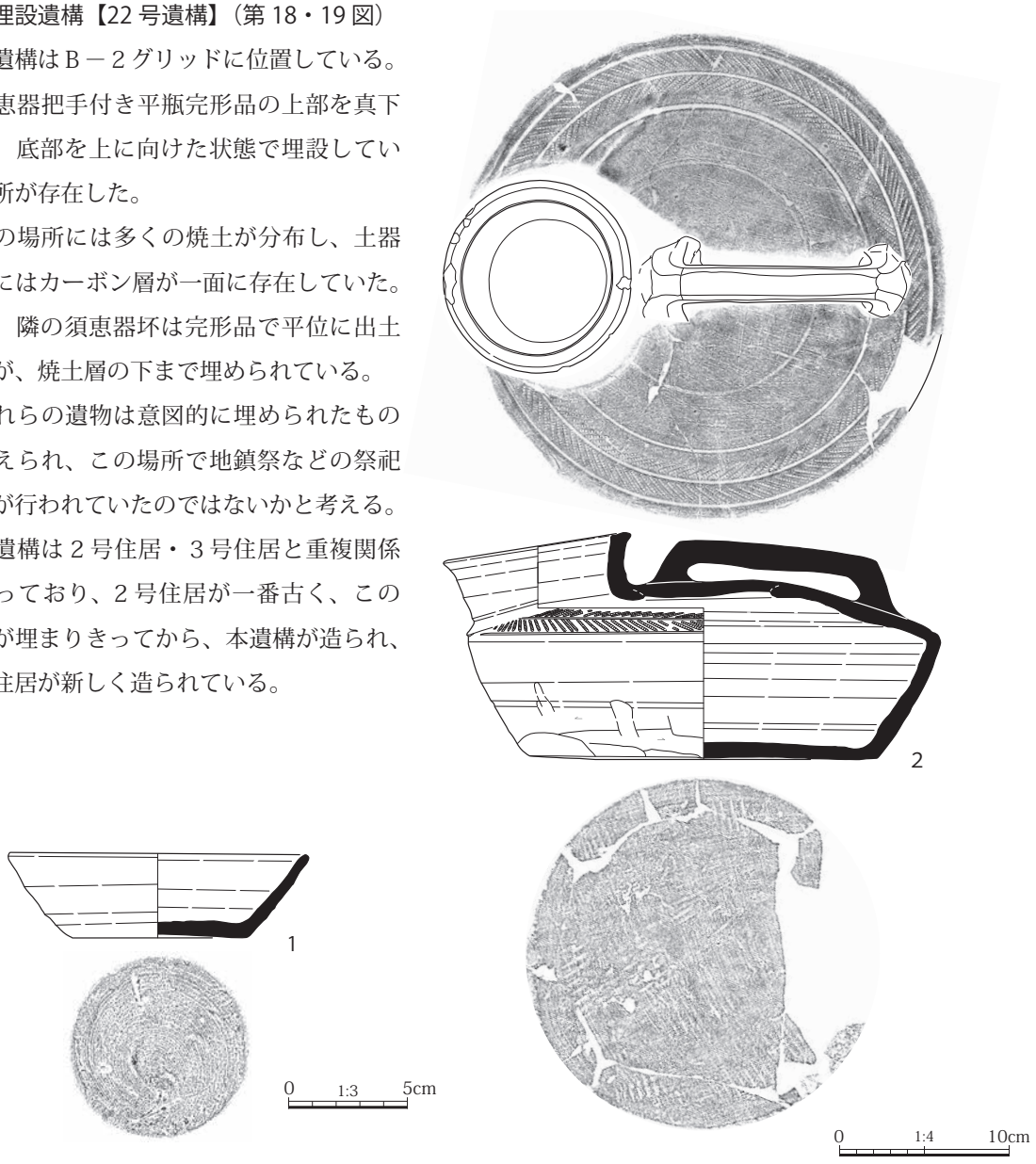
本遺構はＢ－２グリッドに位置している。

須恵器把手付き平瓶完形品の上部を真下にし、底部を上に向けた状態で埋設している箇所が存在した。

この場所には多くの焼土が分布し、土器の下にはカーボン層が一面に存在していた。また、隣の須恵器坏は完形品で平位に出土したが、焼土層の下まで埋められている。

これらの遺物は意図的に埋められたものと考えられ、この場所で地鎮祭などの祭祀行為が行われていたのではないかと考える。

本遺構は２号住居・３号住居と重複関係になっており、２号住居が一番古く、この住居が埋まりきってから、本遺構が造られ、３号住居が新しく造られている。



第 19 図　22 号遺構出土遺物実測図

2）掘立柱建物（第 20 ～ 22 図）

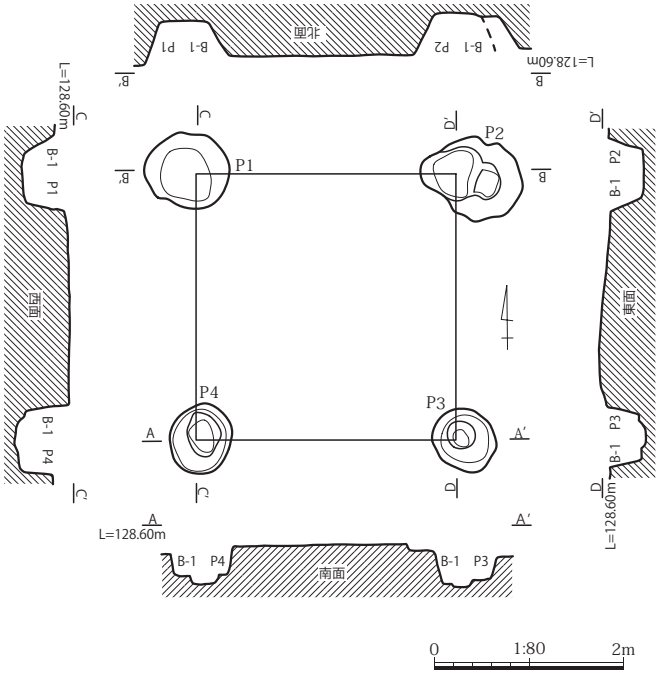
1 号掘立柱建物（第 20 図）

1 号掘立柱建物跡はＡ・Ｂ－３グリッドに位置する。土坑 46・56・49・55 は柱間が 1 間× 1 間の掘立柱建物と考えられ、柱間の芯々距離は、東西南北 2.8 mの方形である。

p1（46 号土坑）は平面形が円形で、南北 0.78 m、東西 0.90 m、深さ 0.45 mである。p2（56 号土坑）は平面形が不整円形で、南北 0.90 m、東西 1.06 m、深さ 0.45 mである。p3（55 号土坑）は平面形が円形で、南北 0.67 m、東西 0.68 m、深さ 0.58 mである。p4（49 号土坑）平面形が円形で、南北 0.75 m、東西 0.65 m、深さ 0.65 mである。なお、ｐ 3 とｐ 4 は底部で 2 段掘りとなっている。ｐ 3 は直径 0.30 m､深さ 0.10 mの､ｐ 4 は南北 0.48 m､東西 0.36 m､深さ 0.08 mで柱の据え穴と考える。

建物の方位は南北軸が真北である。

出土遺物はなかった。



第 20 図　1 号掘立柱建物実測図

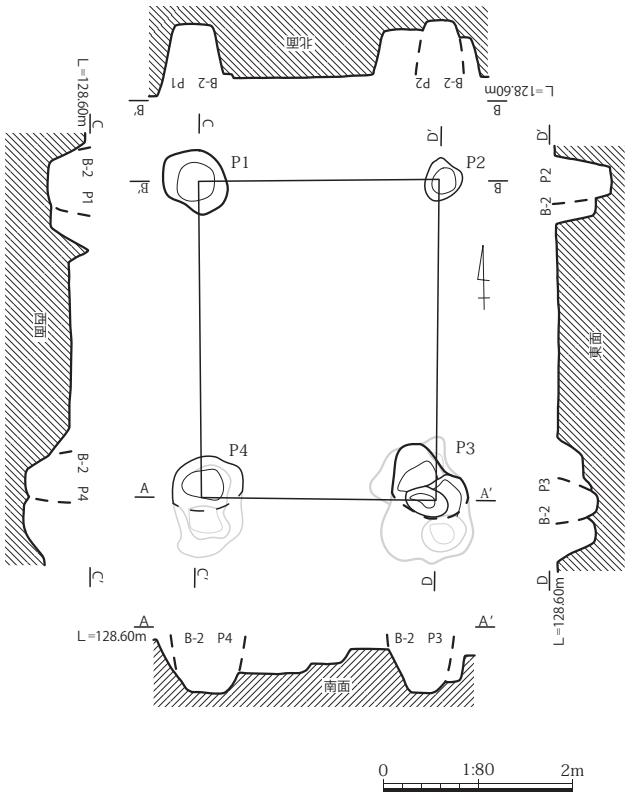
2 号掘立柱建物（第 21 図）

2 号掘立柱建物跡はＢ－２・３グリッドに位置する。土坑 52・64・43・42 は柱間が 1 間× 1 間の掘立柱建物と考えられ、柱間の芯々距離は、東西 2.6 m、南北 3.2 mの長方形である。

p1（52 号土坑）は平面形が不整円形で東西 0.66 m×南北 0.68 m、深さ 0.80 mである。ｐ 2（64 号土坑 a）は平面形が不整円形で東西 0.40 m×南北 0.45 m、深さ 0.59 mである。ｐ 3（43 号土坑 a）の平面形は不整円形で東西 0.66 m×南北 0.45 m、深さ 0.48 mである。ｐ 4（42 号土坑 a）は平面形が円形で、東西 0.74 m、南北 0.56 m、深さ 0.42 mである。

建物の方位は南北軸が真北である。

出土遺物はなかった。



第 21 図　2 号掘立柱建物実測図

３号掘立柱建物（第 22 図）

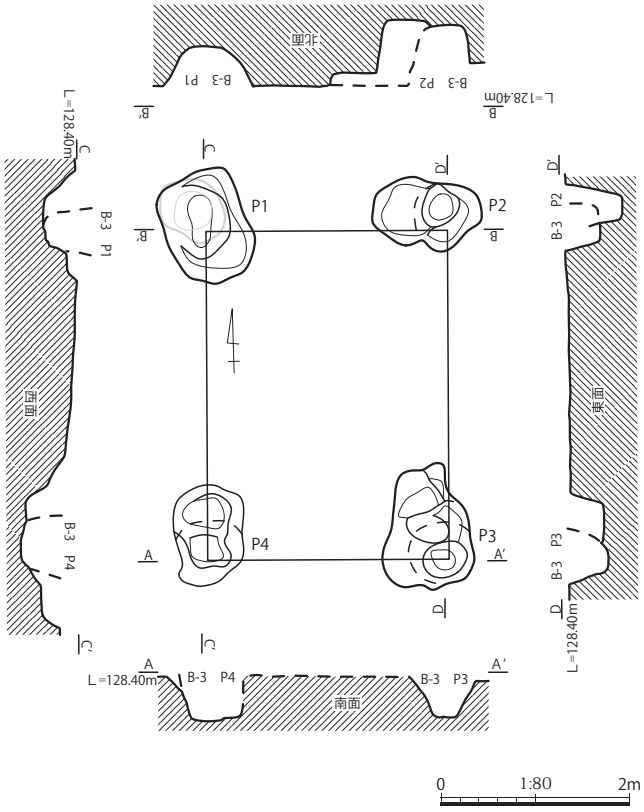
３号掘立柱建物跡はＢ－２・３グリッドに位置する。土坑８・64・43・42 は柱間が１間×１間の掘立柱建物で、柱間の芯々距離は、東西 2.6 m、南北 3.5 mの長方形である。

ｐ１（８号土坑）の南側は平面形は円形で、0.84 m× 1.18 m、深さは 0.43 mである。ｐ２（64 号土坑ｂ）の南側は平面形は円形で、直径が 0.70 m、深さ 0.40 mである。ｐ３（43 号土坑ｂ）の南側は平面形は円形で、直径 0.70 m、深さ 0.60 mである。ｐ４（42 号土坑ｂ）の西側の土坑で平面形は不整円形で、東西 0.64 m×南北約 0.70 m、深さは 0.45 mである。

建物の方位は南北軸が真北である。

出土遺物は８号土坑の中からスサ入りの土壁及び外面にスサ入りの白色土（いわゆる漆喰壁が施されたもの）の塗られたものが出土している。

８号土坑出土として土坑遺物として報告している。（第 26 図Ｄ－８　３）



第 22 図　３号掘立柱建物実測図

３）土坑（第 23 ～ 25 図）

土坑は時期・規模など各種が多く存在している。土坑だけではなく他の遺構も含めて遺構一覧表（第２表）に記載する。

土坑は 49 基あり、中でも特徴的なものだけを文章表記を行う。

18 号土坑・19 号土坑はＤ－２・３グリッドに位置する埋蔵銭関連土坑である。

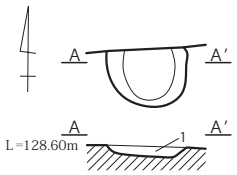
18 号土坑と 19 号土坑は同一時期に掘られていたもので、18 号土坑は埋蔵銭を納める土坑、19 号土坑は埋蔵銭を納めるための作業用土坑と考えられた。平面形は共に隅丸長方形で大きさは 18 号土坑は東西 0.98 m、南北 0.66 m、深さ 0.30 m、19 号土坑は東西 0.92 m、南北 0.90 m、深さ 0.25 mである。

21 号土坑はＢ・Ｃ－２･３グリッドに位置している。平面形は不整円形で大きさは東西 1.48 m、南北 1.25 m、深さ 0.45 mである。３号住居の南東コーナー部に収まり、貯蔵穴と認識することもできる。

21 号土坑は砂礫凝灰岩の切石が東西 1.2 m、南北 0.8 mの範囲に５石設置されている。この切石は本来住居カマドの袖石として設置されるものであるが、本地点における切石はカマドには伴わないものである。大きさはまちまちで切石の上面の高さはほぼ同一レベルである。この切石の間を調査したが焼土やカーボン層は認められずこの見解を裏付けている。切石の計測値は上面で１は 0.33 × 0.16 m、２は 0.16 × 0.20 m、３は 0.22 × 0.14 m、0.18 × 0.22 mであり、１の切石は東西方向ラインの軸にのっている。

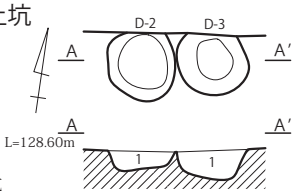
６号土坑はＡ－３グリッドに位置し、平面形は楕円形で大きさは東西 1.08 m、南北 0.86 m、深さ 0.16 mで下部には４７号土坑が存在している。６号土坑出土の須恵器坏は底部破片である（第 26 図Ｄ－６　２）。底部は高台部を綺麗に残し外側を打ち欠いたもので、回転糸切りされた底部には自然釉が掛かった状況が認められる。窯焼きの際に壺型土器などの口径が小さい製品の口縁部に置かれ、自然釉がかからないように蓋として使用した土器の転用品と考えられる。

1 号土坑



1. 黒褐色土層　軽石粒⌀2~3mm・砂質土混入。
締まり・粘性あり。

2 号・3 号土坑



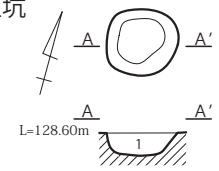
2 号土坑

1. 黒褐色土層　軽石粒⌀2~3mm・砂質土混入。
締まり・粘性あり。

3 号土坑

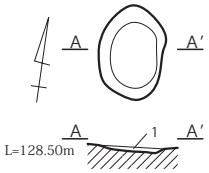
1. 黒褐色土層　1 号・2 号土坑 1 層に比べて軽石粒少ない。
締まり・粘性あり。

4 号土坑



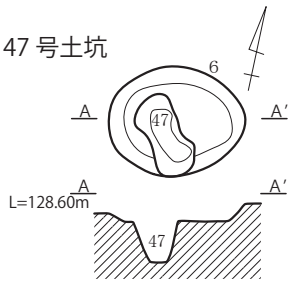
1. 黒褐色土層　軽石粒⌀2~3mm・砂質土混入。
締まり強い。

5 号土坑

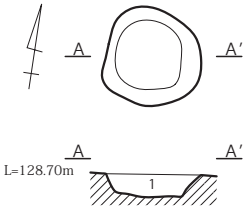


1. 暗褐色土層　軽石粒⌀2~3mm 混入。
締まり・粘性強い。

6 号・47 号土坑

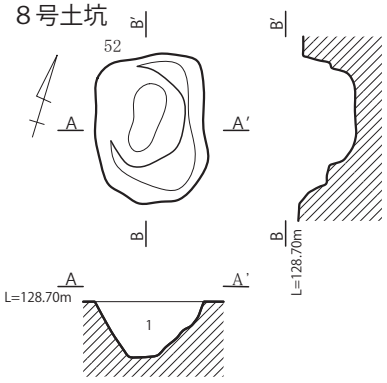


7 号土坑



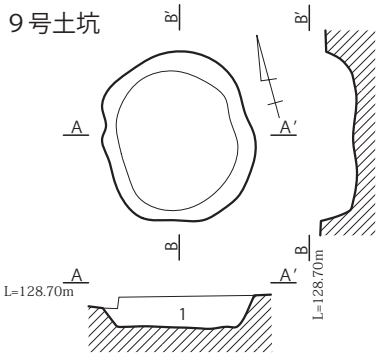
1. 暗褐色土層　軽石粒⌀2~3mm 混入。
締まり・粘性あり。

8 号土坑



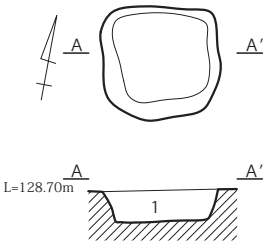
1. 暗褐色土層　軽石粒⌀2~3mm・カーボン片 2~5 ㎝混入。
締まり・粘性あり。土師器混入。

9 号土坑



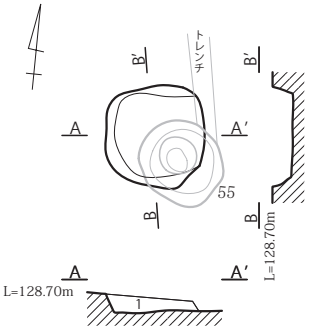
1. 暗褐色土層　軽石粒⌀1~2mm 混入。締まり・粘性あり。

10 号土坑



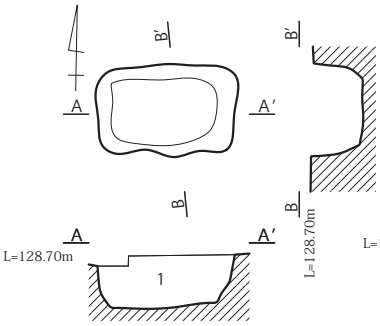
1. 暗褐色土層　軽石粒⌀1~3mm 混入。
締まり・粘性あり。

11 号土坑



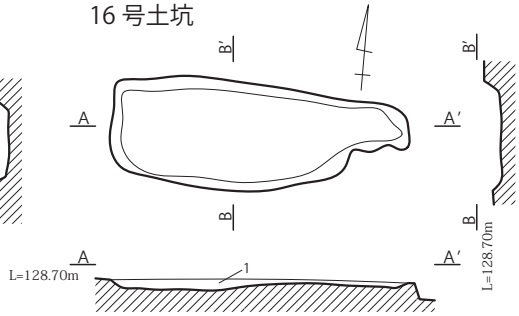
1. 暗褐色土層
軽石粒⌀0.5~1mm・カーボン粒⌀0.5~1mm・
マンガン粒混入。
締まり・粘性あり。土師器混入。

12 号土坑

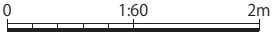


1. 暗褐色土層　軽石粒⌀0.5~2mm 混入。
締まり・粘性あり。

16 号土坑

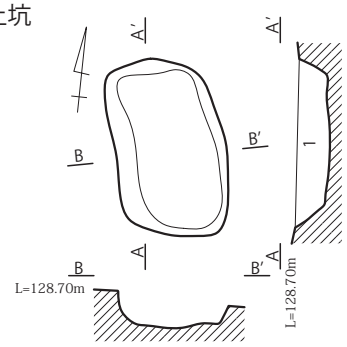


1. 暗褐色土層　地山黒色土で確認。軽石粒⌀0.5~2mm 混入。
締まり・粘性あり。



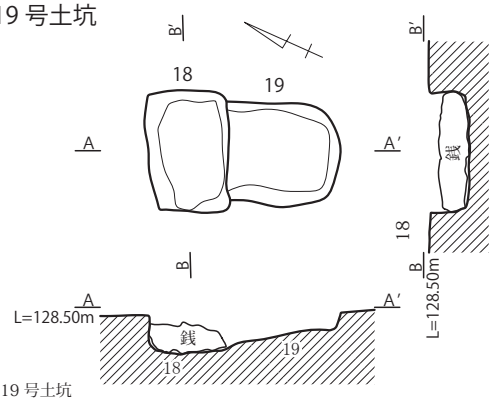
第 23 図　土坑実測図（1）

17 号土坑



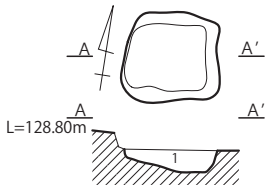
1. 暗褐色土層　軽石粒⌀1~5mm・赤色粒⌀3mm 混入。
締まり・粘性強い。

18 号・19 号土坑



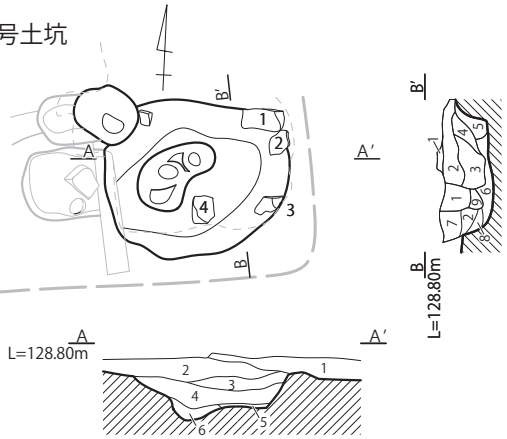
18 号・19 号土坑
1. 暗褐色土層　白色・黄色粒少ない。締まり・粘性強い。
2. 黒褐色土層　締まり・粘性弱く、ボソボソしている。板の腐った部分。
3. 黒褐色土層　4 層に比べて白色・黄色粒が少ない。締まり・粘性強い。
4. 黒褐色土層　白色・黄色粒多く含む。締まり・粘性強い。

20 号土坑



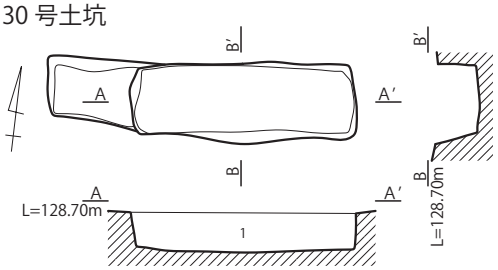
1. 暗褐色土層　軽石粒⌀1~5mm・
赤色粒⌀3mm 混入。
締まり・粘性強い。

21 号土坑



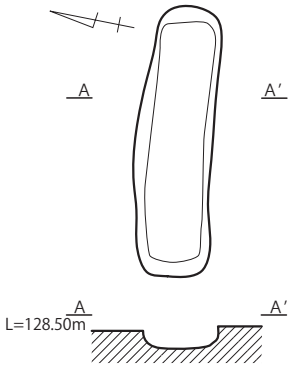
1. 暗褐色土層　　切石粒等少量含む。
2. 明暗褐色土層　シャリシャリあり。切石・炭等含む。遺物あり。
3. 明暗褐色土層　粘質土。黒褐色土・焼土・切石粒・褐色土ブロックφ２㎝を含む。
B 軽石目立つ。
4. 明暗褐色土層　石・褐色土・炭・白色粘土等を含む。B 軽石・黒褐色粘土含む。
5. 明暗褐色土層　褐色土ブロック・焼土ブロック少量含む。
6. 黒褐色粘質土層　切石粒（φ５㎝）・B 軽石少量含む。
7. 明暗褐色土層　　砂質あり。
8. 暗褐色粘質土層　焼土粒含む。
9. 暗褐色粘質土層　茶褐色粘質土ブロックの混合

30 号土坑



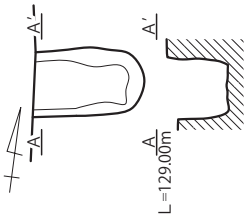
1. 暗褐色土層　軽石粒⌀1~5mmm 混入。
締まり・粘性強い。

32 号土坑



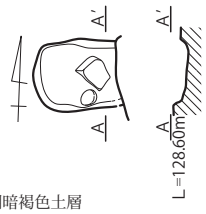
1. 暗褐色土層　軽石粒⌀1~5mmm 混入。
締まり・粘性強い。

33 号土坑



1. 暗褐色土層　軽石粒⌀1~5mmm 混入。
締まり・粘性強い。

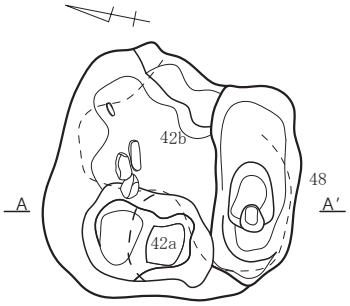
41 号土坑

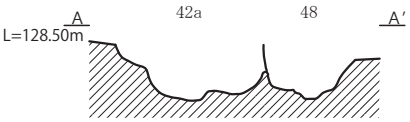


1. 明暗褐色土層
褐色土・焼土ブロック少量含む。

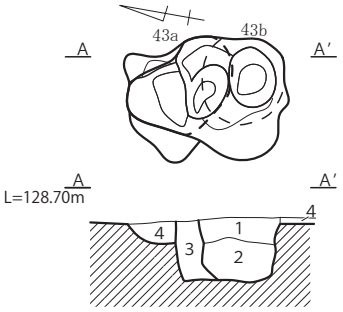
第 24 図　土坑実測図（2）

42 号・48 号土坑



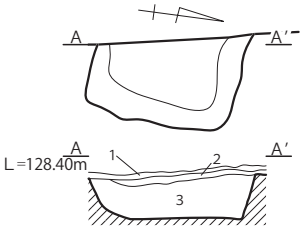


43 号土坑



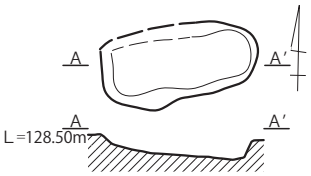
1. 暗褐色土層　白色・黄色粒少ない。締まり・粘性強い。
2. 黒褐色土層　締まり・粘性ややあり。
3. 黒褐色土層　4 層に比べて白色・黄色粒が少ない。締まり・粘性強い。
4. 黒褐色土層　3 層に比べて白色・黄色粒多く含む。締まり・粘性強い。

59 号土坑

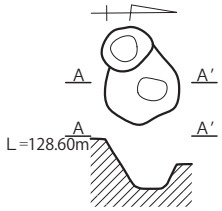


1 黒褐色土　カーボン・赤色粒・白色粘土を混入。しまり・粘性強い。
2 暗褐色土　白色粒・赤色粒を混入。しまり・粘性強い。
3 黒褐色土　カーボン・赤色粒を混入。しまり・粘性強い。

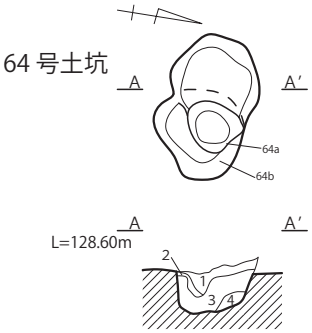
60 号土坑



63 号土坑

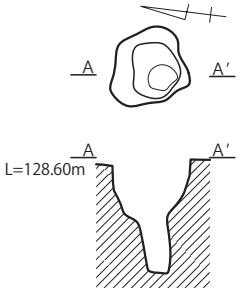


64 号土坑

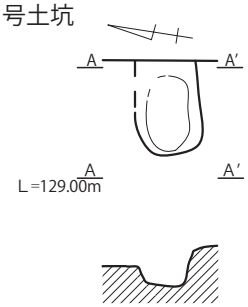


1. 黒褐色土層　軽石粒⌀2~3mm・砂質土混入。
　締まり強い。
2. 黒色土層　1 層に比べて軽石粒少ない。
　締まり・粘性強い。
3. 灰白色土層　灰白色粘土層。締まり・粘性強い。

61 号ピット

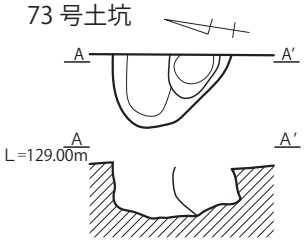


72 号土坑



1. 暗褐色土層　軽石粒⌀1~5mmm 混入。
　締まり・粘性強い。

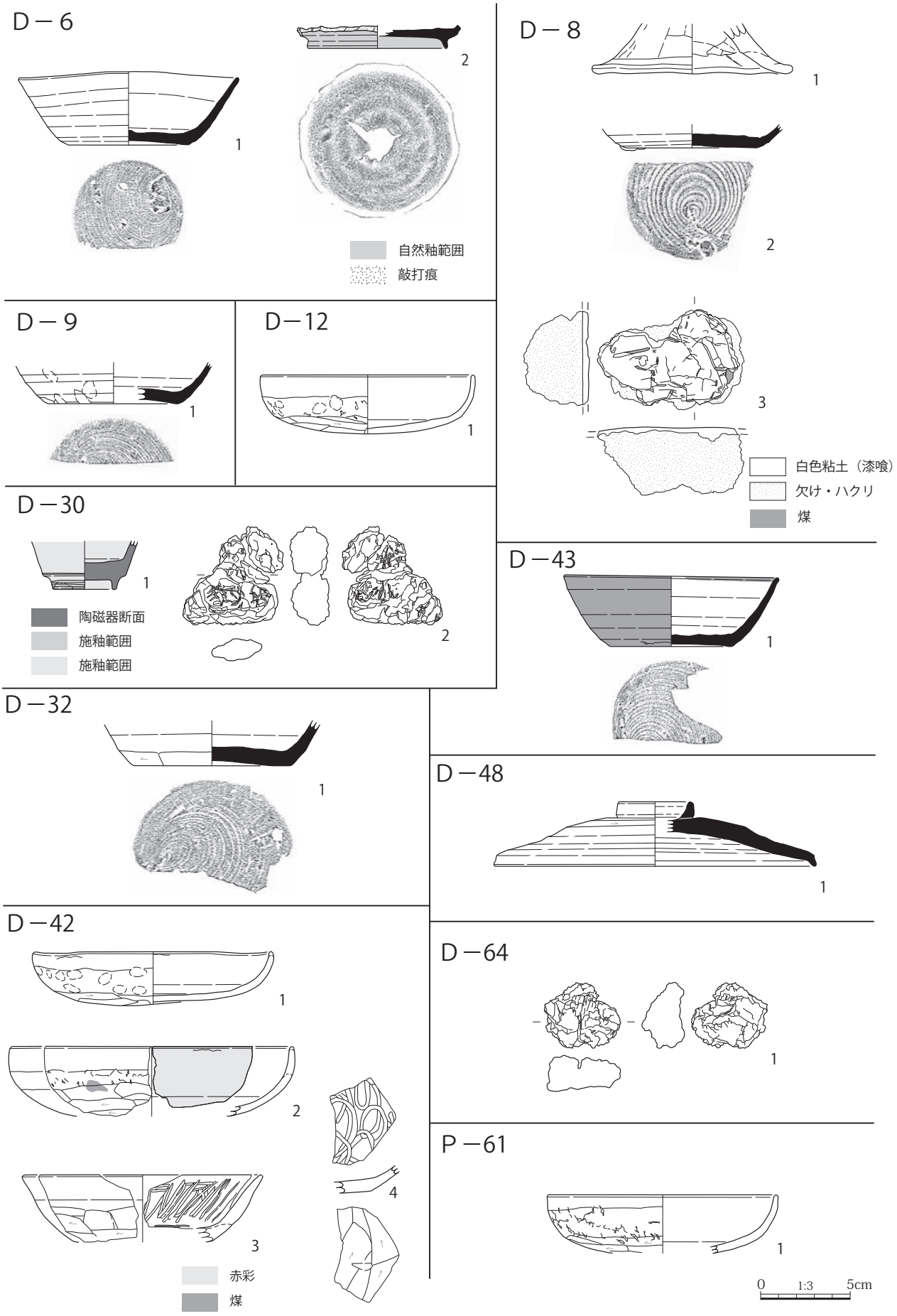
73 号土坑



1. 暗褐色土層　軽石粒⌀1~5mmm 混入。
　締まり・粘性強い。

0　1:60　2m

第 25 図　土坑実測図（3）



第 26 図　土坑出土遺物実測図

第２表　遺構一覧

現存長〈　〉・推定長（　）

遺構名	遺構番号（調査時）	位置ｸﾞﾘｯﾄﾞ	形状	規模（m）東西×南北×深さ	その他
1 号住居（H － 1）	28	A・B・C 3・4	隅丸方形	4.40 × 4.20 × 0.14	
2 号住居（H － 2）	23	A・B － 1・2	隅丸長方形	〈3.80〉×〈3.60〉× 0.40	
3 号住居（H － 3）	26	B・C － 2・3	隅丸長方形	（5.00）×（5.80）× 0.17	砂泥堆積岩四角柱の石材・鍛冶椀型滓
4 号住居（H － 4）	25	B・C － 3	楕円形	0.69 × 0.64 × 0.11	カマドのみ
土器埋設遺構【22 号遺構】	22	B － 2	－	－	須恵器平瓶埋設、焼土、カーボン分布
1 号土坑（D － 1）	1	B － 5	円形	0.64 ×－× 0.08	
2 号土坑（D － 2）	2	B － 5	円形	0.54 × 0.60 × 0.12	
3 号土坑（D － 3）	3	C － 5	円形	0.58 ×－× 0.25	
4 号土坑（D － 4）	4	C － 5	円形	0.56 × 0.53 × 0.16	
5 号土坑（D － 5）	5	D － 5	楕円形	0.51 × 0.74 × 0.05	
6 号土坑（D － 6）	6	A － 3	楕円形	1.08 × 0.86 × 0.16	D － 47 が内部に重複
7 号土坑（D － 7）	7	B － 3	円形	0.78 × 0.78 × 0.27	
8 号土坑（D － 8）	8	A・B － 3	不整形	0.84 × 1.18 × 0.23	
9 号土坑（D － 9）	9	A － 3	円形	1.34 × 1.80 × 0.31	
10 号土坑（D － 10）	10	B － 2・3	隅丸方形	0.92 × 0.90 × 0.27	
11 号土坑（D － 11）	11	B － 3	円形	0.78 × 0.82 × 0.25	
12 号土坑（D － 12）	12	A － 2	隅丸長方形	1.10 × 0.74 × 0.40	中世
16 号土坑（D － 16）	16	C － 3	長不整形	0.76 × 0.66 × 0.09	中世
17 号土坑（D － 17）	17	D － 3	隅丸方形	0.88 × 1.32 × 0.15	中世
18 号土坑（D － 18）	18	D － 3	隅丸長方形	0.98 × 0.66 × 0.30	中世　埋納銭出土
19 号土坑（D － 19）	19	D － 2・3	隅丸長方形	0.92 × 0.90 × 0.25	中世
20 号土坑（D － 20）	20	D － 2	隅丸長方形	0.78 × 0.72 × 0.17	中世
21 号土坑（D － 21）	21	B・C － 2・3	不整円形	1.48 × 1.25 × 0.45	3 号住居貯蔵穴カ
27 号土坑（D － 27）	27	C － 2・3	円形	0.50 × 0.50 × 0.60	
30 号土坑（D － 30）	30	C － 2	隅丸長方形	1.82 × 0.63 × 0.33	中世　東西方向に 32･33 土坑と並ぶ、地境ヵ
32 号土坑（D － 32）	32	B － 2	隅丸長方形	2.16 × 0.61 × 0.25	中世　東西方向に 30･33 土坑と並ぶ、地境ヵ
33 号土坑（D － 33）	33	A － 2	隅丸長方形	0.54 ×－× 0.24	中世　東西方向に 30･32 土坑と並ぶ、地境ヵ
37 号土坑（D － 37）	37	B － 1・2	不整円形	0.72 × 0.64 × 0.09	
38 号土坑（D － 38）	38	C － 2	不整円形	0.70 × 0.62 × 0.26	
39 号ピット群（P － 39）	39	D・E － 2・3	－	－	中世　ピット群、方形ピットが認められる
42 号土坑 a（D － 42）：3 号住居床下土坑	42	B － 2	不整形	1.94 × 1.98 × 0.25	複数の穴あり
42 号土坑 b（D － 42）：3 号掘立柱建物跡柱穴（B － 3 p 4）		B － 2	不整形	0.68 × 0.66 × 0.45	
43 号土坑 a（D － 43）：2 号掘立柱建物跡柱穴（B － 2 p 3）	43	B － 2	不整形	0.66 × 0.60 × 0.48	
43 号土坑 b（D － 43）：3 号掘立柱建物跡柱穴（B － 3 p 3）		B － 2	円形	0.98 × 0.69 × 0.78	
46 号土坑（D － 46）：1 号掘立柱建物跡柱穴（B － 1 p 1）	46	A － 3	円形	0.90 × 0.80 × 0.43	
47 号土坑（D － 47）	47	A － 3	長不整形	0.67 × 0.32 × 0.50	
48 号土坑（D － 48）	48	B － 2	隅丸長方形	1.58 × 0.68 × 0.53	D － 32 下部
49 号土坑（D － 49）：1 号掘立柱建物跡柱穴（B － 1 p 4）	49	A － 3	円形	0.64 × 0.74 × 0.58	中央に柱穴（0.46 × 0.36 × 0.08 m）
50 号土坑（D － 50）	50	A － 3	不整円形	0.36 × 0.32 × 0.35	
52 号土坑 a（D － 52）：2 号掘立柱建物跡柱穴（B － 2 p 1）	52	B － 3	円形	0.58 × 0.62 × 0.80	
52 号土坑 b（D － 52）：3 号掘立柱建物跡柱穴（B － 3 p 1）		B － 3	円形	0.88 × 1.18 × 0.20	
53 号土坑（D － 53）	53	B － 2	不整円形	0.31 × 0.36 × 0.34	
54 号土坑（D － 54）	54	B － 3	円形	0.41 × 0.48 × 0.68	
55 号土坑（D-55）：1 号掘立柱建物跡柱穴（B － 1 p 3）	55	B － 3	円形	0.68 × 0.68 × 0.40	中央に柱穴（0.28 × 0.28 × 0.06 m）
56 号土坑（D － 56）：1 号掘立柱建物跡柱穴（B － 1 p 2）	56	B － 3	不整形	－× 0.36 × 0.30	
57 号土坑（D － 57）	57	B － 3・4	不整形	－× 0.76 × 0.30	
58 号土坑（D － 58）	58	B － 3・4	隅丸長方形カ	－× 0.40 × 0.30	
59 号土坑（D － 59）	59	A － 1	隅丸長方形	1.16 ×－× 0.36	

遺構名	遺構番号（調査時）	位置ｸﾞﾘｯﾄﾞ	形状	規模（m）	その他
60 号土坑（D － 60）	60	A・B－3	長楕円形	1.24 × 0.56 × 0.23	
61 号ピット（P － 61）	61	B－2・3	不整形	0.61 × 0.61 × 0.66	
62 号土坑（D － 62）	62	B・C－2	不整形	0.58 × 0.62 × 0.39	
63 号土坑（D － 63）	63	B－3	不整円形	0.58 × 0.64 × 0.18	
64 号土坑 a（D － 64）：2 号掘立柱建物跡柱穴（B － 2 p 2）	64	B－3	不整円形	0.46 × 0.40 × 0.59	
64 号土坑 b（D － 64）：3 号掘立柱建物跡柱穴（B － 3 p 2）		B－3	不整円形	0.74 × 0.71 × 0.40	
65 号土坑（D － 65）	65	B－3	円形	0.26 × 0.28 × 0.24	
66 号土坑（D － 66）	66	B－3	楕円形	0.32 × 0.46 × 0.15	
71 号土坑（D － 71）	71	D・E－2	隅丸長方形	0.82 × 0.42 × 0.05	中世
72 号土坑（D － 72）	72	E－2	楕円形	0.76 × 0.52 × 0.04	中世
73 号土坑（D － 73）	73	E－3	楕円形	0.93 ×－× 0.13	中世
74 号土坑（D － 74）	74	E－3	楕円形	0.60 × 0.36 × 0.03	中世
1 号井戸（I－1）	59	B・C－3	円形	1.18 × 1.37 × 3.00 以上	

4）井戸（第 27・28 図）

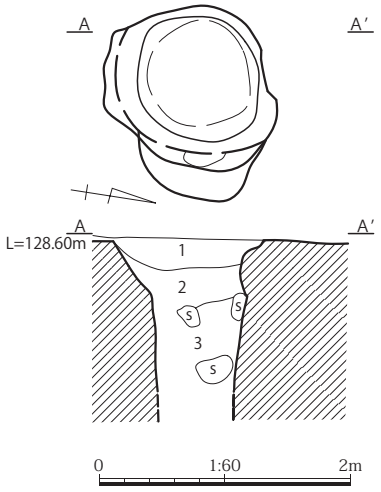
1 号井戸

本井戸はＢ．Ｃ―３．４グリッドに位置する。平面形は円形で規模は直径約 1.4 m、上部はラッパ状にひろがっており 0.40 m下がると直径約 1.0 mを測る。遺構確認面から深さは 2.0 m以上であるが、安全対策をとって調査はこの 2.0 mの深さで中止とした。中止部分から下にピンポールで 1.0 mを確認するがまだ底には達していないため、深さ 3.0 m以上であると考えられる。

中止部分には人頭大の礫が大量に投げ入れられており、礫と礫の間には空洞が空いていて、礫詰めがかなりの深さがありそうである。壁はほぼ垂直であり、水位のあった根拠となる壁はオーバーハングした所には達していない。

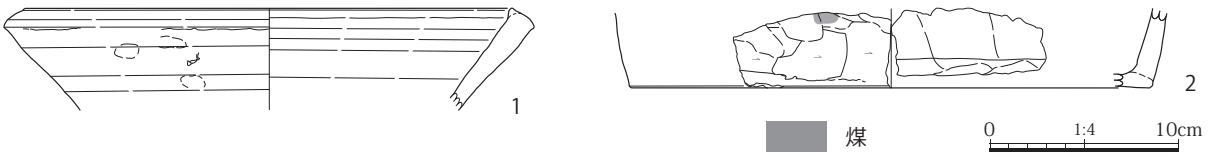
一番新しい遺物は、中世の軟質土器（第 28 図 1 ・ 2）である鉢・土鍋である。

井戸の使用年代は中世以後である。



1 号井戸土層説明
1　暗褐色土　炭化材粒子多く含む。
2　暗褐色土　砂層混じり、焼土ブロックを含む。
3　暗褐色土　2層よりも黒く、人為的に井戸を廃棄する為人頭大の礫を大量に投げ入れている。深さ 2 m位で礫と礫との間には土がなく空間が多く見え、礫を充填している。

第 27 図　1 号井戸実測図

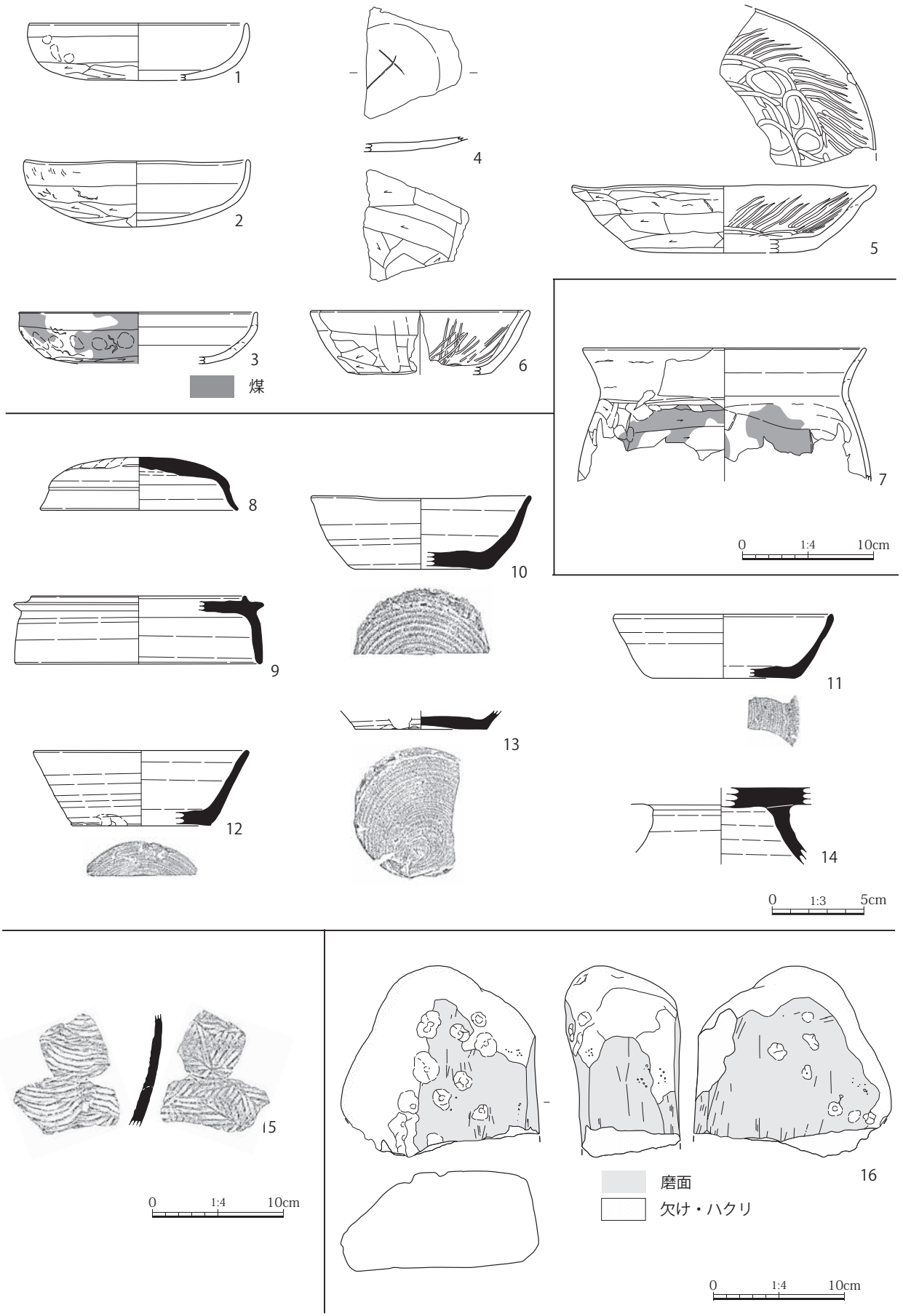


第 28 図　1 号井戸出土遺物実測図

5）遺構外出土遺物（第 29 図）

1 ～ 6 は土師器坏である。7 は土師器甕である。

8・9 は須恵器蓋である。9 は短頸壺の蓋である。10 ～ 13 は須恵器坏である。14 は台付盤状坏である。15 は須恵器大甕の胴部破片である。内面は青海波文の当て具痕があるが、表面が綾杉状の珍しい敲き文様である。16 は縄文時代の多孔石であるが、奈良時代に砥石として転用して使用している。砥面が複数面あるが、幅広であり、長い刃物を研いでいたものと考える。石材は安山岩である。



第 29 図　遺構外出土遺物実測図

4　中世以降の遺構と遺物

総社村東 03 遺跡の中世遺構（第 30 図）

検出された遺構は、グリッドで見た場合Ａ―２、Ｂ―２、Ｃ―２・３、Ｄ―２・３、Ｅ―２・３グリッドに位置し、ほぼ東西方向に並んでいる。

平面形が隅丸長方形の土坑、30 号土坑・32 号土坑・33 号土坑は直線的に並んでおり、Ｅ―80°－Ｎである。また、12 号土坑と 30 号土坑の西側に重複している土坑は同じく直線的に並んでおり、この並びは真北に対して直角（東西軸）である。

中世の建物構造としては礎石建物が一般的であることから、礎石が発見されれば当時の地表面の位置が理解できるが、礎石は見つかっていない。

さらに、調査地のほとんどが地下の土を 0.60 ～ 1.00 mの深さで砕石土と入れ替えてられており、旧地表を認識しづらい。

中世遺構の覆土層は同じ土層で、標準土層の浅間Ｂ軽石層・火山灰を多く含む層であり、掘るとシャリシャリ音のする層である。

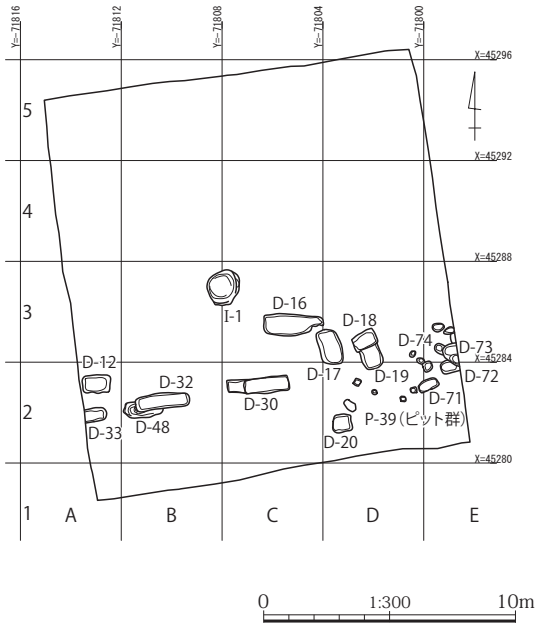
今回の調査での最大の発見は、18 号土坑から出土した中世の埋蔵銭である。

中世の遺構を確認してみると第 30 図のとおり東西方向に並んだ土坑群の配置を観察することができる。屋敷内の地割・建物内配置の情報を残していることが考えられる。

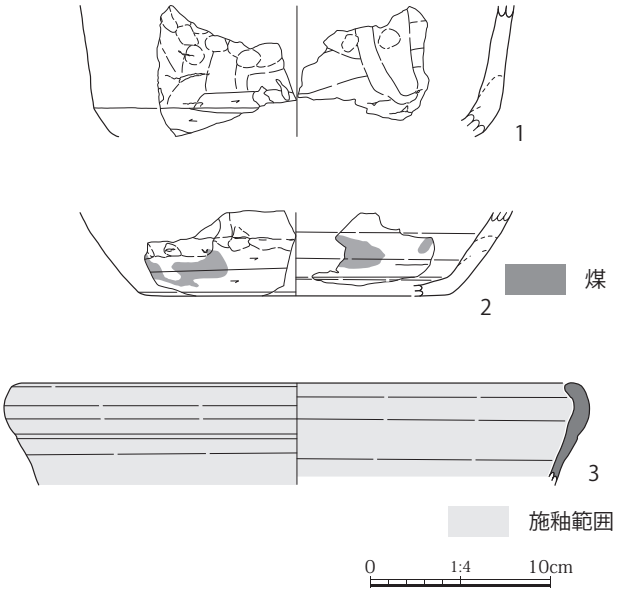
また、村東遺跡（総社村東 01 遺跡）調査区中央に確認できた東西方向の堀は、断面形状が薬研状であり、中世の地割りで幅 1.0 ～ 2.0 m、深さ 2.40m と深い。屋敷における地割り区画もしっかりしていると考えられ、本遺跡の大字大屋敷という地境にも薬研状の掘割が存在している可能性がある。

中世出土遺物（第 31 図）

出土遺物は、軟質土器の土鍋類・陶器である。１は深型の鍋、２・３は浅型の鍋で内耳部分は不明である。



第 30 図　中世以降遺構全体図



第 31 図　中世出土遺物実測図

埋蔵銭（第 32 ～ 34 図）

埋蔵銭が検出されたのは、D―3 グリッドに位置する 18 号土坑である。

今回の埋蔵銭には蓋状の痕跡は認められなかった。

当初、木箱を想定していたが、木蓋・側板・取付金具などは見つかっていない。

土坑の植物繊維北壁の北側への湾曲具合、南側への緡の変形した流れ込み・両サイドの幅が中央部より狭くなっていることなどから、もっと柔軟な素材の筵（むしろ）の可能性が指摘できた。

埋蔵銭は 18 号土坑から検出されたが、当初は 18 号土坑と 19 号土坑が、遺構確認時に一つの土坑と考えられたため、東西土層ベルトを設定して調査を行った。

土坑北側に埋蔵銭が発見され、南側とは別遺構の可能性を考えたが、覆土層の状況が 18・19 号土坑とも同一覆土であることからベルトは取り払われた。

18 号土坑は遺構確認面から約 10㎝掘り下げたところで、埋蔵銭の上面があらわれた。最初は表面に何か蓋等の特徴がある可能性を考えたため、丁寧に掃除をした。しかし、蓋などの痕跡は認められなかった。

銭の上面には植物繊維が全面に認められた。

銭の埋蔵範囲は縦 0.65 m、横 1.00 mにもなり、相当数の埋蔵銭であることが判明した。

調査の進め方については、前橋市教育委員会の指導の下で丁寧に表面を出し、写真、図面をとる。

１面目は、南北方向に緡銭が 3 列並び、東西方向には緡が隙間なく 30 ～ 40 列並べられている。

一緡毎に取り上げを開始。埋蔵範囲を北側（N）・中側（中）・南側（S）と分け、西側から№1 ～と通し番号を付ける。撮影した写真により照合できるよう取上げた面数、位置、通し番号を記録し、「1 面目N 1 ～N 25」、「1 面目中 1 ～中 24」、「1 面目S 1 ～S 21」などと取り上げる。 1 面目は合計 70 緡。薄いパン箱にコピー用紙に通し番号を書き込み、一緡ごとに包んで上げていく。

但し、1 面目には北東コーナー、南西コーナーに緡ではないバラ銭、数枚からなる銭ブロックが認められている。

１面目を取り上げたのち 2 面目の調査清掃をして、写真撮影を行なう。

２面目の調査を行なう。

２面目は、南北方向に緡銭が 3 列並び、東西方向に緡が隙間なく 20 ～ 40 列並べられている。

１面目と同様に「2 面目N 1 ～ 23」、「2 面目中 1 ～ 31」、「2 面目S 1 ～ 32」と一緡毎に取り上げを開始。２面目は合計 86 緡であった。

この工程を 10 回行って土坑底面に達する。

３面目はN 1 ～ 31 緡、中 1 ～ 38 緡、S 1 ～ 38 緡となる。合計 106 緡

４面目はN 1 ～ 35 緡、中 1 ～ 36 緡、S 1 ～ 37 緡となる。合計 108 緡

５面目はN 1 ～ 34 緡、中 1 ～ 42 緡、S 1 ～ 40 列となる。合計 116 緡

６面目はN 1 ～ 37 緡、中 1 ～ 40 緡、S 1 ～ 40 列となる。合計 117 緡

７面目はN 1 ～ 42 緡、中 1 ～ 40 緡、S 1 ～ 43 列となる。合計 125 緡

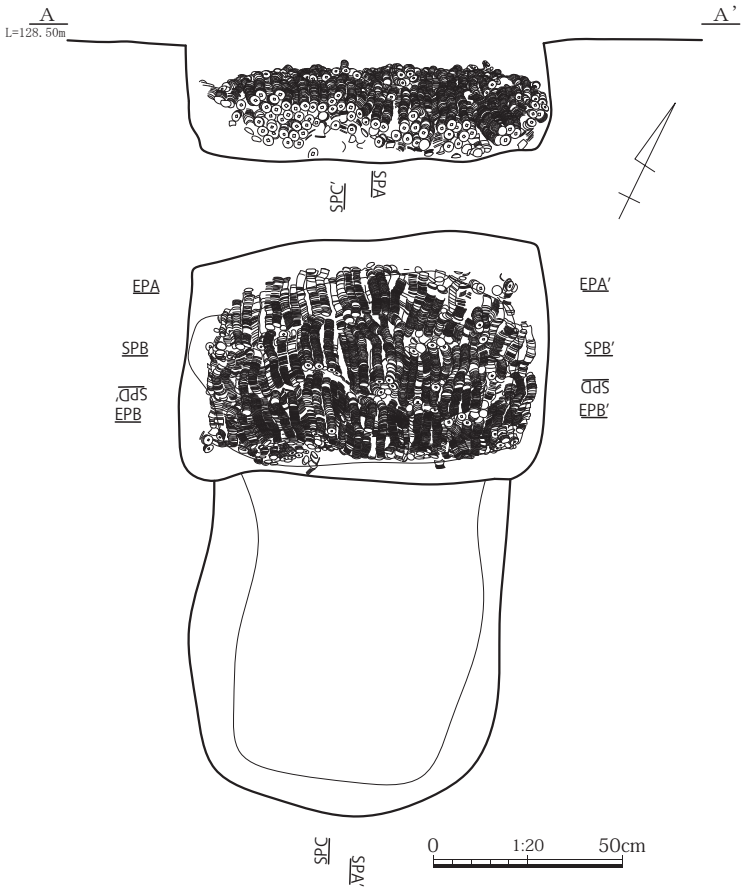
８面目はN 1 ～ 40 緡、中 1 ～ 45 緡、S 1 ～ 46 列となる。合計 131 緡

９面目はN 1 ～ 36 緡、中 1 ～ 34 緡、S 1 ～ 40 列となる。合計 110 緡

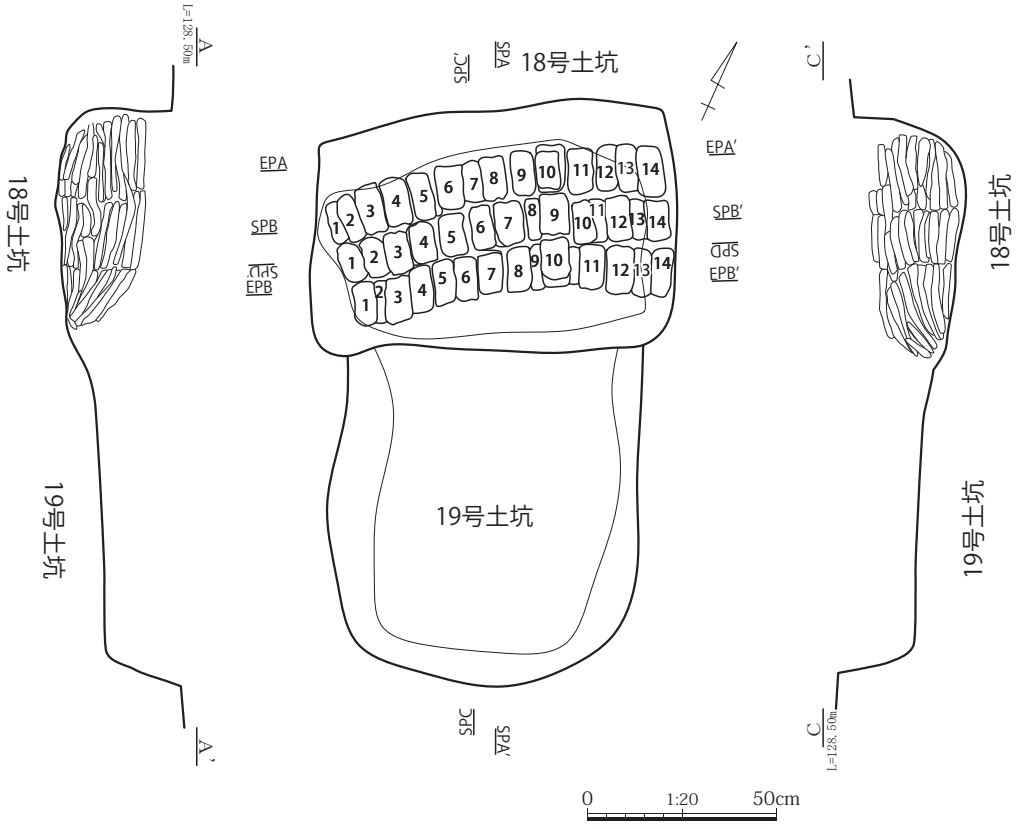
10 面目はN 1 ～ 32 緡、中 1 ～ 26 緡、S 1 ～ 24 緡となる。合計 82 緡

11 面目はN 1 ～ 8 緡、中 1 ～ 3 緡、S 1 ・ 1 緡となる。合計 12 緡。総合計で 1060 緡が検出された。

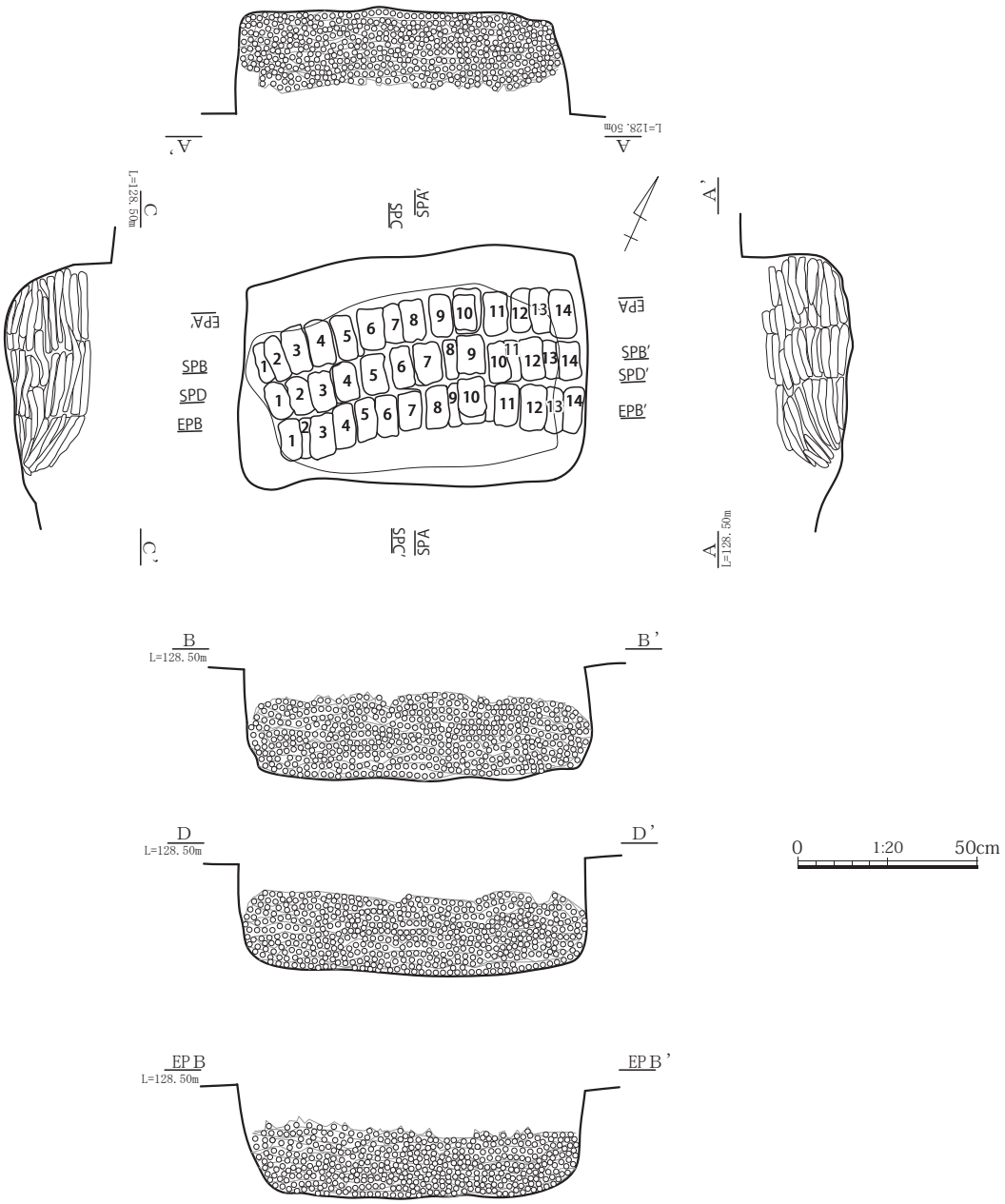
面的に取り上げてきたが、写真に写っている緡はその面として取り上げているため 10 面＝ 10 段ではなく実際は 10 面プラスαになっているところもある。



第 32 図　18 号（埋蔵銭）・19 号土坑実測図



第 33 図　18 号（底面 1 貫文圧痕・縦断面）・19 号土坑実測図



第 34 図　18 号土坑埋蔵銭実測図（平面は 1 貫文圧痕）

埋蔵銭の底面には一緡を 10 緡にまとめた 1 貫文にして納められていた痕跡が、良好に残されていた。銭の全ての重量が一番下面に加圧され、このような格子状の模様となっている。この格子は 1 貫文を置いたところの圧痕であり、北側は 14 カ所（14 貫文）、中側は 14 カ所（14 貫文）、南側は 14 カ所（14 貫文）存在している。その 1 貫文を隙間なく並べているにも関わらず、上に並べた 1 貫文が下に押し出され細い圧痕となっている。

全面に稲わらの筵がそのまま残っている。筵の方向は東西方向である。また、北壁には筵の東西方向の植物繊維が水平に残されている。いわゆるカマス袋（菰・筵）に入れられて埋蔵した銭ということになる。

埋蔵銭が出土した 18 号土坑の南には接して 19 号土坑があり、南北方向は北側にやや傾いた形となっている。19 号土坑に人が入り込み、カマス袋（菰・筵）を敷いて 1 貫文をずつを並べ置いた作業スペースと考えられる。

1 貫文は紐で横に縛っていたことがパーツ・パーツで認められている。

緡は 1060 緡が認められ、10 緡で 1 貫文であり、全体で 106 貫文が納められていてことになる。但し、何カ所、

かで緡になっていないバラ銭で検出したものや緡銭が短いものもあり、全体としてはさらに増えるものと考える。

この埋蔵銭の納められた枚数については、1060 緡×一緡 100 枚でおよそ 106,000 枚を超えるものと考える。

４面目になると１貫文の縛った紐が多く認められた。紐は稲わらによる縄紐で幅は２.0㎝である。多くの１貫文は中央を１カ所縛るもので、１貫文を布で包み、その上から縛る形ではない。そのため２カ所を縛る形の物もある。７面目についても１貫文の縛った紐が多く認められた。紐は稲わらによる縄紐で幅は２.0㎝である。９面目についても１貫文を縛った紐を確認することができた。

南側に緡銭が崩れているのは、カマス袋（菰・筵）に入れていたことにより、埋蔵銭の上部が南側の埋め土側に荷重が動き、少しずつ南に移動することにより、大きく崩れることになってしまったと考えられる。

埋蔵銭は一塊になっており、大きさは南北 0.52 m、東西 0.88 m、高さ 0.25 mであった。

○埋蔵銭の取り上げ図

今回の埋蔵銭は、一度に取り上げるには重量が重く、一緡毎に取り上げる方法で対応することとなった。

この方法は、緡の判読の他に貫文目を一つの単位として把握できる可能性がある。

緡で取り上げることで

①緡の数量。

②緡の重量。

③一緡の枚数。

④緡の壊れたところで銭銘を確認。

などが確認できる。

表面（１面目）から写真に直接番号を振り、緡の出土番号をつける。それを２面目～ 11 面まで、順次出土番号を付けて取り上げを終了させる。

○最下層調査

緡銭を取り上げ終わると１貫文の圧痕が格子目状に認められ、１貫文を敷き並べるのは中央を北側に大きく張り出す弓なり状に敷き詰められている。１貫文の圧痕が格子目状にあるが、底面で東西方向に 14 貫文が３列で 42 貫文が最下層に納められている。

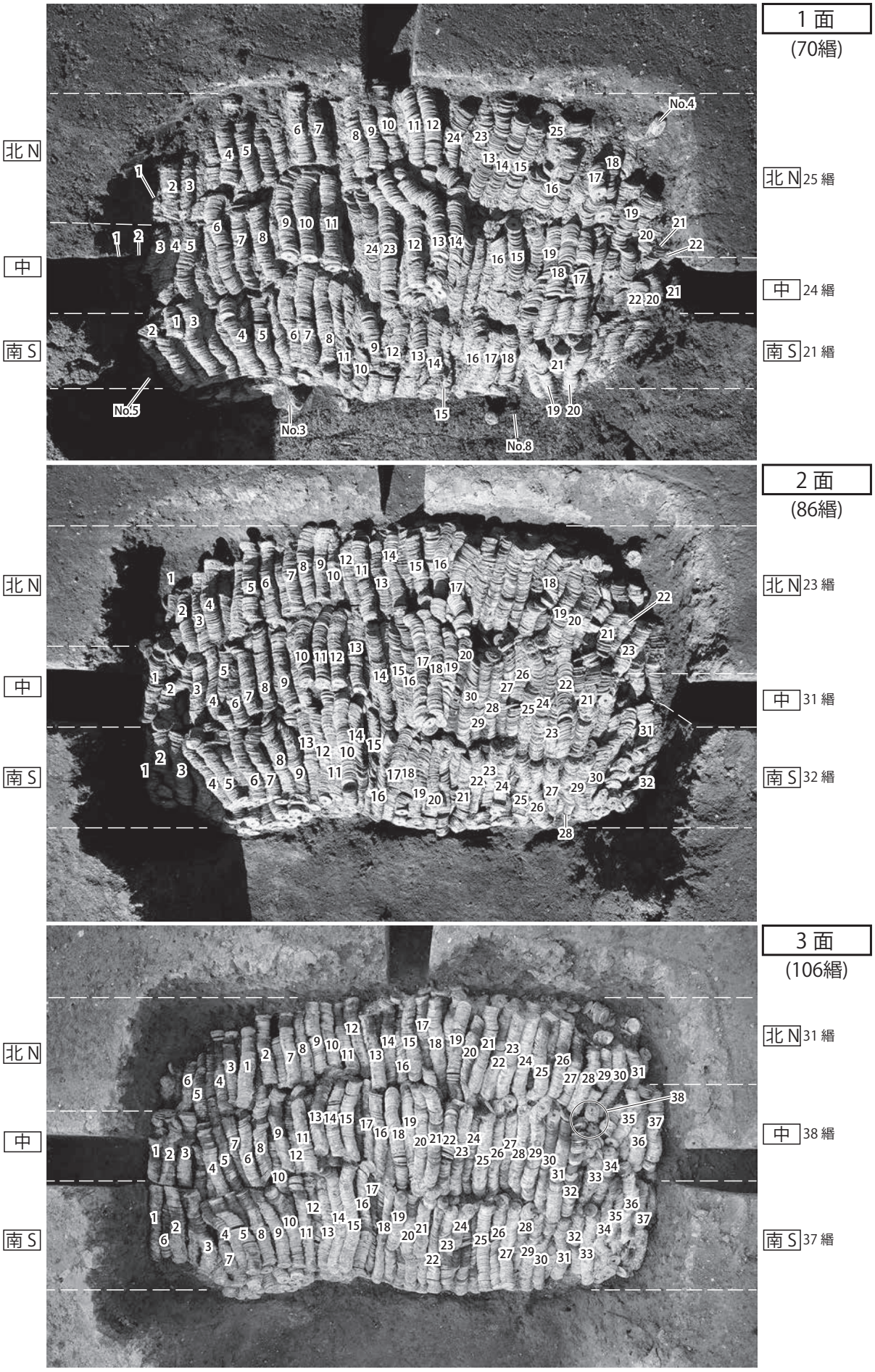
底面全体に莫蓙の植物繊維が良好に残っており、東西方向に長い植物繊維が面的に確認されている。

北壁の植物繊維は横方向 (東西方向）に長い植物繊維が良好に残されている。

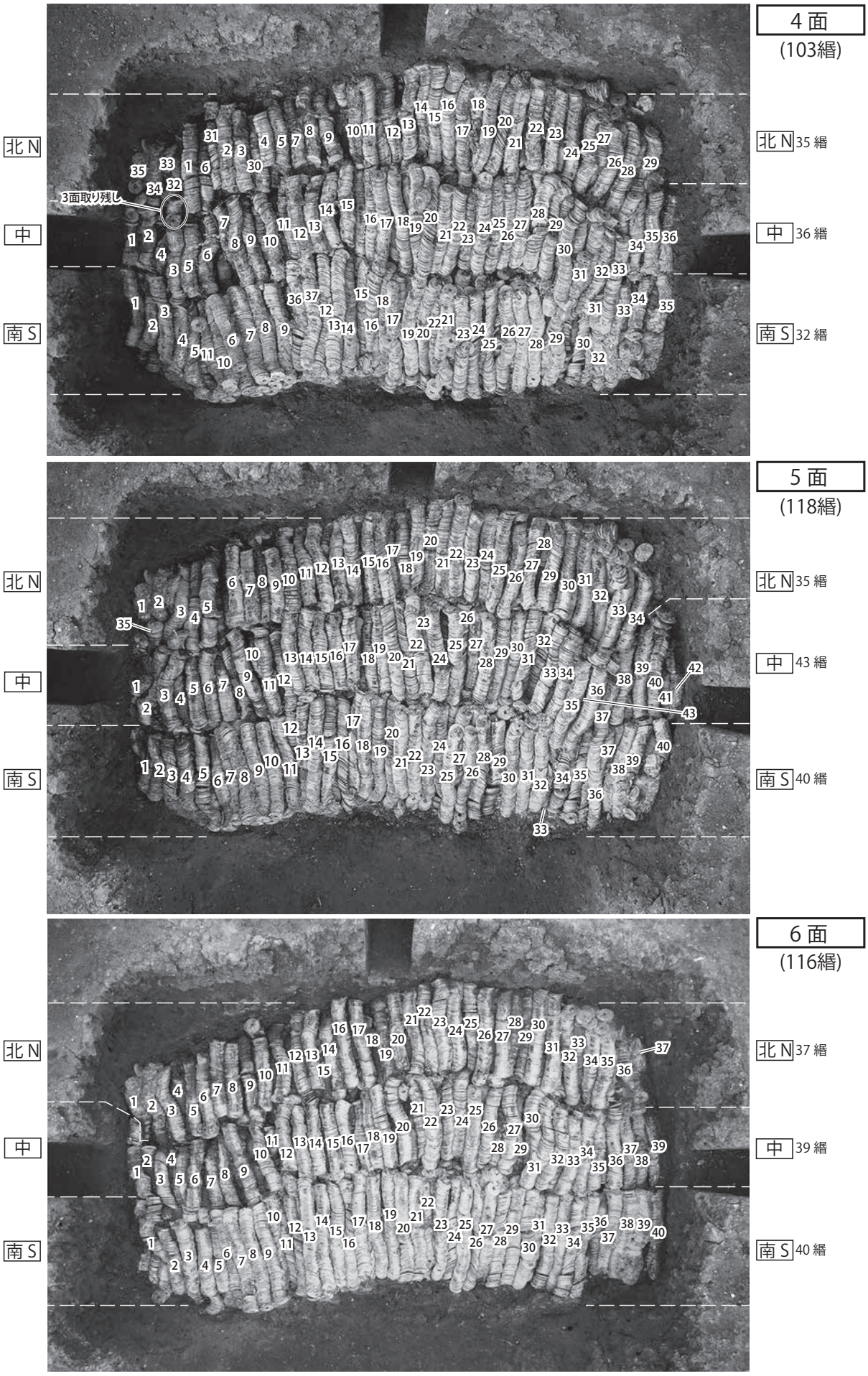
これはカマス袋が想定される。カマス袋は袋状になる前のゴザ状のものを土坑内に敷き詰め、一緡を 10 本まとめて縛った１貫文を敷き詰める。最後にゴザを縫い付けて終わりとなる。

○埋め戻し

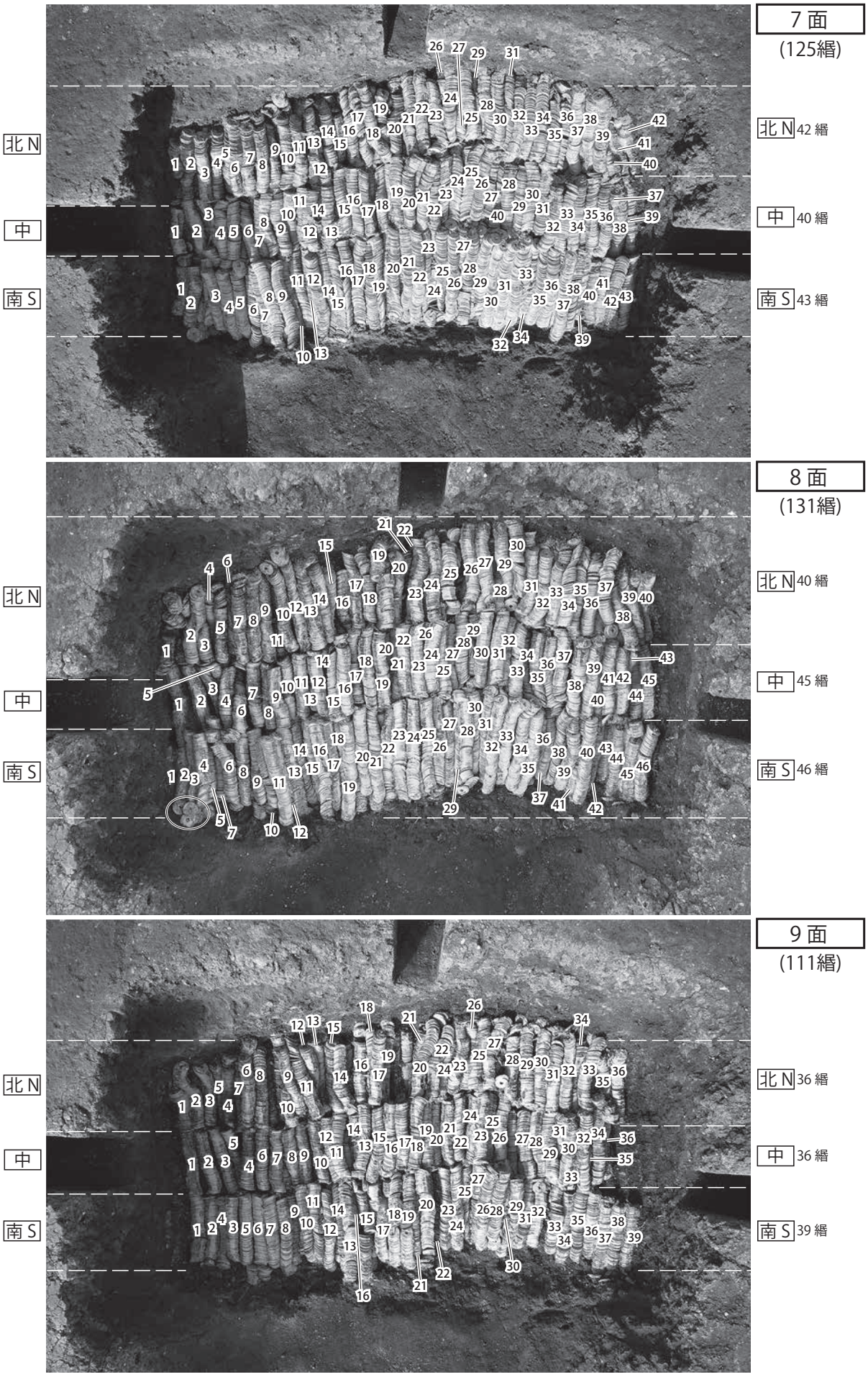
埋蔵銭を収納しきったら掘った土で埋め戻している。ただ埋め土のこだわりとしてシャリシャリする砂層が強い基本土層の３層を中心に埋め土としている。埋蔵銭を埋めた上部には何も目印となるものは存在していない。



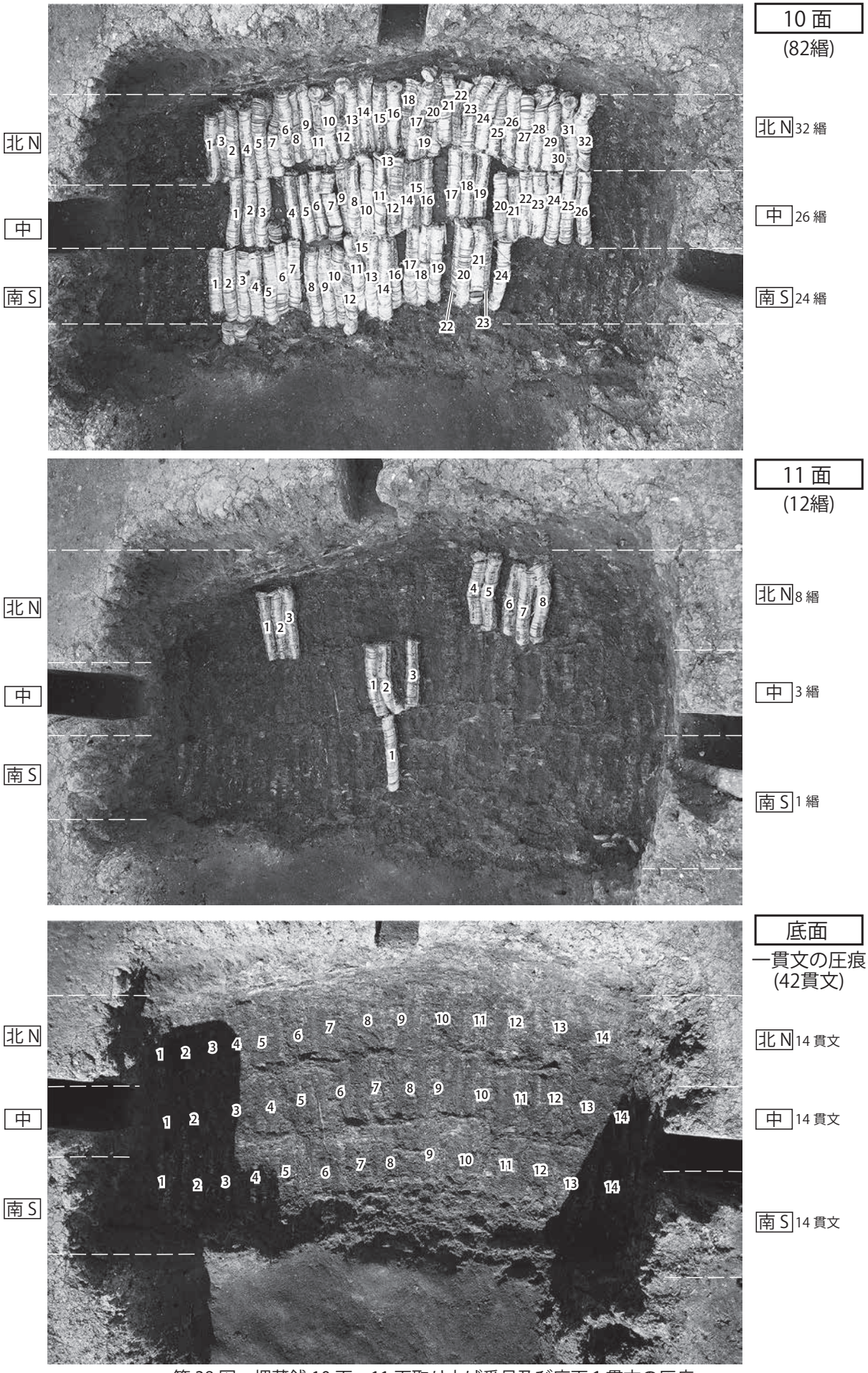
第 35 図　埋蔵銭 1 面・2 面・3 面取り上げ番号



第 36 図　埋蔵銭４面・５面・６面取り上げ番号



第 37 図　埋蔵銭 7 面・8 面・9 面取り上げ番号



第 38 図　埋蔵銭 10 面・11 面取り上げ番号及び底面 1 貫文の圧痕

第３表　遺物観察表

遺構外出土遺物（縄文）

掲載№	種類 器種	計測値 (cm)	成形・整形技法	①色調　②胎土　③焼成	備考
1	縄文	口径：－ 底径：－ 器高：＜ 1.4 ＞	外面：文様／内面：ナデ	①にぶい橙 ②白色粒、黒色粒、褐色粒 ③良好	破片
2	縄文	口径：－ 底径：－ 器高：＜ 2.7 ＞	外面：文様／内面：ナデ	①橙 ②白色粒、黒色粒、褐色粒、石英 ③良好	口縁部破片
掲載№	種類 器種	計測値 (cm)	特徴・重さ (g)		
3	石器	長さ：1.7 幅　：1.5 厚さ：0.3	重さ：0.8 g 石材：黒曜石		
4	礫 磨石	長さ：＜ 5.6 ＞ 幅　：6.5 厚さ：3.9	磨面あり 重さ：195.6 g 石材：安山岩		
5	礫器 磨石	長さ：13.1 幅　：11.2 厚さ：4.3	重さ：1015.4 g 石材：閃緑岩		

遺構外出土遺物（埴輪）

掲載№	種類 器種	計測値 (cm)	成形・整形技法	①色調　②胎土　③焼成	備考
1	埴輪 円筒	口径：－ 底径：－ 器高：＜ 2.0 ＞	外面：口唇部ヨコナデ、タテハケ／内面：口唇部ヨコナデ、ヨコハケ	①橙 ②白色粒、黒色粒、角閃石 ③良好	口唇部破片
2	埴輪 円筒	口径：－ 底径：－ 器高：＜ 4.2 ＞	外面：タテハケ／内面：ナナメハケ	①にぶい橙 ②白色粒、石英 ③良好	破片
3	埴輪 円筒	口径：－ 底径：－ 器高：＜ 3.1 ＞	外面：タテハケ／内面：ナデ	①にぶい橙 ②白色粒、黒色粒、石英 ③良好	破片
4	埴輪 円筒	口径：－ 底径：－ 器高：＜ 5.1 ＞	外面：タテハケ／内面：タテハケ	①にぶい赤褐 ②白色粒、石英 ③良好	破片
5	埴輪 円筒	口径：－ 底径：－ 器高：＜ 6.7 ＞	外面：ヨコナデ、タテハケ／内面：ナデ	①橙 ②白色粒、黒色粒、褐色粒 ③良好	破片
6	埴輪 朝顔型	口径：－ 底径：－ 器高：<6.6>	外面：肩部ヨコナデ、タテハケ／内面：肩部指頭痕、ナナメハケ	①にぶい橙 ②白色粒、黒色粒、褐色粒、角閃石 ③良好	肩部破片

１号住居（H-1)

掲載№	種類 器種	計測値 (cm)	成形・整形技法	①色調　②胎土　③焼成	備考
1	土師器 坏	口径：(11.7) 底径：－ 器高：4.6	外面：口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラケズリ／内面：口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ	①橙 ②白色粒、黒色粒、石英、雲母 ③不良	口縁部～底部 1/2
2	土師器 坏	口径：(10.4) 底径：－ 器高：3.7	外面：口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラケズリ／内面：口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ	①橙 ②黒色粒、褐色粒、雲母 ③普通	口縁部～底部 1/2
3	土師器 坏	口径：11.2 底径：－ 器高：3.7	外面：口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ／内面：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ	①橙 ②白色粒、褐色粒、雲母 ③良好	ほぼ完形
4	土師器 坏	口径：10.7 底径：－ 器高：3.4	外面：口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ／内面：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ	①橙 ②白色粒、黒色粒、角閃石、雲母 ③良好	口縁部～底部 9/10
5	須恵器 大甕	口径：－ 底径：－ 器高：<10.5>	外面：胴部平行タタキ、内面：胴部青海波文	①灰 ②白色粒、黒色粒、褐色粒 ③還元焔	胴部破片
掲載№	種類 器種	計測値 (cm)	特徴・重さ (g)		
6	石製品 敲石	長さ：17.0 幅　：7.3 厚さ：6.5	敲打痕あり。煤・鉄分付着 重さ：1074.4 g　石材：安山岩		

２号住居（H-2)

掲載№	種類 器種	計測値 (cm)	成形・整形技法	①色調　②胎土　③焼成	備考
1	土師器 坏	口径：(13.1) 底径：－ 器高：<3.3>	外面：口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ／内面：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ	①にぶい橙 ②白色粒、角閃石、石英 ③良好	口縁部～底部破片
2	土師器 坏	口径：(13.0) 底径：－ 器高：<4.5>	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ケズリ／内面：器面摩耗調整不明	①橙 ②白色粒、黒色粒、褐色粒、角閃石、石英 ③良好	口縁部～底部 1/5
3	土師器 坏	口径：(9.9) 底径：－ 器高：<3.0>	外面：口縁部ヨコナデ、体部～底部ケズリ／内面：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ	①橙 ②黒色粒、雲母 ③良好	口縁部～底部 1/3

掲載№	種類 器種	計測値 (cm)	成形・整形技法	①色調　②胎土　③焼成	備考
4	土師器 坏	口径：13.1 底径：－ 器高：4.1	外面：口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ、ヘラケズリ／内面：口縁部～体部ヨコナデ線刻あり、底部ナデ	①橙 ②白色粒、黒色粒、褐色粒 ③良好	口縁部～底部 3/4
5	土師器 坏	口径：(15.6) 底径：－ 器高：6.0	外面：口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ／内面：口縁部～体部放射状暗文、底部螺旋状暗文	①橙 ②白色粒、黒色粒、褐色粒、石英 ③良好	口縁部～底部 2/5
6	土師器 坏	口径：(11.0) 底径：－ 器高：<3.1>	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ケズリ／内面：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ	①橙 ②黒色粒、褐色粒、角閃石 ③良好	口縁部～底部 1/4
7	土師器 坏	口径：(12.0) 底径：－ 器高：<3.1>	外面：口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ／内面：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ	①にぶい橙 ②白色粒、角閃石、石英 ③良好	口縁部～底部 1/5
8	土師器 坏	口径：(9.6) 底径：－ 器高：<3.0>	外面：口縁部ヨコナデ、体部未調整、底部ヘラケズリ／内面：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ	①にぶい橙 ②白色粒、黒色粒、角閃石、石英 ③良好	口縁部～底部 1/5
9	土師器 坏	口径：(10.3) 底径：－ 器高：2.7	外面：口縁部ヨコナデ、体部～底部ケズリ／内面：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ	①にぶい橙 ②白色粒、黒色粒、雲母 ③良好	口縁部～底部 1/4
10	土師器 坏	口径：(12.8) 底径：－ 器高：<3.1>	外面：口縁部ヨコナデ、体部未調整指頭痕あり、底部ヘラケズリ／内面：口縁部～体部ヨコナデ後ナデ、底部ナデ	①橙 ②白色粒、黒色粒、角閃石 ③良好	口縁部～底部 1/4
11	土師器 坏	口径：(12.1) 底径：－ 器高：<3.2>	外面：口縁部ヨコナデ、体部未調整指頭痕あり、底部ヘラケズリ／内面：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ	①にぶい橙 ②白色粒、黒色粒、角閃石 ③良好	口縁部～底部 1/5
12	土師器 坏	口径：(12.4) 底径：－ 器高：<2.8>	外面：口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ、ヘラケズリ／内面：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ	①橙 ②白色粒、黒色粒、角閃石、雲母 ③良好	口縁部～底部 1/3
13	土師器 坏	口径：(12.8) 底径：－ 器高：<3.0>	外面：口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ／内面：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ	①にぶい赤褐 ②白色粒、褐色粒、石英 ③良好	口縁部～底部 1/5
14	土師器 甕	口径：(24.2) 底径：－ 器高：<10.2>	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ／内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ後ナデ、指頭痕あり、煤付着	①橙 ②白色粒、黒色粒、角閃石 ③良好	口縁部～胴部 1/4
15	土師器 甕	口径：(24.0) 底径：－ 器高：<6.8>	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ／内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ後ナデ	①外面：橙／内面：黄灰 ②白色粒、黒色粒、角閃石 ③良好	口縁部～胴部 1/5
16	土師器 甕	口径：(17.7) 底径：－ 器高：<6.5>	外面：口縁部ヨコナデ、頸部ヨコナデ後指頭痕、胴部ヘラケズリ／内面：口縁部～頸部ヨコナデ、胴部ナデ	①明赤褐 ②白色粒、黒色粒、角閃石、石英 ③良好	口縁部～胴部 1/5
17	土師器 甕	口径：(21.7) 底径：－ 器高：<5.3>	外面：口縁部ヨコナデ、指頭痕あり、煤付着、胴部ヘラケズリ／内面：口縁部～頸部ヨコナデ、胴部ヘラナデ後ナデ、煤付着	①橙 ②白色粒、黒色粒、角閃石、石英 ③良好	口縁部～胴部 1/5
18	土師器 甕	口径：(23.2) 底径：－ 器高：<8.8>	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ／内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ後ナデ、煤付着	①にぶい褐 ②白色粒、黒色粒、角閃石、石英 ③良好	口縁部～胴部破片
19	土師器 甕	口径：(22.6) 底径：－ 器高：<12.8>	外面：口縁部ヨコナデ、頸部ナデ、胴部ヘラケズリ／内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	①にぶい橙 ②白色粒、黒色粒、角閃石、雲母 ③良好	口縁部～胴部 1/4
20	須恵器 蓋	口径：(16.4) 鈕径：－ 器高：<3.0>	ロクロ成形　外面：天井部回転ヘラケズリ後ナデ、／内面：自然釉付着	①灰 ②白色粒 ③還元焔	天井部～口縁部 1/5
21	須恵器 蓋	口径：9.8 鈕径：3.1 器高：2.2	ロクロ成形　外面：天井部鈕貼付け時周辺ナデ、体部回転ヘラケズリ、口縁部自然釉付着／内面：自然釉付着	①灰 ②白色粒、黒色粒 ③還元焔	鈕部～口縁部ほぼ完形
22	須恵器 坏	口径：(11.8) 底径：(6.8) 器高：4.2	ロクロ成形　外面：底部回転糸切り	①灰白 ②白色粒、黒色粒 ③還元焔	口縁部～底部 1/3
23	須恵器 坏	口径：(12.9) 底径：(8.0) 器高：3.6	ロクロ成形　外面：底部回転糸切り	①外面：灰／内面：灰白 ②白色粒、黒色粒、褐色粒 ③還元焔	口縁部～底部 1/3
24	須恵器 壺	口径：－ 底径：(8.2) 器高：<2.9>	ロクロ成形　外面：胴部回転ヘラケズリ、施釉、底部回転ヘラケズリ、高台貼付け時周辺ナデ	①素：灰／釉：灰褐 ②白色粒、黒色粒 ③還元焔	胴部～底部破片
掲載№	種類 器種	計測値 (cm)	特徴・重さ (g)		
25	石製品 砥石	長さ：<16.7> 幅　：7.0 厚さ：5.65	重さ：349.5 g 石材：砂岩		

3 号住居（H-3)

掲載№	種類 器種	計測値 (cm)	成形・整形技法	①色調　②胎土　③焼成	備考
1	土師器 坏	口径：13.5 底径：－ 器高：3.4	外面：口縁部ヨコナデ、体部未調整、底部ヘラケズリ／内面：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ	①橙 ②白色粒、黒色粒、角閃石、石英 ③良好	口縁部～底部 3/4
2	土師器 坏	口径：11.7 底径：－ 器高：3.1	外面：口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ／内面：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ	①橙 ②白色粒、黒色粒、角閃石、石英 ③良好	口縁部～底部 4/5
3	土師器 坏	口径：(11.5) 底径：－ 器高：3.3	外面：口縁部ヨコナデ、体部未調整、ナデ、底部ヘラケズリ後ナデ／内面：口縁部～体部ヨコナデ、指頭痕あり、底部ナデ、指頭痕あり	①橙 ②白色粒、黒色粒、角閃石、石英 ③良好	口縁部～底部 3/5

掲載№	種類 器種	計測値 (cm)	成形・整形技法	①色調　②胎土　③焼成	備考
4	土師器 坏	口径：12.4 底径：－ 器高：3.6	外面：口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ／内面：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ	①橙 ②白色粒、黒色粒、角閃石、石英 ③良好	口縁部～底部 2/5
5	土師器 坏	口径：(11.3) 底径：－ 器高：<2.7>	外面：口縁部ヨコナデ、体部未調整、底部ヘラケズリ／内面：口縁部～底部ヨコナデ	①橙 ②白色粒、黒色粒、雲母 ③良好	口縁部～底部破片
6	土師器 坏	口径：13.5 底径：－ 器高：＜ 2.8 ＞	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、指頭痕あり、底部ヘラケズリ／内面：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ	①にぶい橙 ②白色粒、黒色粒、角閃石、石英 ③良好	口縁部～底部 1/4
7	土師器 坏	口径：11.9 底径：9.5 器高：3.2	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ヘラケズリ／内面：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ	①にぶい橙 ②白色粒、黒色粒、角閃石、石英 ③良好	口縁部～底部 9/10
8	土師器 坏	口径：(12.2) 底径：(10.4) 器高：3.2	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、指頭痕あり、底部ヘラケズリ、煤付着／内面：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ、煤付着	①にぶい橙 ②白色粒、黒色粒、石英 ③良好	口縁部～底部 3/5
9	土師器 坏	口径：12.6 底径：－ 器高：3.5	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、指頭痕あり、底部ヘラケズリ／内面：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ、煤付着	①にぶい橙 ②白色粒、角閃石、石英 ③良好	ほぼ完形
10	土師器 盤	口径：(14.8) 底径：－ 器高：2.6	外面：口縁部ヨコナデ、体部未調整、底部ヘラケズリ／内面：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ	①橙 ②白色粒、黒色粒、角閃石、石英 ③良好	口縁部～底部 3/5
11	土師器 甕	口径：(20.8) 底径：－ 器高：<14.6>	外面：口縁部ヨコナデ、指頭痕あり、胴部ヘラケズリ／内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ後ナデ	①明赤褐 ②白色粒、黒色粒、角閃石、石英 ③普通	口縁部～胴部 1/6
12	須恵器 蓋	口径：(12.4) 鈕径：－ 器高：＜ 1.9 ＞	ロクロ成形　外面：天井部回転ナデ、体部回転ヘラケズリ、自然釉付着	①灰 ②白色粒、黒色粒、褐色粒 ③還元焔	天井部～口縁部破片
13	須恵器 蓋	口径：(13.7) 鈕径：4.1 器高：2.9	ロクロ成形　外面：天井部鈕貼付け時周辺ナデ、体部回転ヘラケズリ	①灰白 ②白色粒、黒色粒、褐色粒、雲母 ③還元焔	天井部～口縁部 4/5
14	須恵器 蓋	口径：(15.8) 鈕径：－ 器高：<2.7>	ロクロ成形　外面：天井部ナデ、体部回転ヘラケズリ、ナデ／内面：重ね焼痕	①灰白 ②白色粒、黒色粒、褐色粒 ③還元焔	天井部～口縁部 2/5
15	須恵器 蓋	口径：(18.6) 鈕径：－ 器高：<3.3>	ロクロ成形　外面：天井部ナデ、体部回転ヘラケズリ	①灰白 ②白色粒、黒色粒 ③還元焔	天井部～口縁部 1/4
16	須恵器 蓋	口径：(18.8) 鈕径：－ 器高：<3.4>	ロクロ成形　外面：天井部ナデ、体部回転ヘラケズリ	①灰白 ②白色粒、黒色粒 ③還元焔	天井部～口縁部 1/4
17	須恵器 蓋	口径：(18.8) 鈕径：－ 器高：＜ 2.6 ＞	ロクロ成形　外面：天井部ナデ、回転ヘラケズリ／内面：重ね焼痕、自然釉付着	①灰 ②白色粒、黒色粒 ③還元焔	天井部～口縁部 1/3
18	須恵器 坏	口径：(12.3) 底径：8.0 器高：4.1	ロクロ成形　外面：口縁部～体部指頭痕あり、底部回転糸切り	①灰白 ②白色粒、黒色粒、褐色粒 ③還元焔	口縁部～底部 1/4
19	須恵器 坏	口径：(13.2) 底径：(10.0) 器高：3.5	ロクロ成形　外面：底部ナデ	①灰白 ②白色粒、黒色粒 ③還元焔	口縁部～底部 1/4
20	須恵器 坏	口径：13.8 底径：9.6 器高：3.9	ロクロ成形　外面：底部回転ヘラ切り／内面：漆付着か	①灰 ②白色粒、黒色粒 ③還元焔	口縁部～底部 2/5
21	須恵器 埦	口径：－ 底径：(9.2) 器高：＜ 4.4 ＞	ロクロ成形　外面：底部回転糸切り、高台貼付け時周辺ナデ	①灰白 ②白色粒、黒色粒 ③還元焔	体部～底部 1/6
22	須恵器 埦	口径：13.0 底径：8.2 器高：5.3	ロクロ成形　外面：底部回転糸切り、高台貼付け時周辺ナデ	①灰 ②白色粒、黒色粒、褐色粒、角閃石 ③還元焔	口縁部～底部 3/5
23	須恵器 小型短頸壺	口径：2.3 底径：2.8 器高：3.2	ロクロ成形　外面：口縁部～胴部ナデ、ヘラケズリ、底部回転糸切り	①灰 ②白色粒、黒色粒、石英 ③還元焔	完形
24	土製品 置きカマド	口径：－ 底径：－ 器高：<10.6>	ロクロ成形　外面：ナデ	①にぶい橙 ②白色粒、黒色粒、褐色粒、角閃石、雲母 ③普通	胴部破片

掲載№	種類 器種	計測値 (cm)	特徴・重さ (g)
25	鉄製品 刀子	長さ：＜ 3.8 ＞ 幅　：1.8 厚さ：0.3	重さ：6.2 g
26	石製品 紡錘車	上径：3.85 下径：2.35 厚さ：1.3	重さ：28.1 g 石材：蛇紋岩
27	鉄滓 鍛冶埦型滓	長さ：6.8 幅　：＜ 4.45 ＞ 厚さ：1.7	重さ：55.8 g
28	鉄滓 鍛冶埦型滓	長さ：＜ 3.9 ＞ 幅　：＜ 4.4 ＞ 厚さ：2.4	銅付着 重さ：28.0 g

土器埋設遺構（22 号遺構）

掲載№	種類 器種	計測値 (cm)	成形・整形技法	①色調　②胎土　③焼成	備考
1	須恵器 坏	口径：12.4 底径：7.4 器高：3.6	ロクロ成形　外面：底部回転糸切り	①灰 ②白色粒、黒色粒、褐色粒 ③還元焔	ほぼ完形
2	須恵器 平瓶	口径：9.9 底径：19.5 器高：12.7	ロクロ成形　外面：肩部刻み目、自然釉付着、胴部ヘラケズリ後ナデ、底部ヘラケズリ／内面：ナデ	①灰 ②白色粒、黒色粒 ③還元焔	口縁部～底部 9/10

6 号土坑（D-6）

掲載№	種類 器種	計測値 (cm)	成形・整形技法	①色調　②胎土　③焼成	備考
1	須恵器 坏	口径：(12.1) 底径：6.7 器高：4.1	ロクロ成形　外面：底部回転糸切り	①灰 ②白色粒、黒色粒 ③還元焔	口縁部～底部 3/5
2	須恵器 坏	口径：－ 底径：7.7 器高：＜ 1.3 ＞	ロクロ成形　外面：自然釉付着	①灰 ②白色粒 ③還元焔	底部破片 蓋として転用 D-55 と接合

8 号土坑（D-8）

掲載№	種類 器種	計測値 (cm)	成形・整形技法	①色調　②胎土　③焼成	備考
1	土師器 台付甕	口径：－ 底径：(10.4) 器高：<2.8>	外面：台部ナデ、ヨコナデ／内面：台部ヘラナデ、ヨコナデ後ナデ	①灰黄褐 ②白色粒、黒色粒、角閃石、石英 ③良好	台部 1/3
2	須恵器 坏	口径：－ 底径：(7.2) 器高：＜ 1.3 ＞	ロクロ成形　外面：底部回転糸切り	①灰 ②白色粒、黒色粒 ③還元焔	体部～底部 1/2
3	土壁	長さ：＜ 8.2 ＞ 幅　：＜ 5.4 ＞ 厚さ：＜ 3.8 ＞	漆喰、スサ多量に混入、煤付着	①明褐灰 ②白色粒、黒色粒、赤色粒、礫 ③良好	破片

9 号土坑（D-9）

掲載№	種類 器種	計測値 (cm)	成形・整形技法	①色調　②胎土　③焼成	備考
1	須恵器 坏	口径：－ 底径：(7.2) 器高：＜ 2.3 ＞	ロクロ成形　外面：体部指頭痕あり、煤付着、底部回転糸切り	①灰 ②白色粒、黒色粒、石英 ③還元焔	体部～底部破片

12 号土坑（D-12）

掲載№	種類 器種	計測値 (cm)	成形・整形技法	①色調　②胎土　③焼成	備考
1	土師器 坏	口径：(11.8) 底径：－ 器高：＜ 3.3 ＞	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、指頭痕あり、底部ヘラケズリ／内面：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ	①橙 ②白色粒、黒色粒、石英 ③良好	口縁部～底部 1/4

30 号土坑（D-30）

掲載№	種類 器種	計測値 (cm)	成形・整形技法	①色調　②胎土　③焼成	備考
1	磁器 碗	口径：－ 底径：3.4 器高：＜ 2.7 ＞	外面：施釉、呉須で横位沈線３本／内面：施釉	①素：灰白／釉：灰白 ② ③	体部～底部破片
掲載№	種類 器種	計測値 (cm)	特徴・重さ (g)		
2	鉄製品 鉄板	長さ：＜ 5.5 ＞ 幅　：＜ 5.2 ＞ 厚さ：2.0	重さ：55.9 g		

32 号土坑（D-32）

掲載№	種類 器種	計測値 (cm)	成形・整形技法	①色調　②胎土　③焼成	備考
1	須恵器 瓶類	口径：－ 底径：(8.7) 器高：＜ 2.5 ＞	ロクロ成形　外面：体部ヘラケズリ、底部回転糸切り	①灰 ②白色粒、褐色粒 ③還元焔	胴部～底部破片

42 号土坑（D-42）

掲載№	種類 器種	計測値 (cm)	成形・整形技法	①色調　②胎土　③焼成	備考
1	土師器 坏	口径：13.2 底径：－ 器高：3.0	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、指頭痕あり、底部ヘラケズリ／内面：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ	①橙 ②白色粒、黒色粒、角閃石、石英 ③良好	口縁部～底部 2/3
2	土師器 坏	口径：(15.6) 底径：－ 器高：＜ 3.9 ＞	外面：口縁部ヨコナデ、体部未調整、底部ヘラケズリ／内面：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ、赤彩あり	①にぶい橙 ②白色粒、黒色粒、雲母 ③良好	口縁部～底部 1/8
3	土師器 坏	口径：(13.2) 底径：－ 器高：＜ 3.7 ＞	外面：口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ、ヘラケズリ／内面：口縁部～底部ヘラミガキ	①にぶい橙 ②白色粒、褐色粒 ③良好	口縁部～底部 1/6
4	土師器 坏	口径：－ 底径：－ 器高：＜ 1.5 ＞	外面：体部～底部ヘラケズリ／内面：螺旋状暗文	①にぶい橙 ②白色粒、黒色粒、褐色粒 ③良好	体部～底部破片

43 号土坑（D-43）

掲載№	種類 器種	計測値 (cm)	成形・整形技法	①色調　②胎土　③焼成	備考
1	須恵器 坏	口径：(11.8) 底径：(6.8) 器高：4.0	ロクロ成形　外面：底部回転糸切り、煤付着／内面：煤付着	①灰白 ②白色粒、黒色粒、褐色粒、石英 ③還元焔	口縁部～底部 2/5

48 号土坑（D-48）

掲載№	種類 器種	計測値 (cm)	成形・整形技法	①色調　②胎土　③焼成	備考
1	須恵器 蓋	口径：(17.8) 鈕径：(3.9) 器高：4.6	ロクロ成形　外面：天井部鈕貼付け時周辺ナデ、体部回転ヘラケズリ	①灰 ②白色粒、黒色粒 ③還元焔	天井部～口縁部 1/5

64 号土坑（D-64）

掲載№	種類 器種	計測値 (cm)	成形・整形技法	①色調　②胎土　③焼成	備考
1	土壁	長さ：＜ 3.6 ＞ 幅　：＜ 4.1 ＞ 厚さ：＜ 1.9 ＞		①明赤褐 ②白色粒、石英、礫 ③良好	壁部破片

61 号ピット（P-61）

掲載№	種類 器種	計測値 (cm)	成形・整形技法	①色調　②胎土　③焼成	備考
1	土師器 坏	口径：(12.7) 底径：— 器高：＜ 3.2 ＞	外面：口縁部ヨコナデ、体部未調整、底部ヘラケズリ／内面：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ	①にぶい赤褐 ②白色粒、黒色粒、雲母 ③良好	口縁部～底部 1/4

1 号井戸（I-1)

掲載№	種類 器種	計測値 (cm)	成形・整形技法	①色調　②胎土　③焼成	備考
1	軟質土器 土鍋	口径：(25.7) 底径：— 器高：<5.4>	外面：口縁部～胴部ロクロ成形、指頭痕あり／内面：口縁部～胴部ロクロ成形	①外面：橙／内面：褐灰 ②白色粒、黒色粒、褐色粒 ③やや酸化	口縁部～胴部破片
2	軟質土器 内耳鍋	口径：— 底径：(27.4) 器高：<4.2>	外面：胴部ケズリ後ナデ、底部ナデ、煤付着／内面：胴部～底部ナデ	①褐灰 ②白色粒、黒色粒、石英 ③良好	胴部～底部破片

遺構外出土遺物（古代）

掲載№	種類 器種	計測値 (cm)	成形・整形技法	①色調　②胎土　③焼成	備考
1	土師器 坏	口径：(11.8) 底径：— 器高：3.1	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、指頭痕あり、底部ヘラケズリ／内面：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ	①にぶい橙 ②白色粒、褐色粒、角閃石、石英 ③良好	口縁部～底部 1/6
2	土師器 坏	口径：12.1 底径：— 器高：3.6	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、ヘラケズリ、底部ヘラケズリ／内面：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ	①橙 ②白色粒、黒色粒、石英 ③良好	口縁部～底部 3/4
3	土師器 坏	口径：(12.9) 底径：— 器高：＜ 2.8 ＞	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、指頭痕あり、底部ヘラケズリ、煤付着／内面：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ	①にぶい橙 ②黒色粒、角閃石、石英 ③良好	口縁部～底部 1/4
4	土師器 坏	口径：— 底径：— 器高：＜ 0.8 ＞	外面：底部ヘラケズリ／内面：底部ヨコナデ、ナデ、線刻あり	①橙 ②白色粒、角閃石、雲母 ③良好	底部破片
5	土師器 坏	口径：(16.4) 底径：(10.2) 器高：3.7	外面：口縁部ヘラケズリ後ヨコナデ、体部ヘラケズリ、底部ナデ／内面：口縁部～体部放射状暗文、底部螺旋状暗文	①にぶい橙 ②白色粒、褐色粒、角閃石 ③良好	口縁部～底部 1/5
6	土師器 坏	口径：(11.8) 底径：(7.8) 器高：＜ 3.5 ＞	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ、底部ナデ／内面：口縁部～底部ヘラミガキ	①橙 ②白色粒、黒色粒 ③良好	口縁部～底部 1/6
7	土師器 甕	口径：(20.3) 底径：— 器高：<9.7>	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ、指頭痕あり、煤付着／内面：口縁部ヨコナデ後ナデ、胴部ヘラナデ後ナデ、煤付着	①にぶい橙 ②白色粒、褐色粒、角閃石、雲母 ③良好	口縁部～胴部 1/4
8	須恵器 蓋	口径：(10.6) 鈕径：— 器高：2.9	ロクロ成形　外面：ヘラナデ	①灰 ②白色粒、黒色粒 ③還元焔	天井部～口縁部 1/4
9	須恵器 蓋	口径：(13.3) 底径：(11.6) 器高：3.7	ロクロ成形	①灰 ②白色粒、黒色粒 ③還元焔	天井部～口縁部 1/5
10	須恵器 坏	口径：(11.8) 底径：(7.2) 器高：4.0	ロクロ成形　外面：口縁部～体部自然釉付着、底部回転糸切り、自然釉付着	①灰 ②白色粒、黒色粒 ③還元焔	口縁部～底部 1/3
11	須恵器 坏	口径：(11.8) 底径：(7.8) 器高：3.5	ロクロ成形　外面：底部回転糸切り	①灰 ②白色粒、黒色粒 ③還元焔	口縁部～底部破片
12	須恵器 坏	口径：(11.5) 底径：(7.5) 器高：4.1	ロクロ成形　外面：口縁部～体部指頭痕あり、底部回転糸切り	①灰白 ②白色粒、黒色粒、褐色粒 ③還元焔	口縁部～底部破片

掲載№	種類 器種	計測値 (cm)	成形・整形技法	①色調　②胎土　③焼成	備考
13	須恵器 坏	口径：－ 底径：7.2 器高：＜ 1.0 ＞	ロクロ成形　外面：指頭痕あり、底部回転糸切り	①灰白 ②白色粒、黒色粒 ③還元焔	体部～底部破片
14	須恵器 台付甕	口径：－ 底径：－ 器高：<4.1>	ロクロ成形	①灰、灰黄褐 ②白色粒、黒色粒 ③還元焔	底部～台部破片
15	須恵器 甕	口径：－ 底径：－ 器高：＜ 8.1 ＞	ロクロ成形　外面：木葉叩き／内面：青海波文	①灰 ②白色粒 ③還元焔	胴部破片
掲載№	種類 器種	計測値 (cm)	特徴・重さ (g)		
16	石製品 砥石	長さ：13.2 幅　：14.2 厚さ：7.0	磨面あり 重さ：1420 g 石材：安山岩		

中世遺物

掲載№	種類 器種	計測値 (cm)	成形・整形技法	①色調　②胎土　③焼成	備考
1	軟質土器 内耳鍋	口径：－ 底径：(21.5) 器高：<6.9>	外面：胴部ナデ、指頭痕あり、底部ケズリ／内面：胴部～底部ナデ、指頭痕あり	①外面：にぶい褐／内面：灰 ②白色粒、黒色粒、褐色粒 ③良好	胴部～底部破片 中世
2	軟質土器 鍋	口径：－ 底径：(16.6) 器高：<4.5>	外面：胴部ナデ、指頭痕あり、回転ヘラケズリ、底部ナデ、煤付着／内面：胴部～底部ロクロ成形、煤付着	①にぶい橙 ②白色粒、黒色粒、褐色粒 ③良好	胴部～底部破片
3	陶器 鉢	口径：(29.0) 底径：－ 器高：＜ 5.4 ＞	外面：口縁部ロクロ成形、施釉／内面：口縁部ロクロ成形、施釉	①淡黄 ②白色粒 ③良好	口縁部破片

Ⅵ　自然科学分析

株式会社古生態研究所　高橋　敦

はじめに

総社村東 03 遺跡の埋蔵銭に使われた緡ひも、貫文ひも、埋蔵銭取り上げ後の土坑壁面に残っていたひもと考えられる繊維について素材を検討するための薄片作製と同定を実施した。

1. 試料

試料は、18 号土坑内より出土した埋蔵銭の緡ひも 2 点 (緡ひも 1 , 2)、貫文ひも 1 点、取り上げ後に土坑壁面に残っていた紐 1 点 (現地調査 - 仮 2) の合計 4 点である。

2. 分析方法

各試料の写真撮影と実体顕微鏡による観察を実施した後、試料を合成樹脂で包埋し、樹脂を固化させる。ダイヤモンドカッターを用いて、繊維に直交するように切断する。切断面を研磨した後、スライドグラスに接着し、反対側も切断と研磨を行ってプレパラートとする。生物顕微鏡を用いてプレパラートを観察し、組織の種類や配列を現生標本と比較して種類 (分類群) を同定する。（第 39 図）

3. 結果

第 4 表に観察結果を示し、以下に各試料の外観的特徴と組織観察結果について記す。

・緡ひも 1

最大径約３㎜の紐状を呈する。全体的に保存状態が悪いが、繊維が捻れている状況が確認できる。横断面の組織観察では、軸方向組織のみで構成され、放射組織は認められない。破損が激しいが、所々に維管束が抜けた痕跡と思われる空壁があり、不斉中心柱を持つ種類と考えられる。用途を考慮すれば、イネ科と考えられる。

・緡ひも 2

ひもの結び目部分である。紐を構成する繊維は薄い板状を呈する。板の幅は最大で約２㎜。横断面の組織観察では、軸方向組織のみで構成され、放射組織は認められない。軸方向組織の中に、等間隔で維管束が破損した空壁が並ぶことから、不斉中心柱を持つ種類であり、用途等も考慮するとイネ科と考えられる。

・貫文ひも

ひもは、薄い板状の繊維が多数集まって構成されている。板の幅は最大で約２㎜。所々、繊維が 0.1㎜程度の細い紐状に割けている部分が認められる。

横断面の組織観察では、軸方向組織のみが認められ、放射組織は認められない。軸方向組織は、維管束が散在する様子が認められる。維管束は、２対４個の道管と、それを囲む繊維細胞で構成されており、形状からイネ科に同定される。

・現地採取 - 仮２

埋蔵銭を全て取り上げた後、土坑の壁面に水平方向に残っていた紐である。土塊に付着した状態で遷移が認め

第４表　分析試料と観察結果

遺構	試料名	位置	内容	観察結果	備考
18 号土坑	緡ひも 1	―		イネ科？	
	緡ひも 2	―		イネ科？	ワラすぐり、ワラ叩き
	貫文ひも	―		イネ科	ワラすぐり、ワラ叩き
	現地調査 - 仮 2	銭取上後・壁面	壁面に水平に残るひも痕	イネ科？	

られるが、保存状態は極めて悪く、詳細は不明である。横断面の組織観察では、軸方向組織のみが認められ、放射組織は認められない。中央部に空壁のある繊維細胞が認められ、不斉中心柱を持つ種類の維管束と判断される。用途等を考慮すれば、イネ科と考えられる。

4. 考察

紐類は、貫文ひもがイネ科に同定され、残る３点も組織の特徴や用途からイネ科の可能性が高い。イネ科について、組織的に区別することは難しいが、民俗事例 (宮崎 1985a,1985b) や中津居館跡（山口県岩国市）での分析事例 (高橋 ,2016) 等を考慮すれば、イネを用いた稲藁の可能性がある。

試料のうち、貫文ひもと緡ひも２は、外観的な特徴をみると、いずれも薄い板状を呈した繊維が多数集まっている状況が認められる。同試料の薄片観察でも、1/3 ～ 1/4 に割れた状態のイネ科の稈 (茎) が集まっている様子が見られる。また、観察した範囲では、稈のみが認められ、葉部は認められない。緡ひも１は、繊維が捻れている状況が見られることから、ひもを作る過程で繊維を撚り合わせている状況が想定される。現地調査 - 仮２については、外観的には繊維が僅かに認められるのみである。なお、緡ひも１と現地調査 - 仮２についても、稈のみで構成されており、葉部は認められない。

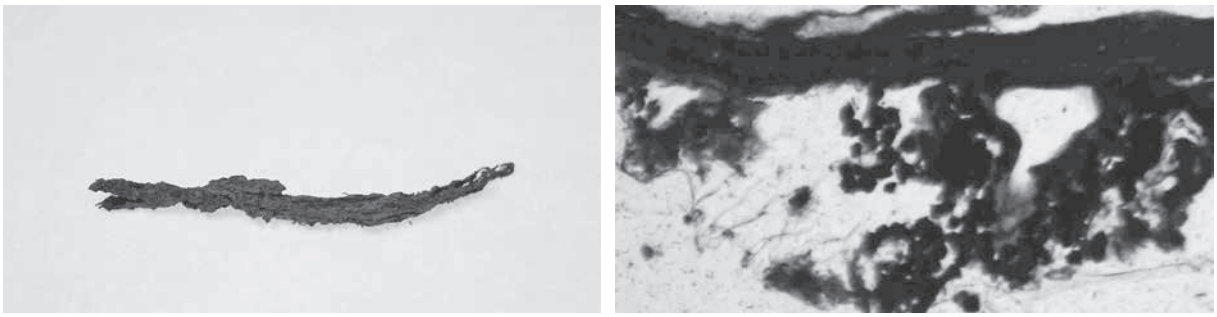
イネ科の稈 (茎) は、本来は中空の円筒状を呈している。イネの稈を紐・縄の素材として利用する場合、民俗例では、葉を取り除くワラすぐりと、稈を叩いて潰すワラ叩き (ワラ打ち) を行う (宮崎 ,1995)。とくに、藁叩きは、円筒状の稈を叩いて潰す事により、稈同士の接地面積が増加して引っ張りに対して強くなる効果がある。

外観および薄片でイネ科の稈が板状を呈している状況は、ワラ叩きを行った可能性を示唆する。また、観察した範囲で葉と考えられる部位が認められないことから、ワラすぐりも実施している可能性がある。

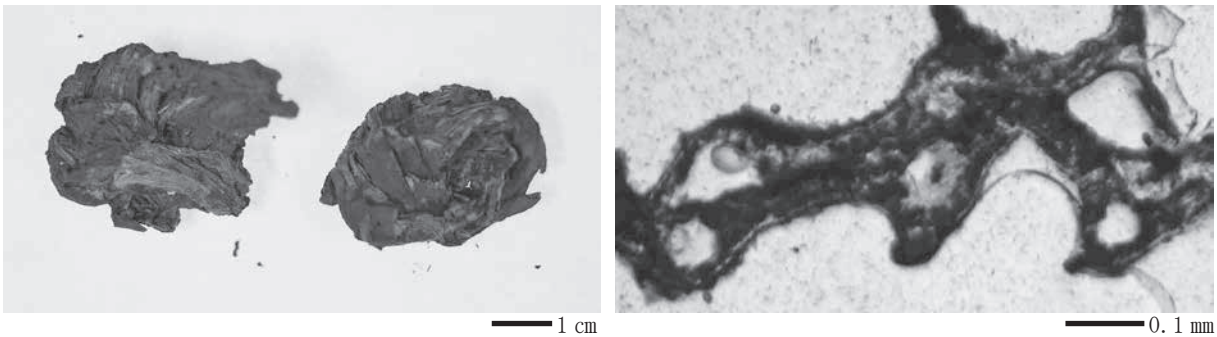
ワラすぐりやワラ叩きの痕跡は、中津居館跡の甕内から出土した埋蔵銭の緡ひもの分析でも報告されている (高橋 ,2016)。距離的にも離れた２遺跡で出土銭の緡ひもにワラすぐりやワラ叩きの痕跡が認められたことは、稲藁利用の技術史を考える上でも興味深い結果といえる。

引用文献

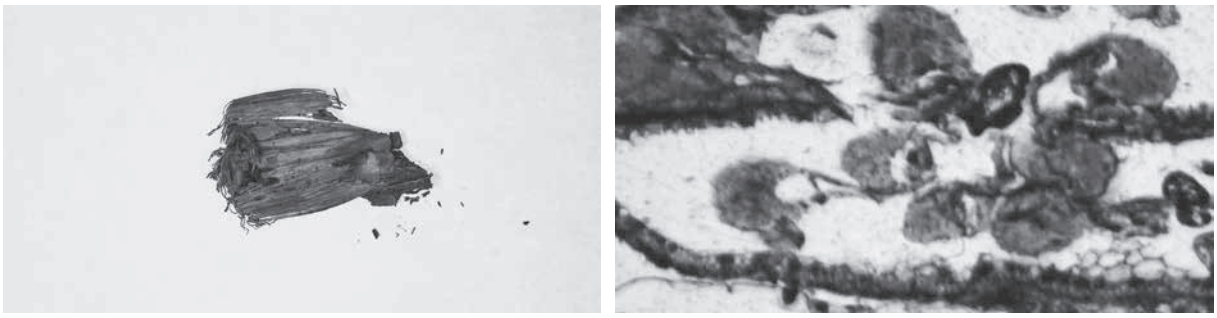
宮崎　清 ,1985a, 藁Ⅰ . ものと人間の文化史 55-I, 法政大学出版局 ,369p.
宮崎　清 ,1985b, 藁Ⅱ . ものと人間の文化史 55-II, 法政大学出版局 ,383p.
宮崎　清 ,1995, 図説　藁の文化 . 法政大学出版局 ,543p.
高橋　敦 ,2016, 出土銭緡・こも片の分析 .「中津居館跡Ⅱ」, 岩国市埋蔵文化財調査報告第２集 , 岩国市教育委員会 ,63-67.



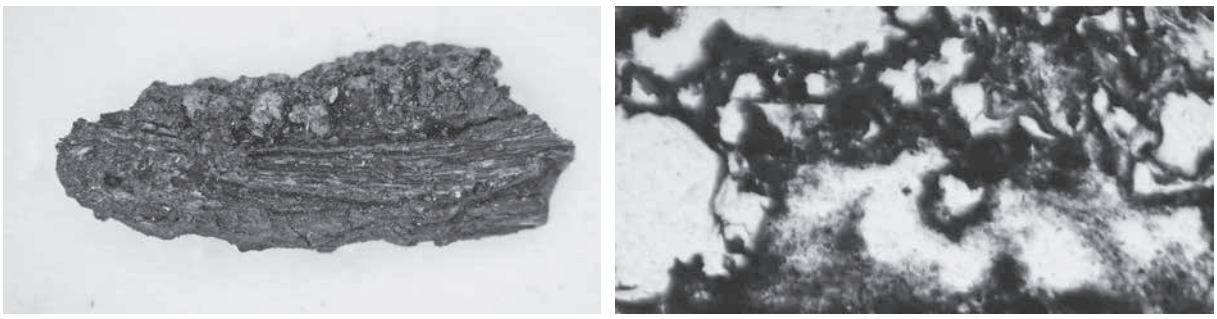
緡ひも 1(イネ科 ?)　左：遺物全景、右：横断面の顕微鏡写真



緡ひも 2(イネ科 ?)　左：遺物全景、右：横断面の顕微鏡写真



貫文ひも（イネ科）　左：遺物全景、右：横断面の顕微鏡写真



現地調査－仮 2(イネ科 ?)　左：遺物全景、右：横断面の顕微鏡写真

第 39 図　紐類の外観と横断面顕微鏡写真

Ⅶ　発掘調査の成果と課題

総社村東 03 遺跡は、縄文時代から中世にかけての遺構や遺物が存在している複合遺跡である。

縄文時代等の原始の遺構はなく、遺物だけが単独で発見されている。

古墳時代から奈良時代の集落は調査区南西部の 1 カ所に集中している。今回の遺跡では、古墳時代から奈良時代の竪穴住居 4 軒の他 , 1 間× 1 間の掘立柱建物が 3 棟の存在がある。またその住居の埋没後にカーボンを床上にして、炉状にした焼土が何カ所も確認でき、それにカーボン分布が伴なっている。

同じ場所を短期間で同じような火を使う作業を幾度となく繰り返している。

小鍛冶の鍛治椀型滓の 2 点出土があるが、鍛治炉本体は確認できていない。小鍛治の鍛造剥片（スケール）なども確認されていない。結果、この場所は小鍛冶作業とは関連していないものと考え、この遺構は性格不明である。

本遺跡の最大の特徴は、埋蔵銭の発見である。埋蔵銭については、別途項目をつくりまとめる。

今回の大屋敷地名の埋蔵銭は、約 106,000 枚を超えるものであり、群馬県内では最多なものである。

○土器編年から見た総社村東 03 遺跡 (第 40 図)

総社村東 03 遺跡の土器編年をみる。

総社村東 03 遺跡に住居が現れるのは、 6 世紀後半の古墳時代である。

この時期には 1 号住居が 1 軒あり、土師器坏が 4 点、他遺構から坏 1 点の一括出土があった。須恵器は大甕の破片のみである。 6 世紀後半の坏は第 9 図 1 にあるように口縁が直立し幅が広く、稜がしっかり造られている。

なお、他の 3 点は口径が 10 ～ 12㎝と小さく口縁の幅が狭く、口縁の外反が認められ器高は 4 .0㎝弱となる。また、須恵器の模倣坏が 1 点 2 号住居の一括資料の中に含まれていた。

7 世紀代の遺構及び遺物はない。

次に 8 世紀前半の 2 号住居が続き、一括出土として土師器坏 10 点、土師器甕 6 点、同埦 1 点、須恵器は須恵器蓋 1 点の出土があった。坏は口径の小さなものが多く、底部の丸底が顕著である。一部丸底の底部器高が少なくなったものも存在している。これらの器形が 8 世紀後半の坏に引き続いていくようである。

須恵器の把手付き平瓶は完形品で天地を逆にして埋められていたため、祭祀行為に使われた物と考えた。隣に須恵器坏も完形品で置かれており、同時期の遺物である。須恵器蓋は、蓋のかえりが口縁より内側にあるものが古くかえりが無いものに変形していく。

8 世紀の中頃の遺物は須恵器蓋 1 点である。時期の異なる住居の覆土出土で検出された。遺構としては存在していない。

8 世紀後半の遺物は 3 号住居より一括出土している。土師器坏は 9 点と多く、土師器皿 1 点、同甕は 1 点と少ない。須恵器は蓋 7 点・坏 7 点、高台坏埦 2 点、ミニチュアの短頸壺 1 点の出土があった。

この短頸壺は水滴として使用したと考えられ、墨を使い、文字を書く際に使用していたことを伺うことができる。

6 世紀後半の 1 号住居から 8 世紀前半の 2 号住居が存在するまでに、7 世紀の約 100 年間、遺構はまったく認められていない。また、8 世紀中頃の須恵器蓋 1 点が発見されているが、その年代の遺物は他に存在していない。

8 世紀後半の遺物が出土する 3 号住居が存在する。本遺跡の中で最も遺物が豊富で特に須恵器の数量が極端に増えている。

平安時代（ 9 世紀代）の土師器坏 1 点が見られた。平底で体部外面に指頭圧痕の調整が残るが、他は未調整である。

今回の調査地で土器編年を検討してみたが、基本として住居の一括遺物をメインに行った。

その他の遺構外遺物・土坑群などの出土遺物や総社村東遺跡・大屋敷遺跡では 300 軒以上の竪穴住居群が調査され、未調査分を含めるとその何倍・何十倍かの住居数が得られ、全体を見た場合もっと細かな土器の変化を編年表に反映することができる。今後、この地域の土器編年を試みることで、もっと細かな地域的考察もできるものと考える。

総社村東 03 遺跡の土器編年（案）

	土師器		須恵器			
	坏	甕	蓋	坏	瓶	他
6C 後半	H-1 2, H-1 1, H-1 3, H-2 13, H-1 4					
7C						
8C 前半	H-2 8, H-2 3, H-2 9, H-2 6, H-2 7, H-2 11, H-2 2, H-2 1, H-2 12, H-2 5, H-2 4, H-2 16, H-2 18, H-2 19, H-2 14, H-2 17, H-2 15		H-2 21	22号-1, 22号-2, H-2 24		
8C 後半	H-3 2, H-3 7, H-3 5, H-3 3, H-3 4, H-3 8, H-3 9, H-3 6, H-3 1, H-3 10, H-3 11		H-3 12, H-3 13, H-3 14, H-2 20, H-3 15, H-3 16, H-3 17, D-48 1, 遺構外-9	H-2 22, H-2 23, H-3 18, D-43 1, H-3 19, H-3 20, 遺構外-10	H-3 21, H-3 22	H-3 23
9C	H-2 10					

第 40 図　総社村東 03 遺跡の土器編年（案）

0　1:10　20 cm

○掘立柱建物跡の重複関係

1・2・3号掘立柱建物跡はほぼ同じ場所で短期間の建て替えが3連続で行われている。建物方位（3棟の掘立柱建物の柱の並び）は真北を示している。

1間×1間と小規模な掘立柱建物跡であるが、出土遺物のスサ入りの土壁の中に、白土を5㎜の厚さで塗り付けている破片があり、いわゆる漆喰塗りの壁の存在が確認できた。

この掘立柱建物跡はすべて埋め立てられている。

この重複関係としては、H 1号住居⇒H 3号住居⇒1・2・3号掘立柱建物跡⇒焼土遺構と炭化材の分布遺構範囲がすべて焼土とカーボン層の分布範囲内であり、その遺構が密集するA～C―1～3グリッドに位置している。この広がりの大きさは南北6.0 m、東西6.6 mの範囲に認められ、範囲内の中の焼土や炭化材については幾度も作り変えられていたりして層序も上下している。竪穴住居が廃絶した後にこの性格不明な遺構が立地した。この中でも須恵器平瓶の出土状況は特徴的であり、平瓶の底部を上にして、口縁部・把手部を下にし、底部が水平になるように埋設置している。何か意味ありげな出土状況である。炭化材の分布では、一面にハード面が、植物繊維が面的に炭になっている箇所が存在し、焼土の分布は小規模なものでも断面を観察すると焼土の赤色になるところの裏側断面には徐々にグラデーションの存在があり、長時間じっくり火を使ったことが判明している。第17図の中でも焼土の上に土や炭化材の層が認められたり、焼土がさらに上層にあったりして同じ場所で何度も同じような火をつかった作業をしている。この場所が実際何をしている遺構なのかは不明である。時期的には須恵器の平瓶の埋設を行なっている為、奈良時代であることは確定している。

○漆喰壁・土壁

スサ入り土壁片が数点確認されているが、条件が良い1片は白色粘土を厚さ5㎜で塗りつけており、土壁に漆喰を塗った漆喰壁が存在している。漆喰壁の存在は僅かな資料の発見であるが、漆喰を使ったこの掘立柱建物跡がこの地点だった場合や近くの遺跡から持ち込まれた場合があり、ほとんどの壁材はこの場所から運び出されて他の場所に捨てられたものと考える。

壁が土器化しているので火災にあったものと考える。

また、前橋の7世紀末の宝塔山古墳・蛇穴山古墳の2基は石室に漆喰が塗られている。古墳時代の最終末の方墳で横穴式石室に漆喰が塗られていることも確認されている。時代的にも古墳時代の最終末と奈良時代に近い時代で、関連性は指摘できる。

前橋市内の遺跡では集落内から漆喰壁の出土はないが、高崎市の竪穴住居に漆喰壁が多く出土している例が「菅谷遺跡群1」でH－109号住居が高崎市教育委員会の発掘調査で確認されている。この住居は、南西部を別住居と重複関係にあり、4ｍ×3ｍの隅丸長方形の規模の住居で、東壁にカマドを敷設されると考えられるが不明である。漆喰痕跡の土壁は焼けており、北西コーナーを起点に西壁寄りに土壁の破片が散在している。担当者によると、壁建ち式の土壁を想定しているが、B－B'東西セクションを観察すると1層の上部に土壁片、8層にも土壁の断面が存在している。また、4層の下に炭化材が確認されている。この4層の炭化材を焼失家屋の垂木材とした場合、土屋根として認識でき、この竪穴に土壁が付設されていると考えるよりは、近くに土壁に白色漆喰を持つ施設（平地式の壁立ち建物か高床建物で土壁を持つ建物）が建立されていたものがあり、H－109住居が廃屋になった窪地の状態に多くの土壁片が廃棄された可能性がある。なお、土壁は本来練り直せば何回でも使用可能であるが、廃棄されたのは土壁が焼けており、建物本体が火災にあって再利用ができなかったからと考える。このH－109住居の年代は、9世紀後半の平安時代である。

本遺跡の奈良時代掘立柱建物の土壁建物は、高床建物で土壁漆喰塗りの施設が存在している。

3回の建て直しがある。掘立柱建物は3棟とも土壁漆喰仕上げの建物とは考えていない。1棟程度が白土漆喰仕上げである。遺物としては、須恵器の水滴や把手付き平瓶など特異な遺物から墨を使用する施設を考えたい。

また、この場所から土壁・白土塗り土壁（漆喰壁）を伴っており、小さなお堂のような施設が想定される。

○カマド構築石材について

本遺跡では、竪穴住居のカマド構築石材と同じ石材が 4 号住居のカマド右袖に 1 カ所、左側には同石材の破片が存在しているが、袖材ではない。また、同じ石材でカマドとは別の土坑に石材設置が認められた。

この石材は、5 カ所で 8 点確認されているが、いわゆる「砂質凝灰岩」である。

この石材は前橋砂礫層で、「鳥羽遺跡」「上野国分寺」などが立地する台地の下層に堆積しているもので、川・谷・溝などの台地縁辺部の露頭に存在が確認されている。先の 2 遺跡では露天掘りの採掘場の調査が行われている。採掘場の発掘調査は、「鳥羽遺跡Ｌ・Ｍ・Ｎ・Ｏ区」のＬ区で 1 か所、Ｍ区で 3 カ所・Ｏ区で 1 か所が良く知られている。大規模な採掘場は「鳥羽遺跡」のＯ区で南北 16 m、東西 11 m、176㎡で東西方向には広がるものと考えられる。他には小規模な採掘場であれば「鳥羽遺跡」北側の「上野国分僧寺・尼寺中間地域」や「大屋敷遺跡Ⅲ」・「稲荷塚村東遺跡」・「元総社蒼海遺跡群」内の 7・36・38 次調査及び「小見内Ⅵ遺跡」など多くの報告がある。

総社村東 03 遺跡では、カマド構築材を先の構築材採掘場から取得することも考えられるが、同じ前橋砂礫層に覆われた台地上の遺跡であることから、西側 100 mに南流する八幡川があり、この露頭で採収することがより効率が良いものと考える。また、本遺跡から南東 300 mの「大屋敷遺跡Ⅲ」から溝址の採掘坑が認められており、ここから搬入することも理想的な条件を整えている。

但し、4 号住居以外、この石材はカマドの袖石に使用されたものではなく、21 号土坑・22 号土坑・36 号土坑・41 号土坑など 4 基の土坑の中から出土しているが直立した設置された状態で出土している。カマドとしては石材の位置関係・間隔や断面における焼土の検出がないことなど、カマドとは別な遺構として考えなくてはいけない。この石材は水洗いしただけでほとんどは小ブロックや溶けてしまい、石材としての報告はできない。21 号土坑は 20 × 13 × 17㎝、24 × 11 × 15㎝、22 号土坑は 7 × 17 × 10㎝、36 号土坑は 18 × 11 × 17㎝、12 × 16 × 22㎝、41 号は 11 × 10 × 20㎝を測るが四角柱で取り出したものである。

大屋敷遺跡Ⅲの石材採掘坑は露天掘りで掘削され、掘削坑を地山で観察するとＡ・Ｂ・Ｃの３段階に分けられる。Ａは極めて硬く、粒も細かい。ＢはＡよりは粗い粒になり、3㎜程の礫が僅かに含まれる。ＣはＢよりさらに粗く含まれる礫も大きくなる。今回本遺跡で出土した石材は、Ｂ・Ｃタイプのものである。

○焼土とカーボン分布が多量に分布

カーボン層が面的に広がりをもって確認され、焼土の分布も幾カ所も存在し、貼り床も何回か存在している。何回にもかけて作業を繰り返し、ある程度の広さをもって仕事をしていたことが判明しているが何をしていたかは不明である。

土器埋設遺構（22 号遺構）はこの平瓶の完形品が、底を上に口縁を下にして埋められていた。また、須恵器坏は平位に出土したが、焼土層の下まで埋められている。この場所は焼土面が分布するところで土器の下にはカーボン層が一面に存在していた。焼土を観察すると、焼土にもいくつか状況が異なっており、赤いところと白黄色に焼けた炉壁状のものも見られた。一旦焼土面が出来ていたところを壊して敷き馴らしている。

この場所については地鎮祭を行なった所ということが考えられ、1 間× 1 間と小規模な掘立柱建物跡や土壁に漆喰を塗った漆喰壁が存在していることなど、当時としてはとても特徴的な施設が構えられていたものと考えられる。

総社村東 03 遺跡を説明してきたが、南で調査された大屋敷遺跡が 6 年間で道路部分の発掘調査により 313 軒という膨大な竪穴住居を検出している。同時に膨大な遺物、貴重な遺物が多く確認されている。

総社村東遺跡と大屋敷遺跡は合わせて周辺遺跡環境を見た場合重要な場所であることはいうまでもない。土壁（漆喰壁）の存在が「山王廃寺」の土壁（2000：松田）の存在と大きく関わりを持ってくるものと考えられ、今後の調査に期待したい。

Ⅷ　埋蔵銭を考える

総社村東 03 遺跡の発掘調査で一番の特記事項は、埋蔵銭である。

大量古銭の出土について、一括出土銭・備蓄銭・埋納銭・埋蔵銭などいろいろな用語があるが、本報告書では「埋蔵銭」という名称で報告する。

○埋蔵銭の現状

大量古銭の発見は多くの場合、工事中や農作業中などの偶然なものがほとんどである。これらにより発見されたものは、発見者・関係者により持ち去られたりして、銭貨そのものは全部が把握できるものではなく一部だけが残されているものが多い。

近年は、発掘調査で埋蔵銭が発見されるケースが増加しており、出土地点の性格としては、中世の屋敷・城館跡・寺院跡などに関わる地域からの出土例が多い。

○群馬県内の埋蔵銭について

上大屋南部地区遺跡群「上大屋下組遺跡・上大屋中組遺跡・上大屋天王山遺跡」（山下：1999）の中で「群馬県内出土の埋納銭（備蓄銭）等と上大屋中組出土銭について」と題して 1999 年発行時までの埋蔵銭を県内 35 地点を調べている。その中で最大の出土量は高崎市（旧倉渕村）水沼の出土銭で総数 49,215 枚である。

この銭貨の多くは中国からの渡来銭（唐銭・北宋銭・南宋銭）であり、朝鮮銭・琉球銭・安南銭・日本（皇朝十二銭）、私鋳銭・島銭・加工銭が出土している

今回、総社村東 03 遺跡で発見された埋蔵銭は約 106,000 枚の出土である。

○全国の 10 万枚を超える埋蔵銭

全国の埋蔵銭を見ると、100,000 枚以上の遺跡は下記の通りで多くなく、下記の 6 遺跡が知られている。

新井堀の内遺跡	埼玉県蓮田市	約 260,000 枚	(甕) [武家館跡]
堂坂遺跡	兵庫県宝塚市	194,825 枚	(壺 7 個)
志海苔遺跡	北海道函館市	374,436 枚	(甕 3 個)
石白 1 次遺跡	新潟県湯沢町	169,872 枚	(木箱)
石白 2 次遺跡	新潟県湯沢町	101,912 枚	(木箱)
白子遺跡	埼玉県和光市	114,368 枚	(甕)

枚数で見れば石白 2 次調査より本遺跡の方が多く出土しており、全国 6 位の出土枚数となる。また、堂坂遺跡は壺 7 個で 194，825 枚、志海苔遺跡は甕 3 個で 374,436 枚であり一つの埋納容器で見た場合、当遺跡の 106,000 枚より少ないケースもあり得る。

銭を入れた容器は甕・壺・木箱がほとんどである。前例枚数より少くなくなった場合、容器は曲物や桶が利用されることやその他布袋、筵・ゴザなどもある。

総社村東 03 遺跡のようにカマス袋（菰・筵）で埋蔵銭 10 万枚を超えるものはなく、全国で初めての事例である。

○埋蔵銭の取り上げ方法の検討

①埋蔵銭の土坑を含めて周りの土ごとを切り取って一つのブロックとしてクレーンで持ち上げ整理室に搬入する方法。

良い点：一度に現地から引き上げられ、現地調査の作業効率を良くする。整理事務所へ移動。

悪い点：整理事務所に運んだ後、動かせない。調査予算に計上なく費用負担ができない。

②上面から一面ずつ、写真を撮り、焼き付けた写真に一緒ごとにナンバーを付け、所在を判明させる。

※取上げは②の方法を採用、現地において一緡ごとに取り上げる方法で対応することとなった。

銭緡を取り上げる際のいろいろ

① 緡を取り上げる際、緡の結び目をもって一緡として取り上げているが、緡がギッシリ詰められているため、上下左右の緡の関係で一緡を取りきれていないものもある。

② 確認時の銭埋納遺構は木箱を容器にしていたと想定していた。

③ 遺構確認時、砂粒を多く含む覆土で隅丸長方形のプランを確認、東西方向にセクションベルトを設けて北・南部に調査を進める。

○整理方法について

民間の発掘調査会社では、契約期間内に今回の大量の埋蔵銭の整理がすべて行えるとは考えられない。その為、株式会社デンソーワイパシステムズとの協議の結果、令和５年度９月まで整理業務工期延長を了解してもらう。また、株式会社甲セオリツと前橋市教育委員会が協議し、期間内及び費用の負担ができない予算設計であるため、延長期間内で予算経費内でできる仕事でとどめておくこととなった。

一緡ごとにハケブラシで簡単なクリーニングを行い、ビニール袋に収納するだけにとどめ、銭の拓本などを取ることは物理的に困難なため行わない、銭の枚数も数えなくてよいという方向ですすめることになった。また、緡の写真についても遺物写真として撮影しないことも確認された。

以上のことから、「銭の調査の方法について」以下の内容に対して行うことが理想であったが今後の埋蔵銭整理業務に委ねることとする。

※銭の調査の方法について

①銭銘の判読　②判読不明銭のクリーニング判読　③銭銘の分類　④銭種の細分

⑤法量・重量の計測・加工痕の観察　⑥代表的な古銭の拓本・写真撮影

○埋蔵銭が出土した「大屋敷」の字名について

総社村東 03 遺跡は、総社町総社字大屋敷という地名であり、『大屋敷』という字名に、ここに大きな屋敷があったことをうかがわせている。

○カマス袋の利用について

カマス袋は、通常の大きさの筵を考えると、埋蔵していた土坑の規格は長辺 100㎝、短径 65㎝である。カマス袋を土嚢などで使う場合は長辺２カ所と短辺 1 カ所をひもで縫い付け、最後に短辺を縛っている。

ただし、土坑の床面には筵が面的に敷き詰められており、筵を長軸に広げて上部から一貫文の束を規則正しく北側、中、南側の３列で東西に並べ入れたものである。各列が約 40 緡前後で北・中・南側と並べられていた。

その為、最後の銭を入れた後、紐で縛って開口部を縫い付けたものと考える。

○サンプル調査

今回の埋蔵銭の性格を見るため、最低限のサンプル調査を行なう。

全体で約 1060 緡存在する中で、5 面目南側列（S 1 ～ 40）(1 緡・35 緡が欠番) の 38 緡についてサンプル調査を行う。全体の約 0.00036％と比率が少ないと思われるが実施した。

この試みにより、緡を取り上げる際に現状を維持できず、何カ所かで割れてしまっている。この割れ面で銭銘を読む作業も行う。一緡 100 枚として 38 緡、本来 3800 枚銭銘を確認するところを 334 枚判読する。1 割にも満たない内容の約 0.088％であった。

緡の枚数並びに重量を計測する試みをした。その結果は、第７表の通りである。

第５表　銭銘一覧表

※国名表記以外は北宋銭

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
S -1	欠番																			
S -2	元豊通寶（1079）	元祐通寶（1087）	大観通寶（1108）	淳祐元寶（南宋1241）																
S -3	開元通寶（唐 621）	至道元寶（995）	皇宋通寶（1038）	元豊通寶（1078）	元豊通寶（1078）	聖宋通寶（1101）														
S -4	開元通寶（唐 621）	嘉祐元寶（1056）	元豊通寶（1078）	元豊通寶（1078）	背「⌒」															
S -5	開元通寶（唐 621）	咸康元寶（前蜀925）	天聖元寶（1023）	景祐元寶（1034）	皇宋通寶（1038）	皇宋通寶（1038）	皇宋通寶（1038）	熙寧元寶（1068）	熙寧元寶（1068）	熙寧元寶（1068）	元豊通寶（1078）	元豊通寶（1078）	元豊通寶（1078）	元祐通寶（1086）	紹聖元寶（1094）					
S -6	明道元寶（1032）	皇宋通寶（1038）	元豊通寶（1078）	元祐通寶（1086）	宣和元寶（1119）															
S -7	至道通寶（995）	皇宋通寶（1038）	熙寧通寶（1068）	元豊通寶（1078）	元祐通寶（1086）	元祐通寶（1086）	政和通寶（1111）	背「⌒」												
S -8	開元通寶（唐 621）	天聖元寶（1023）	皇宋通寶（1038）	皇宋通寶（1038）	皇宋通寶（1038）	皇宋通寶（1038）	熙寧通寶（1068）	熙寧通寶（1068）	元豊通寶（1078）	元符通寶（1098）	聖宋元寶（1101）	政和通寶（1111）	政和通寶（1111）	政和通寶（1111）	背「—」					
S -9	景徳元寶（1004）	祥符元寶（1009）	皇宋通寶（1038）	元豊通寶（1078）	元豊通寶（1078）	元祐通寶（1086）	元祐通寶（1086）													
S -10	皇宋通寶（1038）	嘉祐通寶（1056）	天豊元寶（1068）																	
S -11	半両（前元B.C.175）	開元通寶（唐 621）	咸平元寶（998）	聖宋元寶（1101）	皇宋通寶（1038）	嘉祐通寶（1056）	熙寧元寶（1068）	熙寧元寶（1068）	元祐通寶（1086）	紹聖元寶（1094）	政和通寶（1111）	紹興元寶（南宋1131）	嘉泰通寶（南宋1201）	背面「四」	背面「十一」					
S -12	□祐元寶	開元通寶（唐 621）	開元通寶（唐 621）	開元通寶（唐 621）	皇宋通寶（1038）	景祐元寶（1034）	治平元寶（1064）	治平元寶（1064）	熙寧元寶（1068）	熙寧元寶（1068）	淳熙元寶（南宋1174）									
S -13	開元通寶（唐 621）	咸平元寶（998）	祥符通寶（1009）	皇宋通寶（1038）	皇宋通寶（1038）	嘉祐通寶（1056）	熙寧元寶（1068）	熙寧元寶（1068）	元豊通寶（1078）	元祐通寶（1086）	元符通寶（1098）	紹□通寶	□□元寶							
S -14	至和通寶（1054）	嘉祐通寶（1056）	熙寧元寶（1068）	元豊通寶（1078）	元豊通寶（1078）	大観通寶（1107）	政和通寶（1111）													
S -15	太平通寶（976）	景徳元寶（1004）	元豊通寶（1078）	元□通寶																
S -16	景徳元寶（1004）	祥符元寶（1009）	天聖元寶（1023）	景祐通寶（1034）	皇宋通寶（1038）	熙寧元寶（1068）	熙寧元寶（1068）	熙寧元寶（1068）	元豊通寶（1078）	元祐通寶（1086）	元祐通寶（1086）	聖宋通寶（1101）	政和通寶（1111）	政和通寶（1111）	□□元寶					
S -17	周通元寶（後周955）	天聖元寶（1023）	皇宋通寶（1038）	治平元寶（1064）	□聖元寶															
S -18	周通元寶（後周955）	皇宋通寶（1038）	皇宋通寶（1038）	元豊通寶（1078）																
S -19	景徳元寶（1004）	天禧通寶（1017）	皇宋通寶（1038）	政和通寶（1111）	紹熙元寶（南宋1190）															
S -20	開元通寶（唐 621）	景祐元寶（1034）	熙寧元寶（1068）	元豊通寶（1078）	元豊通寶（1078）	元豊通寶（1078）	元祐通寶（1086）	元符通寶（1098）	聖宋元寶（1101）	政和通寶（1111）										

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
S -21	祥符通寶（1009）	天聖元寶（1023）	天聖元寶（1023）	治平元寶（1064）	元豊通寶（1078）	紹聖元寶（1094）	元符通寶（1098）	紹定通寶（南宋1228）												
S -22	咸平元寶（998）	景德元寶（1004）	天聖元寶（1023）	紹聖元寶（1094）	皇宋通寶（1038）	元祐通寶（1086）	皇宋元寶（南宋1253）													
S -23	祥符元寶（1009）	紹聖元寶（1094）	紹聖元寶（1094）	熙寧元寶（1068）	熙寧元寶（1068）	熙寧元寶（1068）														
S -24	景德元寶（1004）	元符通寶（1009）	天聖元寶（1023）	天聖元寶（1023）	皇宋通寶（1038）	皇宋通寶（1038）	熙寧元寶（1068）	熙寧元寶（1068）	元祐通寶（1086）	元祐通寶（1086）	聖宋元寶（1101）	大観通寶（1107）								
S -25	天聖元寶（1023）	皇宋通寶（1038）	嘉祐通寶（1056）	政和通寶（1111）	□□元寶															
S -26	開元通寶（唐 621）	開元通寶（唐 621）	景德元寶（1004）	祥符元寶（1009）	皇宋通寶（1038）	嘉祐通寶（1056）	熙寧元寶（1068）	熙寧元寶（1068）	熙寧元寶（1068）	元豊元寶（1078）	聖宋元寶（1101）	宣和通寶（1119）								
S -27	開元通寶（唐 621）	淳化元寶（990）	景德元寶（1004）	祥符元寶（1009）	天禧通寶（1017）	皇宋通寶（1038）	皇宋通寶（1038）	至和元寶（1054）	元豊通寶（1078）	元豊通寶（1078）										
S -28	天聖元寶（1023）	明道元寶（1032）	皇宋通寶（1038）	元豊通寶（1078）	元祐通寶（1086）	紹聖元寶（1094）	政和通寶（1111）	嘉定通寶（南宋1208）	□□通寶											
S -29	開元通寶（唐 621）	至道元寶（995）	天聖元寶（1023）	皇宋通寶（1038）	皇宋通寶（1038）	皇宋通寶（1038）	嘉祐通寶（1056）	治平元寶（1064）	元豊通寶（1078）	元祐通寶（1086）	元祐通寶（1086）	紹聖元寶（1094）								
S -30	開元通寶（唐 621）	開元通寶（唐 621）	祥符元寶（1009）	天禧通寶（1017）	皇宋通寶（1038）	皇宋通寶（1038）	皇宋通寶（1038）	至和元寶（1054）	至和元寶（1054）	熙寧元寶（1068）	元豊通寶（1078）									
S -31	祥符元寶（1009）	嘉祐通寶（1056）	治平元寶（1064）	元豊通寶（1078）	元豊通寶（1078）	政和通寶（1111）	政和通寶（1111）	背「二」												
S -32	皇宋通寶（1038）	皇宋通寶（1038）	嘉祐通寶（1056）	治平元寶（1064）	熙寧元寶（1068）	元祐通寶（1086）	元祐通寶（1086）													
S -33	開元通寶（唐 621）	開元通寶（唐 621）	開元通寶（唐 621）	咸平元寶（998）	景德元寶（1004）	祥符元寶（1009）	景祐元寶（1034）	皇宋通寶（1038）	皇宋通寶（1038）	皇宋通寶（1038）	皇宋通寶（1038）	治平元寶（1064）	元豊通寶（1078）	元祐通寶（1086）	元祐通寶（1086）	紹聖元寶（1094）	聖宋元寶（1101）	宣和通寶（1119）	淳熙元寶（1174）	嘉泰通寶（南宋1201）
S -34	開元通寶（唐 621）	淳化元寶（990）	至道元寶（995）	天聖元寶（1023）	皇宋通寶（1038）	熙寧元寶（1068）	元豊通寶（1078）	聖宋元寶（1101）	聖宋元寶（1101）	聖宋元寶（1101）	政和通寶（1111）	□□元寶								
S -35	欠番																			
S -36	開元通寶（唐 621）	開元通寶（唐 621）	咸平元寶（998）	天聖元寶（1023）	天聖元寶（1023）	嘉祐通寶（1056）	熙寧元寶（1068）	聖宋元寶（1101）	淳熙元寶（南宋1174）											
S -37	開元通寶（唐 621）	景德元寶（1004）	祥符通寶（1009）	天聖元寶（1023）	天聖元寶（1023）	景祐元寶（1034）	熙寧元寶（1068）	元豊通寶（1078）	元豊通寶（1078）	元祐通寶（1086）	元祐通寶（1086）	紹聖元寶（1094）	元符通寶（1098）	大観通寶（1107）	政和通寶（1111）	唐國通寶（南唐959）	咸淳元寶（南宋1265）	□□通寶	□宋□□	
S -38	太平通寶（976）	景德元寶（1004）	祥符通寶（1009）	祥符通寶（1009）	景祐通寶（1034）	熙寧元寶（1068）	元豊通寶（1078）	政和通寶（1111）	嘉定通寶（南宋1208）	嘉定通寶（南宋1208）	紹定通寶（南宋1228）	□□□□								
S -39	開元通寶（唐 621）	開元通寶（唐 621）	開元通寶（唐 621）	至道通寶（995）	嘉祐通寶（1056）	熙寧元寶（1068）	元豊通寶（1079）	元符通寶（1098）	元符通寶（1098）	政和通寶（1111）	背「十三」									
S -40	皇宋通寶（1038）	皇宋通寶（1038）	皇宋通寶（1038）	元豊通寶（1078）	元祐通寶（1086）	元祐通寶（1086）	紹聖元寶（1094）	政和通寶（1111）	政和通寶（1111）	政和通寶（1111）	嘉定通寶（南宋1208）	開慶通寶（南宋1259）	□□通寶							
他	皇宋通寶（1038）	□祐元寶																		

第６表　銭種枚数一覧表

	銭種類	初鋳年号	枚数	国名	枚数
1	半両	B.C.175	1	前漢	1
2	開元通寶	621	26	唐	26
3	咸泰元寶	925	1	前蜀	1
4	周通元寶	955	2	後周	2
5	唐國通寶	959	1	南唐	1
6	太平通寶	976	2	北宋	286
7	淳化元寶	990	2	北宋	
8	至道元寶	995	5	北宋	
9	咸平元寶	998	5	北宋	
10	景徳元寶	1004	11	北宋	
11	祥符元寶	1009	8	北宋	
12	祥符通寶	1009	5	北宋	
13	天禧通寶	1017	3	北宋	
14	天聖元寶	1023	17	北宋	
15	明道元寶	1032	2	北宋	
16	景祐元寶	1034	7	北宋	
17	景祐通寶	1034	1	北宋	
18	皇宋通寶	1038	46	北宋	
19	至和元寶	1054	3	北宋	
20	至和通寶	1054	1	北宋	
21	嘉祐元寶	1056	2	北宋	
22	嘉祐通寶	1056	10	北宋	
23	治平元寶	1064	8	北宋	
24	熙寧元寶	1068	22	北宋	
25	熙寧重寶	1071	10	北宋	
26	元豊通寶	1078	41	北宋	
27	元佑通寶	1068	24	北宋	
28	紹聖元寶	1094	11	北宋	
29	元符通寶	1098	8	北宋	
30	聖宋元寶	1101	4	北宋	
31	大観通寶	1107	4	北宋	
32	政和通寶	1111	21	北宋	
33	宣和元寶	1119	1	北宋	
34	宣和通寶	1119	2	北宋	
35	紹興元寶	1131	1	南宋	17
36	淳熙元寶	1174	3	南宋	
37	紹熙元寶	1190	1	南宋	
38	嘉泰通寶	1201	2	南宋	
39	嘉定通寶	1208	4	南宋	
40	紹定通寶	1228	2	南宋	
41	淳祐元寶	1241	1	南宋	
42	皇宗元寶	1253	1	南宋	
43	開慶通寶	1259	1	南宋	
44	咸淳元寶	1265	1	南宋	
合計	44 銭種類	B.C.175 ～ A.D.1265	334		334

第７表　一緡の枚数・重量一覧表

（5 面目南側緡列の一覧）		
緡	枚数	重量
s－1	－	－
s－2	87 枚	315.9 g
s－3	97 枚	375.5 g
s－4	97 枚	358.3 g
s－5	96 枚	360.7 g
s－6	97 枚	353.6 g
s－7	97 枚	359.1 g
s－8	97 枚	346.2 g
s－9	97 枚	350.5 g
s－10	97 枚	346.2 g
s－11	97 枚	358.7 g
s－12	98 枚	358.7 g
s－13	97 枚	357.3 g
s－14	97 枚	357.5 g
s－15	90 枚	331.3 g
s－16	97 枚	349.7 g
s－17	97 枚	352.4 g
s－18	103 枚	380.1 g
s－19	98 枚	362.3 g
s－20	91 枚	340.2 g
s－21	101 枚	368.1 g
s－22	98 枚	349.5 g
s－23	98 枚	354.0 g
s－24	96 枚	347.1 g
s－25	100 枚	351.9 g
s－26	97 枚	341.9 g
s－27	97 枚	351.5 g
s－28	106 枚	357.1 g
s－29	98 枚	345.7 g
s－30	96 枚	341.7 g
s－31	87 枚	350.0 g
s－32	96 枚	361.6 g
s－33	99 枚	354.1 g
s－34	97 枚	339.0 g
s－35	－	－
s－36	99 枚	352.3 g
s－37	97 枚	356.0 g
s－38	97 枚	360.1 g
s－39	95 枚	357.6 g
s－40	113 枚	408.0 g
バラ銭	14 枚	47.9 g
合計	3,708 枚	13,509.3 g

○銭の文字判読

銭の銭銘判読については第５表に見られるように 44 銭種、334 枚が判読された。

この埋蔵銭の性格を知るためには、銭の銭種初鋳年号の一番新しいものが埋蔵銭の時期により近いものであり、この埋蔵銭の年代を決定できる要素の一つである。

○一番古い銭

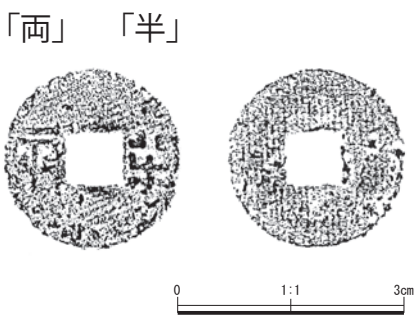
一番古い銭は前漢 B.C.175 年の「半両」銭1枚が確認された。

特徴としては、直径 2.3㎝、四角い孔は一辺7㎜と通常の孔より大きく、厚さ 1㎜を測る。表面の左右に２文字が描かれ、左文字は「両」、右文字は「半」とある。外縁及び中心の四角い孔縁は擦り減っており、あまりはっきりしない。裏面は無紋である。外縁及び中心の四角い孔縁は擦り減っており、あまりはっきりしない。重さは 2.20 ｇである。

但し、半両銭は初鋳造年代が「八銖半両」（B.C.186 年）・「四銖半両」（B.C175 年）の２種類あり、ここでは「四銖半両」として報告する。１銖は 0.67 ｇであり、４銖で 2.68 ｇである。

本品は 2.2 ｇであり、少しの誤差がある。

半両銭は、中国最初の統一貨幣で出土例は極めて少ない。



第 41 図　半両銭　拓影図

○埋蔵銭時期の認定

今のところ一番新しい鋳造銭は南宋銭の咸淳通寶　（1265）１枚である。

この埋蔵銭の時期は中世前半の鎌倉時代（西暦 1185 年～ 1333 年）と考えられる。

今回の埋蔵銭は、銭の使用期間が長かったと思われ、銭の厚さが薄いもの、中には文字部が脱落したり、銭面に穴が開いたり、縁が欠けたものなども含まれている。枚数を数えるのに注意が必要であり、極端に銭が小さいものや極端に薄いものなどがあり、数え間違いの原因となるケースがある。

○緡の枚数の確認

一緡の枚数は 97 枚が 17 緡と最も多く、次に１・２枚前後する 98 枚が５緡、96 枚４緡、99 枚が２緡、87 枚が２緡で他は一緡であった。（なお、緡で取り上げる際、取り残しや他の緡と一緒に取り上げたケースもあったかもしれない。）

97 枚を一緡の基準としていたようであるが、今回の銭の中には非常に薄いもの、小さいもの、悪銭というものが含まれていることから、枚数の基準プラス大まかな重さで緡を補正していた可能性があったことが考えられる。この現象については緡が確認された他の遺跡でもこのような見解をしているかは不明である。

○緡の重量

５面目南側の緡総グラム数（バラ銭は除く）は 13,461.4 ｇであり、一緡の重量の平均値は 354.24g である。※この重量については錆び、泥のクリーニングを徹底的に行ったものではなく、最低限行なったもので、何グラムかは少なくなると思われる。その為、350 ｇを平均値としたい。

緡数 1,060 ×一緡 350 ｇでこの埋蔵銭の総重量は「371,000 ｇ」で約 371.0㎏となる。

○緡紐

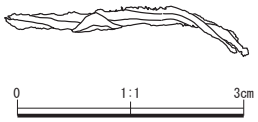
調査時に緡紐について見てみると緡の上下端部に結び目が認められる。銭緡の中端には藁が２本細い撚りをかけた状態のものが通っており、一番長い藁紐を実測図として掲載する。（第 42 図）

長さは 3.2㎝、紐の太さは２㎜である。

自然科学分析で藁紐は稲藁であるとの結果が得られている。

藁を水に湿らせ木槌で敲き２本を軽く撚っている状態で使用している。

緡銭の両端部の結び目は、実測を試みるがわからなかった。



第 42 図　緡紐実測図

○国名について

前漢（半両：１枚）、唐（開元通寶：26 枚）、前蜀（咸泰元寶：１枚）、後周（周通元寶：２枚）、

南唐（唐國通寶：１枚）、北宋銭（286 枚）、南宋銭（17 枚）、合計 334 枚

今回報告では、数％の銭銘を確認したに過ぎないが、一番古い銭として「半両銭」１枚が出土した。前元（B.C.175 年）「四銖半両」である。

○埋蔵銭を埋めた時代背景

埋蔵銭については落城などの際に人為的に隠ぺいされたもの、戦火が迫った事による一時避難と合わせて銭を急遽地中に埋めたなどが言われる。

この埋蔵銭は、急遽銭を埋めることを迫られた中世の前橋の様子を見て取れる。

今回の 100,000 枚を超える枚数を考えると、屋敷内にこの古銭を入れられる丁度良い甕、木箱を用意する時間が無かった可能性が指摘でき、戦乱や不慮の災害に対する突発的な危険回避のため、急遽地中に埋めたなどが考えられる。

この土坑にカマス袋に入れた埋蔵銭だが、この埋めた場所には何も印らしいものはなかったが、火山灰・パミスを多く含む特徴的な砂質土で埋めている。他の土とは判別出来るようになっていると考えられる。

結局、その埋めた当事者は埋めた場所に戻ってこれず、今回の発掘調査まで埋蔵銭は日の目を見なかったわけである。

○最新銭貨による時期特定

最新の鋳造年代を持つ銭貨で時代区分の設定を試みられている。「出土渡来銭の埋没年代」（是光 1985）での４期５区分、「出土備蓄銭と中世後期の銭貨流通」（鈴木 1992）埋蔵銭の数量的分析結果と分析資料を取り入れ８期区分、「埋蔵時期の推定と最新銭」（永井 1994）では、９期の区分を行なっている。

本遺跡の場合は、一番新しい最新銭名が咸淳元寶（1265）、南宋銭１枚であることから是光区分第１期（14 世紀前半）、鈴木区分第１期（13 世紀第四四半期中心）、永井区分第１期（13 世紀第四四半期～ 14 世紀第一四半期中心）に該当している。

銭銘を確認できたのは、全体数約 106,000 枚中の解明できたのは 334 枚であり、0.00315％とごく一部のため、今後の調査でもっと新しい銭貨が認められることも考えられるが、いずれにしても是光・鈴木・永井３先生方の時期区分の第１期と今のところ古い部類の埋蔵銭ということにはかわりない。

今回の埋蔵銭の時期は、鎌倉時代と考えられる。

○今後の銭貨の調査について

現状の銭貨の中には、銅 100％のもの以外にアルミニウム系の合金で作られているものもあり、銅銭はまだ残存状況は良いが、アルミニウム系の金属については銭本体や銭銘を含めて腐食が進んでいるため早めの調査が必要である。

本遺跡の埋蔵銭の調査報告は以上のとおりである。今後の埋蔵銭の調査については十分に期待したい。

（大塚　昌彦）

引用・参考文献

白石光男 1988『村東遺跡』前橋市教育委員会
金子正人 2009『総社村東 02 遺跡』前橋市教育委員会
山下歳信 1999「第Ⅴ章　群馬県内出土の埋納銭（備蓄銭）等と上大屋中組出土銭について」『上大屋中組遺跡』群馬県勢多郡大胡町教育委員会
山本千春 2011「埋納備蓄銭（一括出土銭）の構成」『大渡道場遺跡』前橋市教育委員会
永井久美男編 1994『中世の出土銭　―出土銭の調査と分類―』兵庫埋蔵銭調査会
永井久美男 1996『日本出土銭総覧』兵庫埋蔵銭調査会
永井久美男 2020「埼玉県蓮田市　新井堀の内遺跡の埋蔵銭」『出土銭貨第 38 号』出土銭貨研究会
上野真由美 2020『新井堀の内遺跡』埼玉県 公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団第 464 集
松田　哲 2020「諏訪木遺跡Ⅴ」『諏訪木遺跡Ⅴ 上之古墳群第 3・4 号墳』埼玉県熊谷市教育委員会 第 38 集
青木克尚 2000『根岸遺跡（第3次・第4次）』埼玉県深谷市埋蔵文化財 発掘調査報告書第 16 集
櫻木晋一 2009『貨幣考古学序説』慶応義塾大学出版会
谷口　栄他　2000『埋められた渡来銭　－中世の出土銭を探る－』葛飾区郷土と天文の博物館
橋口定志 2003「埋蔵銭をめぐる諸問題」『戦国時代の考古学』高志書院
神﨑　前・藤田慎一 2016『中津居館跡Ⅱ』岩国市教育委員会　第2集
白石光男 2011『大渡道場遺跡』前橋市教育委員会
狩野吉弘・大山知久 1993『大屋敷遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
大山知久・真塩欣一 1994『大屋敷遺跡Ⅱ」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
大山知久・坂口好孝 1995『大屋敷遺跡Ⅲ」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
大山知久・坂口好孝 1995「カマド構築材採掘坑」『大屋敷遺跡Ⅲ」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
齋藤仁志・坂口好孝 1996『大屋敷遺跡Ⅳ」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
井野誠一・齋藤仁志・吉田聖二 1997『大屋敷遺跡Ⅴ」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
鈴木雅治・髙橋一彦 2000『大屋敷遺跡Ⅵ」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
田辺義昭 2015「菅谷遺跡群Ⅰ」高崎市教育委員会　高崎市文化財調査　高崎市文化財調査報告書 348 集
是光吉基 1986「出土渡来銭の埋没年代」『出土渡来銭－中世－』ニューサイエンス社
鈴木公雄 1992「出土備蓄銭と中世後期の銭貨流通」『史学』（第六一巻第三・四号）三田史学会
永井久美男 1994「埋蔵時期の推定と最新銭」『阿波海南大里出土銭－中世期大量埋蔵銭の調査報告書－』徳島海南町教育委員会
松田誠一郎他 2000『山王廃寺～山王廃寺等Ⅴ遺跡発掘調査報告書～』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
池田史人他 2007『山王廃寺～平成 18 年度調査報告～』前橋市教育委員会
池田史人他 2009『山王廃寺～平成 19 年度調査報告～』前橋市教育委員会
池田史人他 2010『山王廃寺～平成 20 年度調査報告～』前橋市教育委員会
山下歳信他 2011『山王廃寺～平成 21 年度調査報告～』前橋市教育委員会
山下歳信他 2012『山王廃寺～平成 22 年度調査報告～』前橋市教育委員会
大塚昌彦 2017「居館内大型竪穴住居の特異なカマド構造　－今井学校遺跡 9 号住居のＬ字形カマド－」『利根川 39』利根川同人

【総社村東 03 遺跡】

写　真　図　版

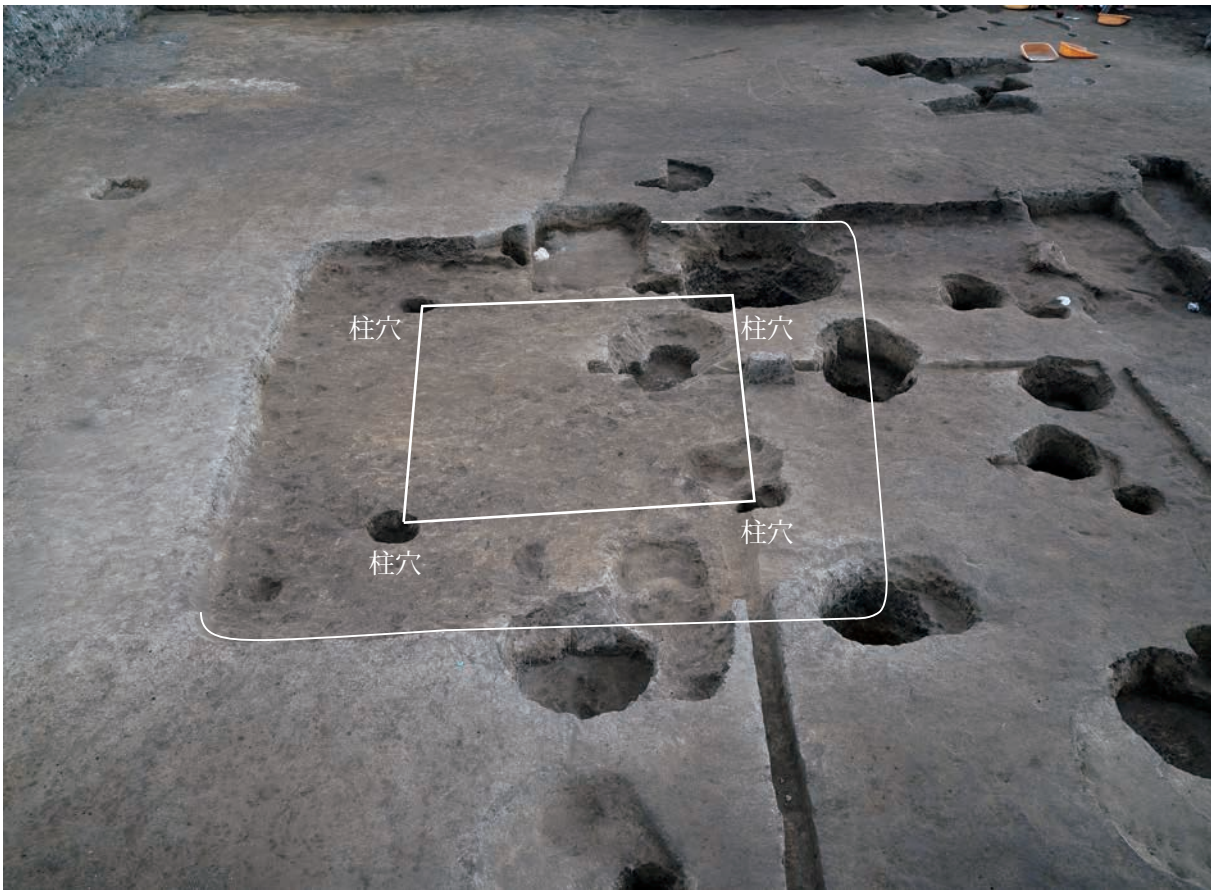
写 真 目 次

図版１　遺跡全景（ドローン撮影）南から
（右：赤城山、中央：子持山、左：小野子山）
遺跡全景（ドローン撮影）
図版２　１号住居（H-1）　完掘写真
２号住居（H-2）　完掘写真
図版３　３号住居（H-3）　完掘写真
１・２・３号掘立柱建物跡
（B-1・B-2・B-3）完掘写真
図版４　４号住居（H-4）　カマド
21 号土坑（D-21）①
21 号土坑（D-21）②
21 号土坑（D-21）　西側
土器埋設遺構（22 号遺構）　遺物出土状況
北西から
土器埋設遺構（22 号遺構）　遺物出土状況
北から
土器埋設遺構（22 号遺構）　炭化材出土状況
西から
土器埋設遺構（22 号遺構）　焼土分布状況
北東から
図版５　１号土坑（D-1）
２・３号土坑（D-2・3）
４号土坑（D-4）
５号土坑（D-5）
６号土坑（D-6）
７号土坑（D-7）
８号土坑（D-8）
10 号土坑（D-10）
11 号土坑（D-11）
12 号土坑（D-12）
16 号土坑（D-16）
17 号土坑（D-17）
20 号土坑（D-20）
30 号土坑（D-30）
32 号土坑（D-32）
37 号土坑（D-37）
図版６　38 号土坑（D-38）
42 号土坑（D-42）
50 号土坑（D-50）
52 号土坑（D-52）①
54・51 号土坑（D-54・51）
55 号土坑（D-55）
59 号土坑（D-59）　東から
46・60 号土坑（D-46・60）
61・66 号土坑（D-61・66）
完掘状況　北西から
発掘調査風景
図版７　48・42 号土坑（D-48・42）①
43 号土坑（D-43）①
48・42 号土坑（D-48・42）②
43 号土坑（D-43）②
水滴出土状況（H-3)
52 号土坑（D-52）②
１号井戸（I-1）
風倒木痕　西方向に倒れる
図版８【埋蔵銭発見当初】
埋蔵銭　発見状況
18・19 号土坑（D-18・19）　西から
図版９【埋蔵銭１面目】
埋蔵銭　１面目　確認状況　真上から
南側面　確認状況　南から
図版 10【埋蔵銭１・２面目】
１面目①　南側緡崩れ　確認状況　西から
１面目②　東側確認状況
１面目③　中央確認状況
１面目④　西側確認状況
２面目①　西半分確認状況　真上から
図版 11【埋蔵銭２面目】
２面目②　東半分確認状況　真上から
２面目③　確認状況　南東から
２面目④　東側確認状況　真上から
２面目⑤　中央確認状況　真上から
２面目⑥　西側確認状況　真上から
図版 12【埋蔵銭３面目】
３面目①　確認状況　真上から
３面目②　緡紐確認状況
３面目③　緡紐確認状況
３面目④　緡紐確認状況
図版 13【埋蔵銭４面目】
４面目①　確認状況　真上から
４面目②　確認状況　１貫文を縛った紐
４面目③　確認状況　１貫文を縛った紐
４面目④　確認状況　１貫文を縛った紐
４面目⑤　確認状況　１貫文を縛った紐
図版 14【埋蔵銭５面目】
５面目①　確認状況　真上から
５面目②　緡紐確認状況
５面目③　緡紐確認状況
５面目④　緡紐確認状況
５面目⑤　緡紐確認状況
図版 15【埋蔵銭６面目】
６面目①　確認状況　真上から
６面目②　北壁筵　確認状況　南から
６面目③　確認状況　南から
６面目④　確認状況　南から
６面目⑤　確認状況　南から
図版 16【埋蔵銭７面目】
７面目①　確認状況　真上から
７面目②　緡紐確認状況
７面目③　緡紐確認状況
７面目④　１貫文を縛った紐　確認状況
７面目⑤　緡紐確認状況
図版 17【埋蔵銭８面目】
８面目①　確認状況　真上から
８面目②　北壁植物繊維　確認状況　南から
８面目③　西壁確認状況
８面目④　緡紐確認状況
８面目⑤　北壁植物繊維　確認状況　南東から
図版 18【埋蔵銭９面目】
９面目①　確認状況　真上から
９面目②　１貫文を縛った紐確認状況
９面目③　緡紐確認状況
９面目④　１貫文を縛った紐確認状況
９面目⑤　緡紐確認状況
図版 19【埋蔵銭 10 面目】
10 面目①　確認状況　真上から
10 面目②　緡紐確認状況
10 面目③　緡紐確認状況
10 面目④　西壁植物繊維敷物　確認状況
10 面目⑤　緡及び１貫文を納めた状況
図版 20【埋蔵銭 11 面目①】
11 面目①　確認状況　南から
11 面目②　確認状況　南東から
11 面目③　確認状況　東から
11 面目④　床面　緡銭・１貫文設置状況
一緡と縄紐
図版 21【埋蔵銭 11 面目②】
莚に包まれていた植物繊維と１貫文・緡の
圧痕埋蔵銭調査状況
莚植物圧痕・１貫文 圧痕状況①
莚植物圧痕・１貫文 圧痕状況②
莚植物圧痕・１貫文 圧痕状況③
図版 22【埋蔵銭 11 面目③】
１貫文の圧痕確認状況①
１貫文の圧痕確認状況②　南から
１貫文の圧痕確認状況③　東から
１貫文の圧痕確認状況④　西から
北壁の植物繊維確認状況①
北壁の植物繊維確認状況②
半両銭 1/1　B.C.175 年（前漢）
図版 23【埋蔵銭 11 面目④】
底面部調査
１貫文の窪み
筵の下の土塊①
筵の下の土塊②
18 号土坑　地層断ち割り取り上げ状況①
18 号土坑　地層断ち割り取り上げ状況②
埋蔵銭調査状況
埋蔵銭の取り上げに使った道具類
図版 24　出土遺物（１）
縄文・埴輪・１号住居（H-1）
・２号住居（H-2）①
図版 25　出土遺物（２）
２号住居（H-2）②
図版 26　出土遺物（３）
３号住居（H-3）①
図版 27　出土遺物（４）
３号住居（H-3）②・土坑①
図版 28　出土遺物（５）
土坑②・ピット・井戸・遺構外
図版 29　出土遺物（６）
土器埋設遺構（22 号遺構）
須恵器坏・平瓶

遺跡全景（ドローン撮影）南から（右：赤城山、中央：子持山、左：小野子山）

遺跡全景（ドローン撮影）

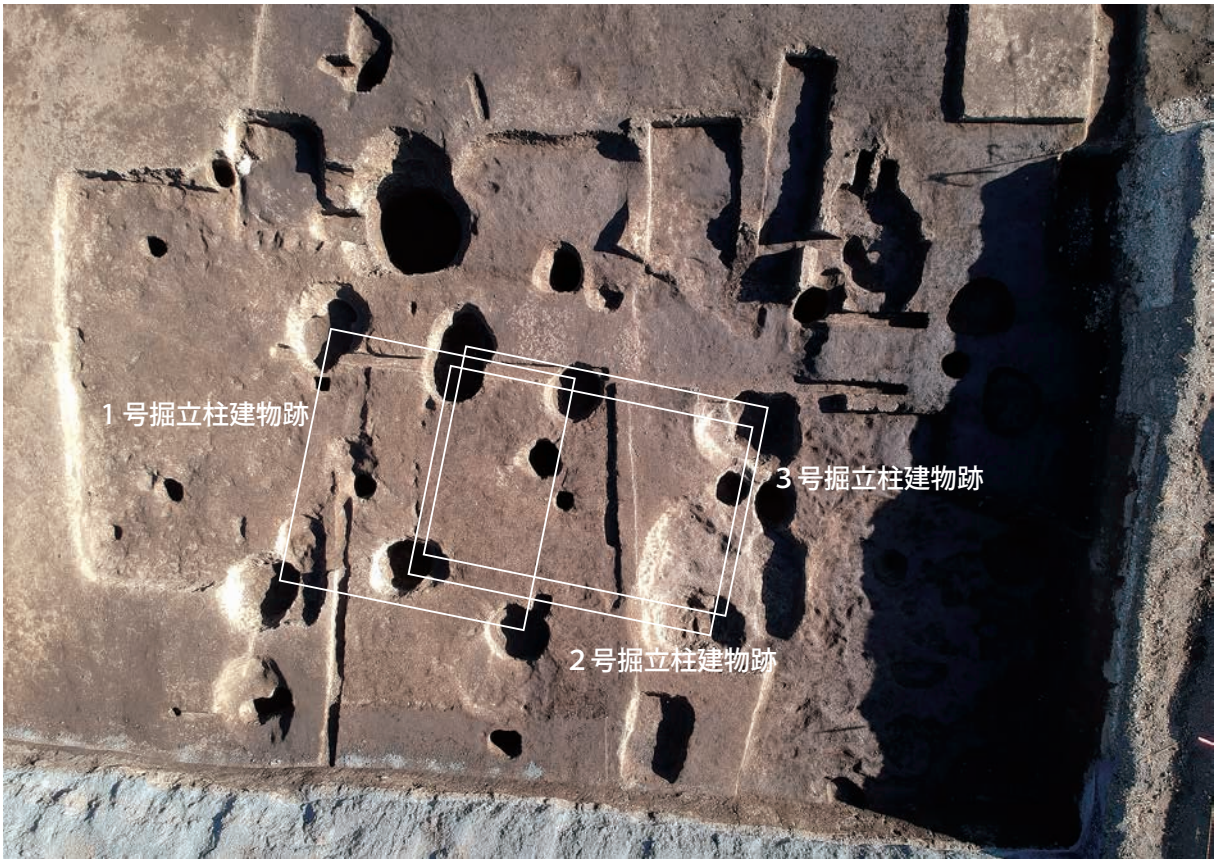
図版 2



1 号住居（H-1） 完掘写真

2 号住居（H-2） 完掘写真

3 号住居（H-3） 完掘写真



1・2・3 号掘立柱建物跡（B-1・B-2・B-3）完掘写真

図版 4

4 号住居（H-4）　カマド

21 号土坑（D-21）①

21 号土坑（D-21）②

21 号土坑（D-21）　西側

土器埋設遺構（22 号遺構）　遺物出土状況　北西から

土器埋設遺構（22 号遺構）　遺物出土状況　北から

土器埋設遺構（22 号遺構）　炭化材出土状況　西から

土器埋設遺構（22 号遺構）　焼土分布状況　北東から

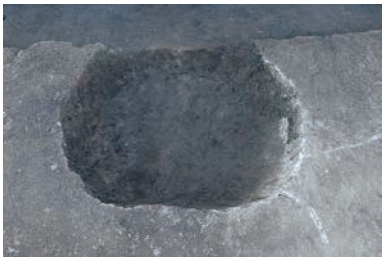
1 号土坑（D-1）

2・3 号土坑（D-2・3）

4 号土坑（D-4）

5 号土坑（D-5）

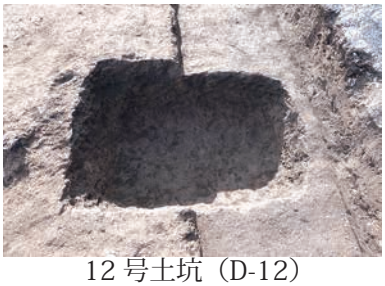
6 号土坑（D-6）


7 号土坑（D-7）

8 号土坑（D-8）

10 号土坑（D-10）

11 号土坑（D-11）


12 号土坑（D-12）

16 号土坑（D-16）

17 号土坑（D-17）

20 号土坑（D-20）

30 号土坑（D-30）

32 号土坑（D-32）

37 号土坑（D-37）

図版 6

38 号土坑（D-38）

42 号土坑（D-42）

50 号土坑（D-50）

52 号土坑（D-52）①

54・51 号土坑（D-54・51）

55 号土坑（D-55）

59 土坑（D-59）　東から

46・60 号土坑（D-46・60）

61・66 号土坑（D-61・66）

完掘状況　北西から

発掘調査風景

48・42 号土坑（D-48・42）①

43 号土坑（D-43）①

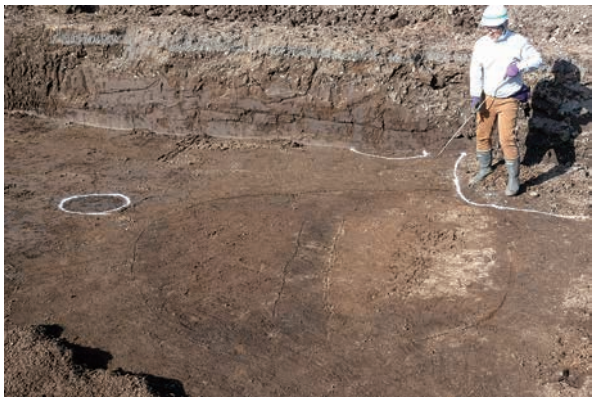
48・42 号土坑（D-48・42）②

43 号土坑（D-43）②

水滴出土状況（H-3）

52 号土坑（D-52）②

1 号井戸（I-1）



風倒木痕　西方向に倒れる

図版８　【埋蔵銭発見当初】

埋蔵銭　発見状況

18・19 号土坑（D-18・19）　西から

埋蔵銭　1 面目　確認状況　真上から

南側面　確認状況　南から

図版 10　【埋蔵銭 1・2 面目】

1 面目①　南側縁崩れ　確認状況　西から

1 面目②　東側確認状況

1 面目③　中央確認状況

1 面目④　西側確認状況

2 面目①　西半分確認状況　真上から

２面目②　東半分確認状況　真上から

２面目③　確認状況　南東から

２面目④　東側確認状況　真上から

２面目⑤　中央確認状況　真上から

２面目⑥　西側確認状況　真上から

図版 12　【埋蔵銭 3 面目】

3 面目①　確認状況　真上から

3 面目②　緡紐確認状況

3 面目③　緡紐確認状況

3 面目④　緡紐確認状況

４面目①　確認状況　真上から

４面目②　確認状況　１貫文を縛った紐

４面目③　確認状況　１貫文を縛った紐

４面目④　確認状況　１貫文を縛った紐

４面目⑤　確認状況　１貫文を縛った紐

図版 14　【埋蔵銭 5 面目】

5 面目①　確認状況　真上から

5 面目②　緡紐確認状況

5 面目③　緡紐確認状況

5 面目④　緡紐確認状況

5 面目⑤　緡紐確認状況

６面目①　確認状況　真上から

６面目②　北壁筵　確認状況　南から

６面目③　確認状況　南から

６面目④　確認状況　南から

６面目⑤　確認状況　南から

図版 16　【埋蔵銭 7 面目】

7 面目①　確認状況　真上から

7 面目②　緡紐確認状況

7 面目③　緡紐確認状況

7 面目④　1 貫文を縛った紐　確認状況

7 面目⑤　緡紐確認状況

８面目①　確認状況　真上から

８面目②　北壁植物繊維　確認状況　南から

８面目③　西壁確認状況

８面目④　緒紐確認状況

８面目⑤　北壁植物繊維　確認状況　南東から

図版 18　【埋蔵銭 9 面目】

9 面目①　確認状況　真上から

9 面目②　1 貫文を縛った紐確認状況

9 面目③　緡紐確認状況

9 面目④　1 貫文を縛った紐確認状況

9 面目⑤　緡紐確認状況

10 面目①　確認状況　真上から

10 面目②　緡紐確認状況

10 面目③　緡紐確認状況

10 面目④　西壁植物繊維敷物　確認状況

10 面目⑤　緡及び 1 貫文を納めた状況

図版 20　【埋蔵銭 11 面目①】

11 面目①　確認状況　南から

1 1 面目②　確認状況　南東から

11 面目③　確認状況　東から

11 面目④　床面緡銭　1 貫文設置状況

一緡と縄紐

莚に包まれていた植物繊維と 1 貫文・緡の圧痕埋蔵銭調査状況

莚植物圧痕・ 1 貫文圧痕状況①

莚植物圧痕・ 1 貫文圧痕状況②

莚植物圧痕・ 1 貫文圧痕状況③

図版 22　【埋蔵銭 11 面目③】

1 貫文の圧痕確認状況①

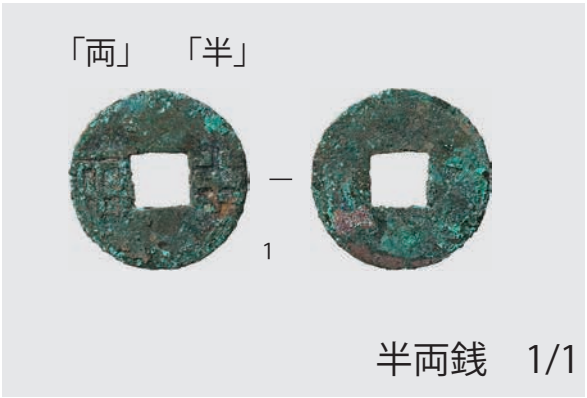
1 貫文の圧痕確認状況②　南から

1 貫文の圧痕確認状況③　東から

1 貫文の圧痕確認状況④　西から

北壁の植物繊維確認状況①

北壁の植物繊維確認状況②



半両銭 1/1　B.C.175 年（前漢）

底面部調査

1 貫文の窪み

筵の下の土塊①

筵の下の土塊②

18 号土坑　地層断ち割り取り上げ状況①

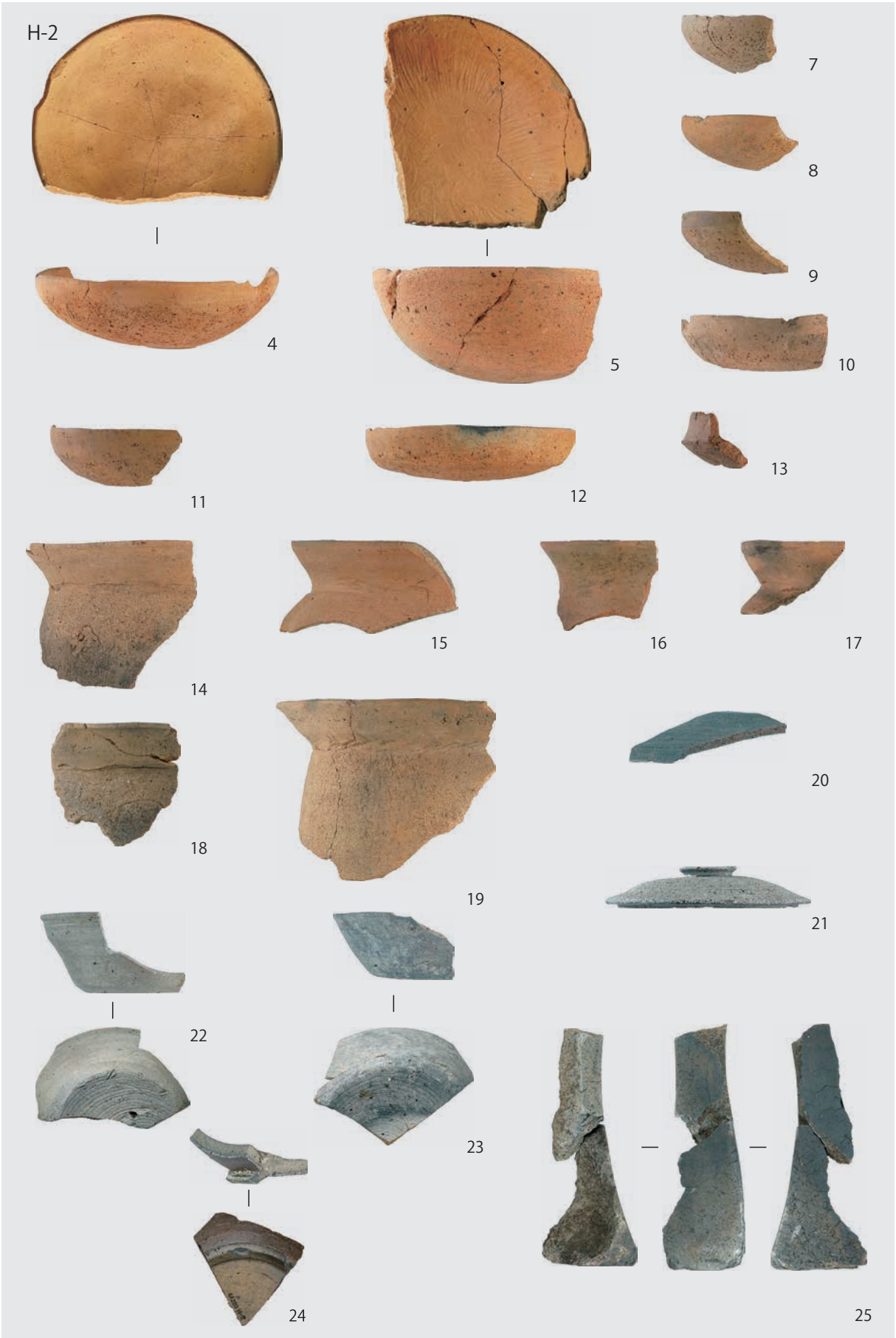
18 号土坑　地層断ち割り取り上げ状況②

埋蔵銭調査状況

埋蔵銭の取り上げに使った道具類

図版 24

出土遺物（1）縄文・埴輪・1 号住居（H-1）・2 号住居（H-2）①



出土遺物（2）2 号住居（H-2）②

図版 26

出土遺物（3）3 号住居（H-3）①

出土遺物（４）３号住居（H-3）②・土坑①

図版 28

出土遺物（５）土坑②・ピット・井戸・遺構外

22 号遺構

1

1/3

22 号遺構

2

1/4

出土遺物（６）土器埋設遺構（22 号遺構）　須恵器坏・平瓶

報 告 書 抄 録

ふ り が な	そうじゃむらひがしゼロサンいせき
書　　名	総社村東０３遺跡
副 書 名	工場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	大塚昌彦　髙橋　敦
編 集 機 関	株式会社　甲セオリツ
所　在　地	〒370−1124　群馬県佐波郡玉村町大字角渕 5358-2　TEL（0270）64−6098
発 行 年 月 日	西暦　2023 年 9 月 30 日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ソウジャムラヒガシゼロサン 総社村東０３ イセキ 遺跡	グンマケンマエバシシソウジャマチソウジャ 群馬県前橋市総社町総社 オオアザオオヤシキ 大字大屋敷 2062、2063-2、 2063-31-14-4	10201	4A280	36 度 24 分 19 秒	139 度 01 分 57 秒	2022.12.10 〜 2023. 1.22	260㎡	工場建設

フリガナ 所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ソウジャムラヒガシゼロサン 総社村東０３ イセキ 遺跡	集落	古墳時代	住居跡　1 軒	土師器（坏） 須恵器（甕）	奈良時代の須恵器把手付き平瓶が底を上にした状況で埋設している。 埋蔵銭、北宋銭を中心に、緡で綴られた古銭が 1 列 35 行前後、3 列で 10 段カマス袋に埋蔵、およそ約 106,000 枚の出土と考えられ、群馬県では現在のところ最多の出土である。半両銭の出土があり。
		奈良時代	住居跡　3 軒 掘立柱建物跡　3 棟 土器埋設遺構　1 基 土坑　36 基 ピット　1 基	土師器（坏） 須恵器（坏・蓋・把手付き平瓶・壺・甕） 土師器（坏・盤・甕） 鉄製品（刀子・鉄滓） 土壁漆喰壁	
	屋敷	中世	井戸　1 基 土坑　13 基 ピット群　1 カ所	軟質土器（鍋） 陶器（鉢） 古銭　1,060 緡以上 （約 106,000 枚以上）	

要　約	古墳時代の住居跡は 1 軒、奈良時代の住居跡は 3 軒と 1 軒掘立柱建物跡 3 棟の建物のが発見されたが地山のやや窪んだ黒色土の多い地点に遺構が集中している。 掘立柱建物跡からスサ入り土壁に白土が 5 ㎜厚で塗られた漆喰壁の存在が注目される。掘立柱建物は 1 間× 1 間の建物が 3 棟確認された。 また、この住居、掘立柱建物が廃棄された後、焼土炉状・炭化材の広がりが持ってなど特異な痕跡が存在しているがその性格を捉えることはできなかった。 埋蔵銭、北宋銭を中心に、緡で綴られた古銭が 1 列 35 行前後、3 列で約 160 緡、10 段で埋蔵しており、およそ 106000 枚以上の出土と考えられる。群馬県では現在のところ最大の出土である。なお、前漢 B.C.175 年前の半両銭の出土があった。

群馬県前橋市

総社村東０３遺跡

— 工場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

令和 5 年 9 月 30 日印刷・発行

編集　株式会社甲セオリツ
発行　前橋市教育委員会
　　株式会社デンソーワイパシステムズ
　　株式会社甲セオリツ
印刷　朝日印刷工業株式会社